

# 田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要

1987年3月

柏原市教育委員会

## はしがき

河内平野の東には、河内と大和を分ける生駒山、二上山、葛城山と続く山なみが連なる。このうち生駒山地の南端、二上山塊との間には、大和盆地から流れる唯一の河川である大和川が西へと流れ出ている。

大和川が河内平野へ流れ出る地点の北側、生駒山地の南端は、国指定史跡である高井田横穴群をはじめ、平尾山古墳群などの大規模な古墳群の存在する地域である。この地域は、大和と並んで当時の日本文化の中心たる「河内」の歴史を知る上でも重要な足掛りの地と言うことができよう。

柏原市域の3分の2以上を占めるこれらの山地は、最近までブドウを主とする果樹園として拓かれた以外、大きな開発を見ることなく近年に至った地域であったが、最近のブドウ生産の不振や柏原市の総合開発計画、国分駅前再開発事業の施行に伴って、果樹園が急ピッチで宅地化している。

このような動きの中で田辺古墳群・田辺墳墓群が、宅地造成に先だつ発掘調査により発見され、しかもその基數は約30基に及んだ。これらの墳墓は、その位置や発見遺物から推測して古代の著名な氏族である『田辺史』家の奥津城であることが判明した。また、今日まで不明瞭であった古墳時代終末期から奈良時代に及ぶ墳墓の変遷が順おって理解できるようになり、古墳時代研究においてきわめて重要な遺跡と見られるに至った。

本墳墓群と関連する田辺遺跡群も本市教育委員会によって、従来から発掘調査、立会調査が実施されてきているが、未だ分布調査が徹底していない地区も多く、それぞれの範囲確認調査が急務となりつつ、今後、周知の遺跡や未確認の遺跡も含め、地域開発に先だってこれらの文化財の保存・活用をどのようにはかり、地域と一体化してゆくかが課題となりつつある。

また、今回の調査に本古墳群中、7・8号墳の2基を事業者の好意より開発地域内の公園に移築保存することが決定している。調査関係者、及びご協力いただいた地元の方々に深く感謝すると共に、これを機会により一層本市文化財の保護にご理解とご協力を賜りたいものと考えている。

昭和62年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和56年度に実施した宅地造成地内に所在する田辺古墳群・墳墓群の緊急事前発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、山下住建株式会社社長 山下武夫氏の依頼に基づくものであり、調査に要した諸費用は、同株式会社の負担によるものである。
3. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課 松岡良憲、柏原市教育委員会社会教育課 北野 重が試掘調査を行った結果に基づいて、柏原市教育委員会社会教育課 竹下 賢、花田勝広を担当者とし、昭和57年2月24日に着手し、同年4月27日をもって終了した。
4. 調査に際して、国際仏教大学名誉教授 藤沢一夫氏、帝塚山短期大学講師 山本昭氏、奈良大学教授 水野正好氏の指導を受けたほか、現場では、奈良国立文化財研究所 坪井 清足、田中 琢両氏の教示を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 本書の執筆は、水野正好先生の指導の下に花田勝広が担当した。
6. 調査・整理の参加者は下記の通りである。

石田 博	安村 俊史	大塚 淳子	松田 光代	山内 都
井宮 好彦	上条 裕典	坂井 利和	佐藤 尚	藤沢 敏則
山下 祐司	山中 茂	石田 成年	前田 佳久	鐵 英記
竹下 彰子	竹下 典江	蜂谷 直子	苅野 紗子	松岡 由紀子
麻 栄三郎	朝田 行雄	井上 岩次郎	奥野 清	川端 長三郎
岸本 重夫	玉野 正一	西岡 武重	分才 春信	道旗 甚蔵
森口 喜信	山田 貞一	大谷 真弓	乃一 敏恵	松成 早苗
村口 ゆき子	植野 造三	泉 雄二	藤田 広幸	中西 克広
木下 保明	谷口 京子			

# 田辺古墳群・墳墓群

## 本文目次

### 第Ⅰ章 調査経過

- |            |   |
|------------|---|
| 1. 調査に至る経緯 | 1 |
|------------|---|

### 第Ⅱ章 遺跡の立地とその環境

- |                    |   |
|--------------------|---|
| 1. 田辺古墳群・墳墓群の地理的環境 | 3 |
| 2. 田辺古墳群・墳墓群の歴史的環境 | 3 |

### 第Ⅲ章 遺構

- |                  |    |
|------------------|----|
| 1. 田辺古墳群の調査とその遺構 | 5  |
| 2. 田辺墳墓群の調査とその遺構 | 22 |

### 第Ⅳ章 遺物

- |               |    |
|---------------|----|
| 1. 田辺古墳群とその遺物 | 30 |
| 2. 田辺墳墓群とその遺物 | 39 |

### 第Ⅴ章 結語

- |                  |    |
|------------------|----|
| 1. 田辺古墳群・墳墓群の群構成 | 44 |
| 2. 田辺史氏と氏墓をめぐって  | 49 |

## 挿 図 目 次

第1図 調査地区	第21図 9号墓実測図
第2図 田辺廐寺跡東塔実測図	第22図 古墳出土の土器実測図(1)
第3図 周辺の主要遺跡分布図	第23図 古墳出土の土器実測図(2)
第4図 古墳分布図	第24図 平安時代以降の土器・鉄釘
第5図 1号墳平面図	第25図 鉄釘実測図(1)
第6図 周溝を共有する古墳	第26図 鉄釘実測図(2)
第7図 4号墳周溝内の土器	第27図 鉄釘実測図(3)
第8図 6号墳石室実測図	第28図 鉄釘実測図(4)
第9図 8号墳前庭部の土器出土状況	第29図 刀子実測図
第10図 10号墳石室 釘出土状況	第30図 17号墳出土の耳環
第11図 11号墳石室実測図	第31図 墳墓群出土の土器実測図
第12図 12号墳石室実測図	第32図 塚実測図
第13図 17号墳主体部実測図	第33図 平瓦実測図
第14図 18号墳・19号墳主体部実測図	第34図 貨幣拓影
第15図 土塙1実測図	第35図 7号墓出土の鉸具
第16図 土塙2実測図	第36図 造墓模式図
第17図 墳墓群分布図	第37図 19号墳木棺復元図
第18図 1・2・3・6・7号墓実測図	第38図 木櫃の復元と計画尺
第19図 4・5・8号墓実測図	第39図 田辺史氏の墓域
第20図 7号墓主体部実測図	第40図 墳墓の分布

## 表 目 次

第1表 古墳群・墳墓群の規模一覧表
第2表 古墳出土遺物の一覧表
第3表 釘の全長の比較
第4表 墳墓出土遺物の一覧表

## 図版目次

図版1 遺構	2・10・11号墳実測図	図版29 遺構	8号墳全景・石室
図版2 遺構	6・15号墳実測図	図版30 遺構	8号墳前庭部土器出土状況
図版3 遺構	7・8号墳実測図	図版31 遺構	9・10号墓石室
図版4 遺構	1号墳石室実測図	図版32 遺構	10号墳出土状況
図版5 遺構	2号墳石室実測図	図版33 遺構	10・11号墳石室・棺台と副葬品
図版6 遺構	3号墳石室実測図	図版34 遺構	9・12号墓全景・石室
図版7 遺構	4号墳石室実測図	図版35 遺構	12・13号墳全景・石室
図版8 遺構	5号墳石室実測図	図版36 遺構	10・11・1号墳全景・石室
図版9 遺構	7号墳石室実測図	図版37 遺構	15号墳全景・16・17号墳主体部
図版10 遺構	8号墳石室実測図	図版38 遺構	17号墳全景・耳環出土状況
図版11 遺構	6・10・16号墳石室実測図	図版39 遺構	18号墳全景・主体部
図版12 遺構	13・14号墳石室実測図	図版40 遺構	19号墳全景・主体部
図版13 遺構	石室土層断面図(1)	図版41 遺構	土塚1・土塚2
図版14 遺構	石室土層断面図(2)	図版42 遺構	3・5・6・10・17号墳部分拡大
図版15 遺構	石室土層断面図(3)	図版43 遺構	墳墓群全景
図版16 遺構	石敷き遺構実測図	図版44 遺構	1・2号墓
図版17 遺跡	古墳群・墳墓群全景	図版45 遺構	3号墓、1~3号墓部分拡大
図版18 遺跡	古墳群全景	図版46 遺構	4・8号墓主体部
図版19 遺構	東群・西群全景	図版47 遺構	8号墓の埠上遺物出状況
図版20 遺構	1号墳全景・奥壁と棺床	図版48 遺構	石敷き遺構
図版21 遺構	1・2号墳全景	図版49 遺構	9号墓主体部
図版22 遺構	1・2号墳石室	図版50 遺構	1・4・5号墓・石敷き・墓道
図版23 遺構	3号墳全景・石室	図版51 遺物	古墳群出土遺物
図版24 遺構	3・4号墳石室	図版52 遺物	古墳群出土遺物
図版25 遺構	4号墳全景・石室	図版53 遺物	墳墓群出土遺物
図版26 遺構	5号墳全景	図版54 遺物	墳墓群出土遺物
図版27 遺構	5・6号墳全景・石室	図版55 遺物	鉄釘・耳環・貨幣
図版28 遺構	7号墳全景・石室		

# 第Ⅰ章 調査経過

## 1. 調査に至る経緯

試掘調査は、開発対象面積（40,000m<sup>2</sup>）内の尾根上や南斜面を中心に12本のトレンチを設定した。その結果、大芝地区（古墳群）と大芝西原地区（古墓群）のトレンチ内で、溝や土器片が確認された。協議の結果、緊急に事前発掘調査を実施することになった。

大芝地区は、試掘調査によって検出された溝が見られる尾根鞍部に沿って調査区を設定し、 Yunpo によって表土層を除去した。古墳は、尾根南斜面に東西60mにわたって分布しており、19基を検出した。本古墳群の調査は2月24日から4月12日までの日程で実施した。

大芝西原地区は、遺物の出土した尾根上から南斜面に調査区を設定し、Yunpo によって表土層を除去した。検出された遺構は、火葬墓・木棺墓からなる9基の墳墓である。本墳墓群の調査は3月22日から4月12日までの日程で実施した。

現地説明会は、古墳群調査中の2月13日に実施し、一般住民・研究者約300人の参集があった。また、4月24日に柏原市片山庵寺跡の現地説明会終了後、約50人の見学があった。

調査終了前に、7・8号墳の2基が移築保存が決定していたため、両石室の移築にそなえて、石室ナンバーを付して、造成地内に残し、他の石室は、全て柏原市教育委員会が保管することとなり、昭和58年1月14日に運搬作業を実施し終了した。



第1図 調査地区

## 第II章 遺跡の立地とその環境

### 1. 田辺古墳群・墳墓群の地理的環境

大和の諸川を集めた大和川が、生駒・二上山塊に扼されつつ西へ流れ、広大な河内平野に出る。そうした出口に当るのが本市柏原市である。この市域を西から見ると大和川や石川のつくる沖積低地の平野部から、一段高い台地・扇状地にかわり、ついで玉手山等の丘陵へ移行し、さらに低い山々に移るという変化に富んだ地形となっている。

市域を構成する岩類は、花崗岩を主とした深成岩及び片麻岩類で、大和川北岸の生駒山地を形成する。南岸は北岸と異なり、大半が新生代の大坂層群や定ヶ城累層からなる。また、生駒山地の最南端、高井田や玉手山では、凝灰岩層が認められる。田辺地域では、これらの地層以外に寺山火山岩等が複雑に入り込んでいる。遺跡の所在する田辺丘陵は、大阪層群であり、多数の砂礫・粘土層からなり、サヌカイト原石を含んでいる。従って、残存した古墳の盛土もこの土壤の粘土層を用いており、比較的粘質である。

### 2. 田辺古墳群・墳墓群の歴史的環境

大和川南岸の玉手山・田辺・国分地域には、古墳75基、寺院址9ヶ所、集落址5ヶ所が密集して分布する。詳細については、『柏原市史』第1巻・第4巻に譲り、ここでは、古墳時代後期から奈良時代の環境を記述する。

玉手山丘陵は、弥生時代前期から後期まで継続して集落として利用されているが、古墳時代前期には突如墓域に変貌する。古墳時代後期になっても安福寺横穴群・玉手山東横穴群や小円墳が形成されており、何群かの墓地が占地しているようである。安福寺横穴群は33基からなり、6世紀後半を中心として形成されていて、人物・動物などの線刻壁画が知られている。横穴内には、棺台を造付けるものや、陶棺・木棺を用いるものが確認されている。

原川の南側丘陵には脊田山古墳群があり、30基の横穴式石室墳で構成され、6世紀後半から7世紀初頭にわたって形成された古墳群である。家形石棺を内部に納めた横穴式石室も含み、從来から田辺史氏の奥津城かと想定されてきている。また、最も近接する寺院址としては原山廃寺跡がある。

田辺・国分地域には、実態の明らかでない芝山古墳群や新発見の本古墳群の2群が認められているのみである。奈良県境の金山周辺に将来さらに6世紀を中心とする古墳群が発見される

可能性があろう。

このように大和川南岸地域は、各地区の丘陵ごとに群集墳が点在し、大和川北岸の約1300基からなる平尾山古墳群などとは、性格、成立過程を異にする。平尾山古墳群については、白石太一郎氏の所見がある。<sup>註1</sup> 6世紀から群の形成が始まり<sup>註2</sup> 7世紀中葉まで古墳の築造が続くタイプの群集墳であり、同氏は「平尾山型」と云うべき類型を設定している。内部主体は、横穴式石室（両袖・片袖・無袖）や横口式石槨・小石室（箱式石棺）などからなり、石室の構造上の変化が明確に把えられる。

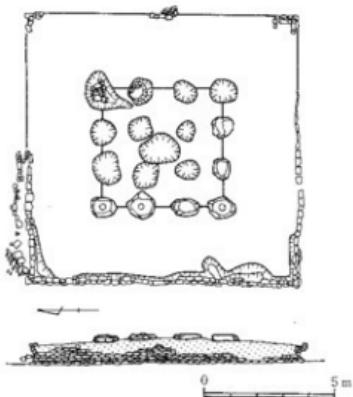
白鳳時代になると、最初に原山庵寺が建立され、続いて奈良時代前期に五十村・片山・田辺・円明庵寺等が「氏寺」として建ちならぶに至るのである。律令の施行に伴って、安宿郡に郡衙が建てられ、墨書き器や硯を伴った掘立柱建物群の円明遺跡が発見されている。<sup>註3</sup>

安宿郡には、賀美郷（現在の羽曳野市飛鳥・駒ヶ谷）・尾張郷（玉手山周辺）・資母郷（国分・東条・田辺）の3郷みられる。南の賀美郷は、竹内街道が通り、北の資母郷は、竜田道があり、平城京造営時、或はそれ以降繁栄がもたらされた。

田辺庵寺跡は、現春日神社境内に遺存し、昭和46年に大阪府教育委員会によって発掘され、主要堂塔を明らかにしている。<sup>註4</sup> 田辺庵寺跡は、百濟系渡来氏族「田辺史」一族の氏寺と考えられる。塔跡基壇は一辺10m、3重塔東西2塔を備える。東塔は埠積み基壇、西塔は瓦積み基壇という特異な在り方を寺にみることができる。金堂は、東西約17m×南北11.5mで基壇は平瓦積みである。壇上には、安置されていた仏像の台座が原位置に据わっている。

田辺の台地上には田辺遺跡があり、飛鳥・白鳳・奈良時代の井戸・建物址が検出され、「田辺史」一族の集落と考えられている。また、田辺池の北側には瓦窯址が2基露出しており、田辺庵寺跡所用屋瓦を生産したものと考えられている。<sup>註5</sup>

聖武天皇の詔（741年）により、諸国に国分寺・国分尼寺が建立されるが、河内の場合、国府は志紀郡（藤井寺市）・国分寺・国分尼寺は安宿郡にあった。国分寺は、昭和54年に調査が実施され、塔跡・門跡が確認され史跡として保存されている。特に塔跡は、凝灰岩を使った壇上積基壇、石階段などが良好な状態で検出されている。このように安宿郡は、飛鳥・白鳳・奈良時代を通じ平城京の門戸として交通運輸上重要な地域であり、加えてこの地に居住する渡来系氏族の動向も知るうえでは他に例をみない地域である。



第2図 田辺庵寺跡東塔実測図



第3図 周辺の主要遺跡分布図

- |           |            |            |             |             |           |
|-----------|------------|------------|-------------|-------------|-----------|
| 1. 鳥坂寺跡   | 5. 田辺廃寺跡   | 9. 田辺古墳群   | 13. 玉手山古墳群  | 17. 四分中学西古墳 | 21. 芬山古墳群 |
| 2. 片山廃寺跡  | 6. 河内国分尼寺跡 | 10. 安堂山古墳群 | 14. 安福寺横穴群  | 18. おいなり古墳  |           |
| 3. 五十村廃寺跡 | 7. 河内国分寺跡  | 11. 平尾山古墳群 | 15. 玉手山東横穴群 | 19. 田辺瓦窯址   |           |
| 4. 原山廃寺跡  | 8. 青谷廃寺跡   | 12. 高井田横穴群 | 16. 松岳山古墳群  | 20. 田辺遺跡    |           |

## 第III章 遺構

### 1. 田辺古墳群の調査とその遺構

#### 古墳群の構成

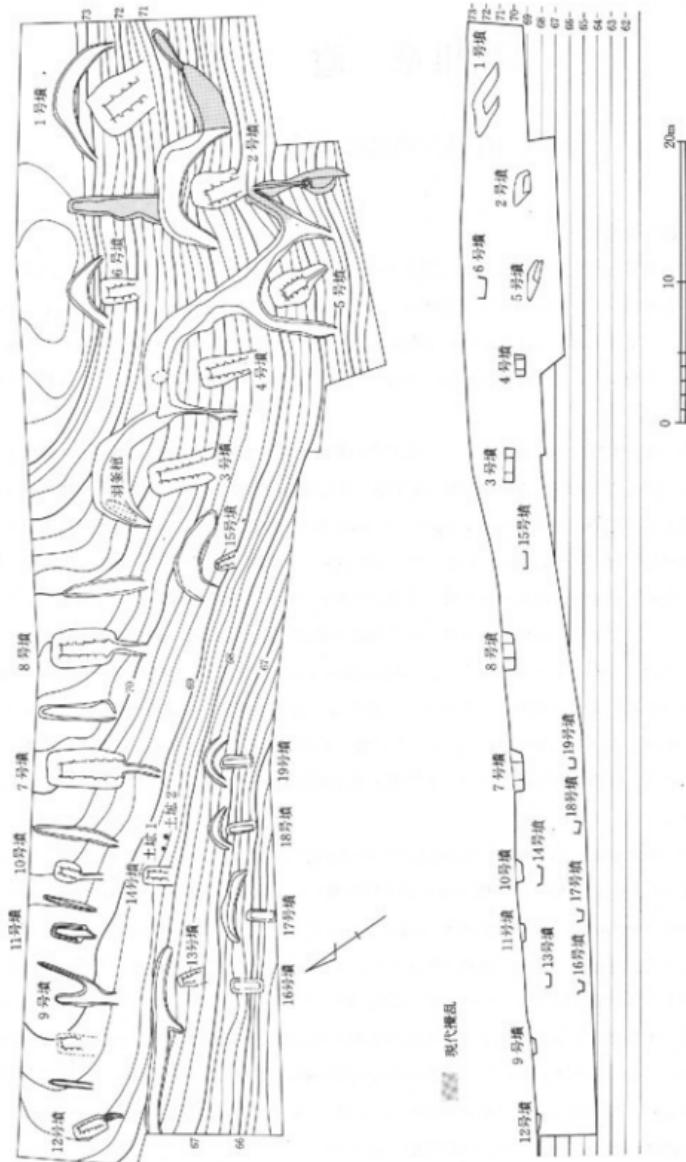
田辺古墳群は、大和川南岸の田辺遺跡の東方400mの高位段丘上に位置する。この段丘は明神山系より西へのびており、本古墳群はその最高所、標高73mをはかる丘陵の尾根上と南斜面に存在し、東西80m、南北25mをその墓域とする。古墳群は立地条件・墳丘形態・内部構造等によって大別すると、3種類の葬法に分類できる。以下、各様式の古墳についてA類より順次説明を加えていきたい。

**A類** 本古墳群の中で最も多く、内部構造が無袖式横穴式石室である。墳形は、円墳と方墳があり、調査区内東側に6基の円墳（1号墳～6号墳）、西側に3基の方墳（7号墳～9号墳）が位置する。円墳の規模は直径4.1mから8.5mがあり、幅0.6m～1.3mの周溝が付属する。石室は奥壁幅1.1mを測る例（1号墳）や0.75mの例（4号墳・5号墳）があり、規模も一様でない。特に3号墳・4号墳・5号墳は周溝を共有しており、周溝の切り合いや溝底のレベル差からみて、3号墳→4号墳→5号墳の順で古墳の築造が考えられる。各古墳の主軸方向は、N-5°-WからN-24°-Eまであり、方位の軸からみても2グループが認められる。方墳は、尾根上の2基が周溝を共有して存在する。墳形は、盛土が流失して遺存せず決定しがたいが、周溝の形状より1辺8.5m前後のもの（7号墳・8号墳）と、1辺5mのもの（9号墳）に復元できよう。各古墳の主軸方向は、7号墳・8号墳がN-31°-E、9号墳がN-31°-Eの軸角をとる。

**B類** 本古墳群中の西側部分の尾根上とその南斜面に位置し、2基の方墳（10号墳・11号墳）と4基の円墳（12号墳・13号墳・14号墳・15号墳）からなる。規模は、方墳が1辺4.2m、円墳が直径3m～4.1mである。内部構造は全て小石室であり、奥壁幅40cm～50cm前後の狭長な石室である。墓塚はコ字形や隅丸方形を呈し、小振りな石材が用いられる。古墳の中には周溝を共有する10号墳・11号墳があり、同一規模、同一方位を持ち、きわめて計画的に配置される。

**C類** 本群は丘陵斜面の最下段に円墳が並列する。墳丘の規模は直径3m前後で盛土がほとんど伴わないものと考えられる。内部主体は釘留の組合式木棺で直葬される。主体部の方位は2方向あり、N-35°-Eの例（16号墳・17号墳）、N-27°-Eの例（18号墳・19号墳）があり、規則性が認められ、規模も同規模墳と考えられる。

次に各群を構成する古墳について逐一その性格を記すこととしよう。



第4図 古墳分布図

## 1号墳

**位置** 本古墳群中最も東端に位置する。古墳は東から西へ伸びる標高70m～73.5mの尾根鞍部より、やや南へ下った比較的傾斜の強い斜面に築かれている。

**墳形** 急な斜面に築かれているため、墳形が崩れてしまっているが、北東部分に周溝が残存する。規模を復元すると直径8m前後の円墳と考えられる。周溝は幅1.5m、深さ15cmを測る。

最も周溝の幅広い東北隅から多量の須恵器の杯蓋（1～11）・壺（12～15）と鉄滓が1点出土した。

**墓塚** 南へ開口したコ字形の掘方で幅3.8m、長さは東側で5m、西側で4.1mを測る。深さは、奥壁部で90cmである。東と西の掘方の長さが違うのは、北東から南東への傾斜地に作られていることに起因する。墓塚内の石室と掘方の間の裏込め土は、下層には礫を混ぜた黄褐色粘質土（混礫）を用い、上層には粘性を帯びた黄褐色粘質土を積み上げている。

**石室** 南に開口した無袖式横穴式石室である。規模は現存長3.6m、奥壁幅1.1m、床面より一段目の基底石のみを残す。奥壁では鏡石として1.1m×0.6m大の石を横積みして用いる。

床面は拳大の石を敷いているが、後世の攪乱で原位置を留めているものは少ない。石室の中央よりやや奥壁寄りに幅80cm、長さ1m以上の石敷き部分があり、棺床として使用されていたものと思われる。

**遺物の出土状況** 石室の奥壁部分で鉄釘4本、床石の集石部分で12世紀代の瓦器椀2個が出土した。周溝では供獻土器と思われる須恵器の蓋14個、長頸壺6個体が出上した。

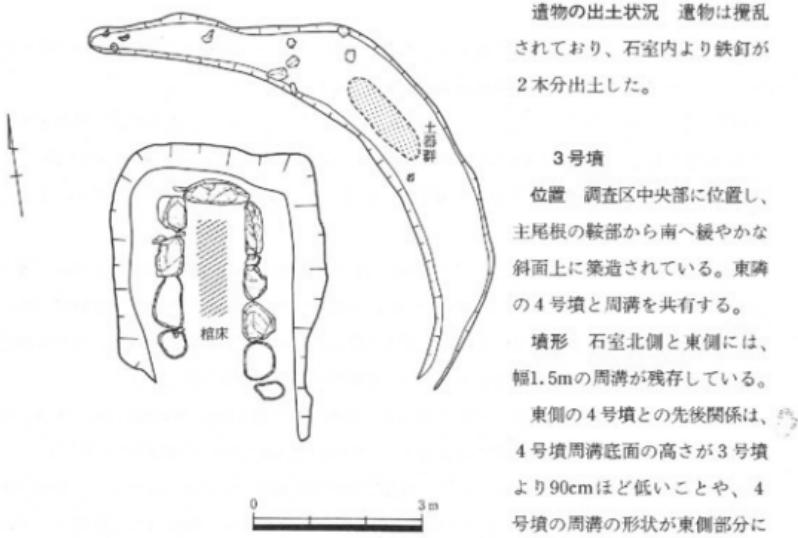
## 2号墳

**位置** 1号墳よりさらに南側の低い位置に立地し、標高約70mである。古墳は急な傾斜地上に造墓されているため尾根南斜面を削平している。

**墳形** 後世の開墾で墳丘は全て削平され、北側に半月状に幅1.2mの周溝が残存する。石室床面と石室北側の周溝の比高は1.2mを測り、大規模な斜面の地山カットを行っている。墳形は残存する周溝からみて、直径8m前後の円墳と考えられる。

**墓塚** 掘方は、隅が丸くなった矩形を呈し、東西2.5m、南北3.8m、深さは奥壁部で80cmを測る。掘方と石室との間の埋土は、明黄灰色土の単層である。

**石室** 盜掘・攪乱によってすでに大部分の石室石材が抜き取られ、わずかに奥壁よりの東西壁の1部が遺存するのみであるが、無袖式横穴式石室である。石室西壁と石室入口には、抜き取り穴が検出されており、奥壁の幅は90cmと復元できる。石室の規模は幅0.9m、残存長2.2m、床面に石敷きが認められる。奥壁には、割石を2個据え鏡石としている。床面からは12～13世紀代の瓦器椀が出土しており、後世に再利用されたことが窺われる。このため床面の石敷きはほとんど原位置を留めていない。



第5図 1号墳平面図

遺物の出土状況 遺物は擾乱されており、石室内より鉄釘が2本分出土した。

### 3号墳

位置 調査区中央部に位置し、主尾根の鞍部から南へ緩やかな斜面上に築造されている。東隣の4号墳と周溝を共有する。

墳形 石室北側と東側には、幅1.5mの周溝が残存している。

東側の4号墳との先後関係は、4号墳周溝底面の高さが3号墳より90cmほど低いことや、4号墳の周溝の形状が東側部分においていびつであることから、

3号墳が先行すると思われる。墳丘の規模は周溝の形状より直径8.5mの円墳と考えられる。

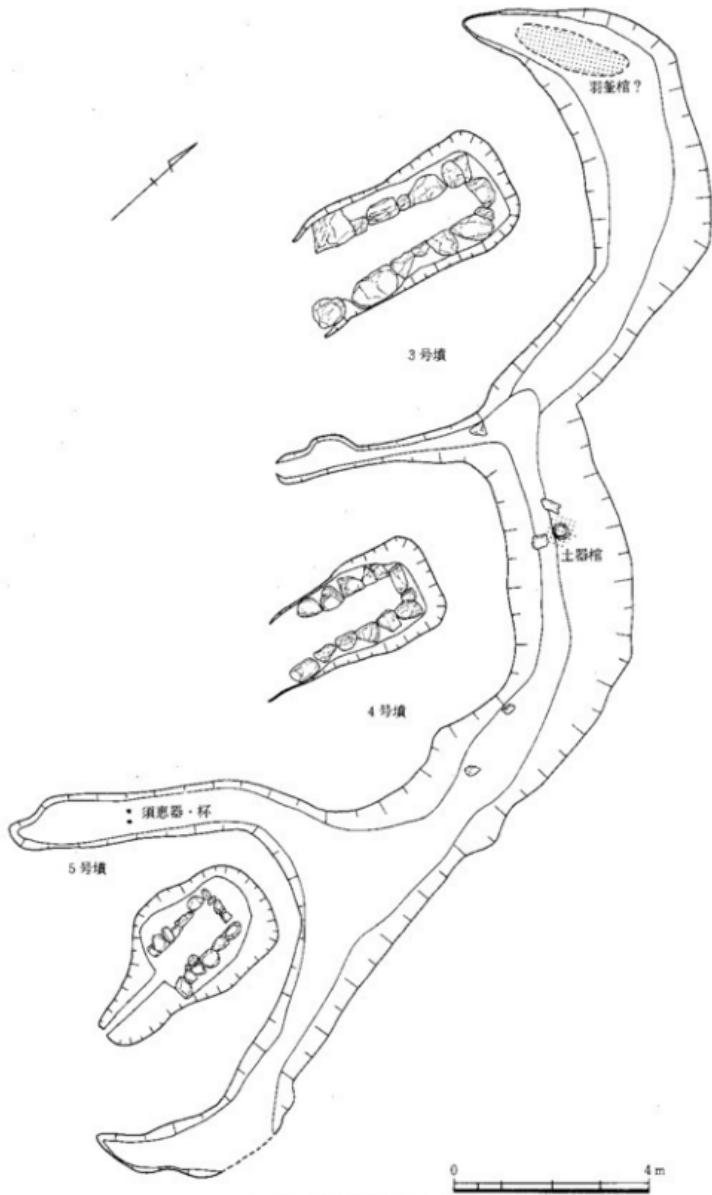
墓塚 南へ開口しコ字状の墓塚である。規模は幅2.4m、長さ5.1mを測る。深さは奥壁部で80cm、中央部東側壁で55cmと開口部に行くに従って浅くなる。

石室 開口方向は、N-17°-Eで無袖式横穴式石室である。石室規模は奥壁幅0.9mで残存長4.2mである。石室は基底石より2段目まで残存しており、比較的大きさの揃った石を使用している。奥壁では、鏡石として80cm×70cm大の石を縱積みに据え、2段目からは、横積みに架構している。両側壁は、大きさの揃った基底石を横長に据え、2段目からは横積みと小口積みを併用し、床面からほぼ垂直に、それよりやや持ち送り気味に架構している。また、石室壁面や石の隙間に念込みに詰め、ほぼ平坦に仕上げている。床面は拳大的円碟を敷いているが、後世に擾乱され原位置を留めているものは少ない。

遺物の出土状況 石室内では奥壁部分の敷石の下方で土師器の杯(41・43・44)、黒色土器の碗(45・46)が5個体出土した。石室前部でも瓦器の碗と壺(47)が多く認められ、後世の石室再利用が明白である。床面では鉄釘(17)が1本検出された。周溝北側では、土師の羽釜が2個体分細片となって出土しており、合口の羽釜棺の可能性が高い。

### 4号墳

位置 南側斜面に立地する中央部に位置し、3号墳と5号墳との間で、両墳と周溝を共有す



第6図 周溝を共有する古墳

る。

**墳形** 周溝は尾根斜面をコ字状に切断し、幅2.5m、深さ1.1mにする。しかし、3号墳と周溝を共有する部分は狭く、幅40cmとなる。墳形は、東側の周溝の形態から直径7~7.5mの円墳に復元できる。

**墓塚** コ字形を呈し幅1.8m、長さ4.2m、深さ70cmを測る。掘り込みは墳丘基底部から行なわれるが、傾斜する地形に影響されて奥壁部が最も深く70cmを測り、開口部に近くなるにしたがって浅くなる。

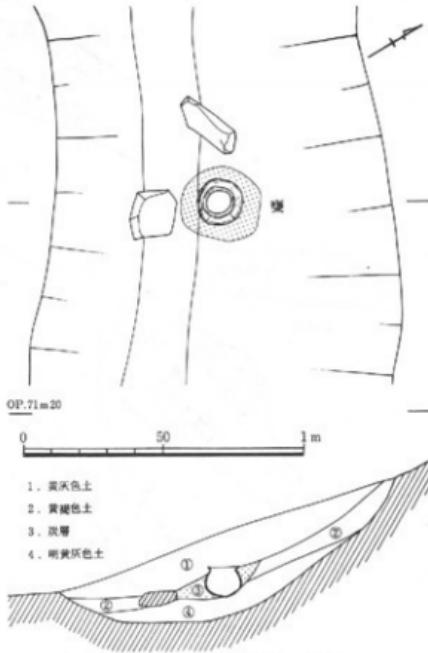
**石室** 南に開口する狭長な無袖式横穴式石室である。規模は幅0.7m、残存長2.9mで非常に小形の石室である。奥壁には鏡石として70cm×40cm大の不定形な石が、墓塚掘方の底部を若干掘削して縦積みに据えられ、内面が垂直になるように配慮してある。上部は、鏡石の傾きに応じて小石の大きさを変えて積み、水平面を形成している。石室は、基底石を横長に比較的浅く据えており、2段目から横積みと小口積みを併用して構築している。石室内の施設として、石室中央部に15cm×20cm大の置石が2個あり、奥壁側では残存しないが棺台と考えられる。石室入口には、15cm×10cm大の石が10個ほど残存し、玄室と前庭部を区分しており、閉塞石の一部と考えられる。

石室内では鉄釘以外全く出土せず、堆積土が乱れており、一部後世に攪乱されているようだ。

**周溝内の土器** 石室の背後の周溝内で直径18cm、器高18cmの土師器の壺(48)が1個体完形で出土した。壺は、周溝堆積土に穿ったビット内に据えられていることが確認された。ビット内には灰の充填があり、その上に壺が埋置してあった。時期は、平安時代前期(9世紀末)と考えられ、3号墳の石室内出土の土器類と同時期である。本遺構の性格は墓址である可能性が高いと考えられる。

### 5号墳

**位置** 3号墳・4号墳に連なり、丘陵南側の田辺池谷最下段に位置する。

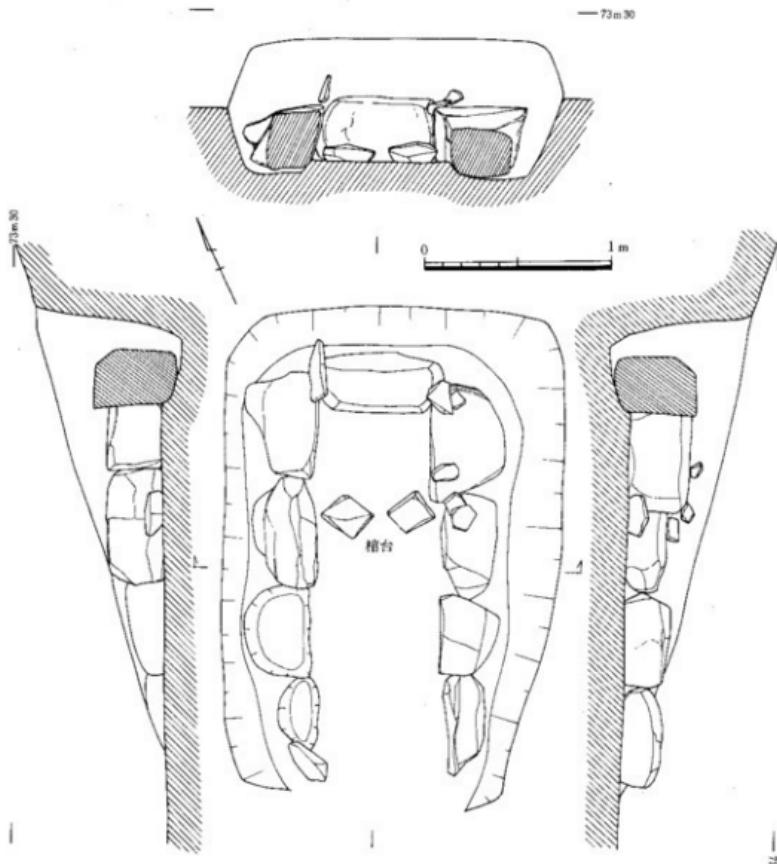


第7図 4号墳周溝内の土器

**墳形** 後世の削平でほとんど失われており、一部に黄褐色土が厚さ10cm認められる。周溝は幅1m前後で半月状に石室の周囲に残存している。直径6.3m前後の円墳と考えられる。

**墓塚** 南へ開口し幅2.2m～2.5m、長さ2.8mを測り、幅1.8mの墓道が付属する。5号墳の場合石室の規模、石材が小振であるにもかかわらず墓塚は大きく作っている。

**石室** 規模は全長1.8m、幅70cm、南へ開口する無袖式の横穴式石室である。盜掘や擾乱によって奥壁は抜き取られ、東西の両側壁の2段まで残存するのみである。側壁は割石を基底石とし、その上は小振りの石で小口積みしている。羨道は断面U字状となり、淡黄灰色土層が堆積する。



第8図 6号墳石室実測図

**遺物の出土状況** 石室内では鉄釘を1本検出したのみであるが、西側周溝の明黄褐色土層から、須恵器の杯(20・21)2個体が原位置で出土した。

#### 6号墳

**位置** 1号墳の西側10mに位置し、主尾根から南へ緩やかな斜面上に築造されている。

**墳形** 周溝は石室北側に半月状に残存し、周溝のカーブから直径4.1m前後の円墳に復元できる。周溝の幅は0.9m~1.2m前後、深さ15cmを測り、明黄褐色土層が堆積する。

**墓塚・石室** 南へ開口した墓塚はコ字形を呈し、幅2.5m、長さ3.8mを測る。墓塚と石室の間は狭く、黄褐色土を裏込め土としている。内部主体は幅90cm、長さ2.2mの無袖式横穴式石室である。石室は基底石と2段目の一端を残すのみであるが、裏込め土には石の抜き取り痕が残る。基底石は奥壁を含め全て横積みにしており、奥壁と両側壁の隙には、小石を小口積みにして閉じる。石室の施設として、奥壁より約40cmの位置に20cm大の石が2個据えられており、棺台の機能を果したものと思われる。

**遺物の出土状況** 石室内には鉄釘の細片のみで、他は周溝内より須恵器の蓋(22)と土師器の高杯(23)が出土した。これらの土器は周溝の底面直上に認められ、原位置を留めていると考えられる。

#### 7号墳

**位置** 古墳は、西へのびる主尾根上の鞍部に築造されている。8号墳とは石室・墳丘とともに同一方位を取り、周溝を8号墳・10号墳と共有する。

**墳形** 周溝は幅40cm~50cm前後、深さ70cmを測り、石室主軸と平行する。石室の北側では、後世の農道による削平が大きく周溝は確認できなかった。墳形は周溝の形状から一辺8.5m前後の方墳と思われる。

**墓塚** 中央部が少し開いた長方形プランを呈し、幅2.8m、長さ5.5m、深さ70cm前後である。尾根鞍部に位置するため、墓塚の規模・形態が正確に伝えられる。墓塚には幅60cm、長さ2.6mの墓道が付属する。墓道の深さは30cm、黄褐色土が堆積する。

**石室** 規模は全長4.35m、奥壁幅0.9mの狭長な無袖式横穴式石室である。盗掘によってすでに南半分の石が抜き取られ、わずかに奥壁と両側壁の一部を残すのみである。床面の貼土(明黄褐色砂質土)も削平の為に南半分が削られている。奥壁は80cm×90cm大の石を鏡石として横積みする。床面には、厚さ10cmほどの貼土を行い、その上に奥壁より約20cmの所で15cm×20cm大の石を2個、同じく1.4mの所で同大の石が1個据えられており、棺台と思われる。從って棺台は、玄室の中央より奥壁側に位置することとなる。石材は古墳群中最も大振りの石を用いている。

**遺物の出土状況** 石室の墓道付近はすでに擾乱を受けており、原位置を保つ遺物はないが、石室の前庭部より須恵器の蓋（34）、土師器の壺が出土している。しかし、奥壁と棺台部分は擾乱が少なく、北東の棺台石周囲に鉄釘（1・2・3）、南東の棺台石の周囲に鉄釘（4）が残存していた。また、平安時代の土師器の杯（42）が石室内から出土しており、後世に再利用されたと思われる。

#### 8号墳

**位置** 調査区の中央部に位置し、7号墳と周溝を共有する。

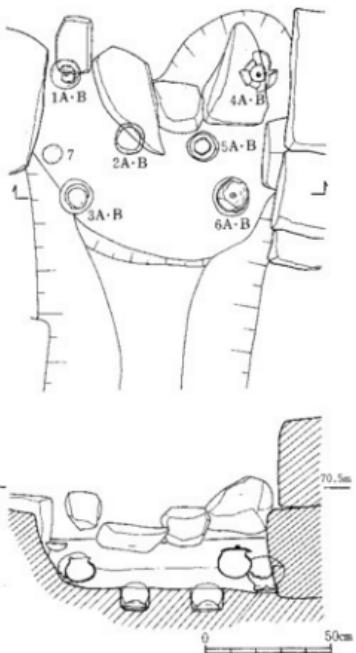
**墳形** 周溝は、尾根に直交して2本あり、幅1m前後、深さ20cmを測る。後世の開墾で墳丘が全て削平されているが、周溝の形状より方墳と考えられる。両周溝間の距離は、8.5mである。

**墓塚** 掘方は小判形を呈し、長径4.7m、短径2.7m、南側に幅90cm、長さ2.1mの墓道が付属する。石室の裏込めは、最下層を地山に近い礫が混った明黄褐色土で固め、次に淡黄灰色土、上層には若干粘性を帯びた黄褐色土が積まれる。

墓道は断面U字形で下層に淡黄灰色土、上層に明黄灰色土が堆積する。

**石室** 南側に開口した狭長な無袖式横穴式石室である。奥壁部は、鏡石として70cm×70cm大の石を横積みに据えている。両側壁は比較的大きさの揃った基底石を横長に据え、2段目からは横積みと小口積みを併用している。床面は15cmほど明黄褐色砂質土を貼り、その上に10cm×10cm大の角石を全面に敷く。玄室と羨道は、意識的に仕切り石によって区別されている。その外側には、閉塞石が4～5個残存する。玄室の空間規模は幅0.8m×2.6mとなる。床面の石敷下に排水溝が存在する。

**遺物の出土状況** 石室内には鉄釘12本と須恵器の高杯（24）が出土した。釘類は幅0.6m×長さ2mの範囲に分布する。木棺釘は奥壁部に2対（5・6）、仕切石側に2対（10・11）があり、各間に8本の釘（7～9・12・13・14・15・16）が検出されている。須恵器は釘の分布範囲の中央



第9図 8号墳前庭部の土器出土状況

部付近に散乱していた。仕切り石下には幅80cm、深さ15cmの浅い土塙がある。土塙内には、主軸にそって土器が3対見られる。その内容は、東側に4・5・6があり、西側に1・2・3・7が位置する。7を除いて他は、2個がセットで組み合されている。種類はA、須恵器の蓋の上に土師器の甕を伏せるもの〔1・4〕、B、土師器の杯の上に甕を伏せるもの〔2・5〕、C、土師器の甕に須恵器の蓋を合せるもの〔3・6〕の3種類の用い方が認められる。これらの土師類は、仕切石と閉塞石の直下から出土している事から、玄室に木棺が安置された段階に供獻されたものと考えられる。使用された土器は、1B(28)・2B(31)・4A(25)・4B(29)・5A(27)・5B(32)・6A(30)・6B(26)の土器実測図に対応する。

#### 9号墳

**位置** 調査区の西端部分に位置し、12号墳と周溝を共有する。東側には11号墳があり、周溝がY字状となり共有する。古墳の主軸は主尾根に直交する。

**墳形** 削平されて墳丘は全くなく、石室も大半が破壊されている。周溝の幅は7号墳・8号墳に比べて狭く石室の規模と比例する。両周溝間の距離は、5m前後で、周溝の形状から1辺5mの方墳と考えられる。

**墓塚・石室** 挖方、石室は共に破壊されており、わずかに東側壁の一部を残すのみである。石室の幅は、東側壁と西側の抜き取り穴から復元すれば75cmほどとなる。床面には、河原石を用いた石敷きがある。石材も比較的小振りである。石室は無袖式横穴式石室と考えられる。

**遺物の出土状況** 遺物は西側の石の抜き取り穴の内側で鉄釘が1本出土した。

#### 10号墳

**位置** 尾根の鞍部に位置し、7号墳・11号墳の間に占地する。11号墳と同一の石室主軸・周溝の方位N-47°-Eをとっている。

**墳形** 尾根に直交して周溝がある。東側は7号墳と周溝を共有し幅80cm、西側は11号墳と接し幅40cmの周溝である。両周溝間の距離は5m前後となり、一辺4.2mの方墳と思われる。

周溝は浅く15cm、明黄褐色土が堆積する。

**墓塚** 挖方は幅1.6m、長さ1.8mで小判形を呈し、排水溝が付属する。排水溝は、幅40cm、残存長1.7mを測り、削平が著しく挖方も残りがよくない。

**石室** 盗掘や攪乱によって大部分の石が抜き取られ、奥壁と東側壁の一部を残すのみであるが、奥壁が意識されており、復元幅50cm×長さ1.4mの横穴式石室が退化した小石室である。<sup>註6</sup>石室内の施設としては棺台石があり、奥壁側に1石、排水溝側に2石あり、両長間は85cmを測る。棺台は平たく、厚さ10cmの薄い石材である。

**遺物の出土状況** 石室から出土した遺物は鉄釘15本(18~31)、土師器の杯(35)・甕2個体

分である。釘の分布範囲は、幅 35 cm × 110 cm で棺台の位置に対応する。棺釘は、奥壁側に 7 本、棺台間に 6 本、前庭部側に 2 本が分布する。

木棺釘は東側に ⑤・⑥・⑦・⑬・⑭ があり、西側に ①・②・③・⑧ がある。小口部は、奥壁側では ①・③ と ⑤・⑥ の 2 対と中央の ④ があり、棺台間では、⑧・⑬ はが対と考えられる。④・⑭ は底板と短側板とを留めたものである。また、釘の散布から、木棺が腐食し解体する状況を知ることができる。

奥壁部の短側板の釘は、原位置より落下しているがほぼ旧位置を示す。ところが、⑨・⑩・⑪・⑫ は原位置ではなく内側に散布することから、短側板が棺内へ転倒したことと示すものと考えられる。

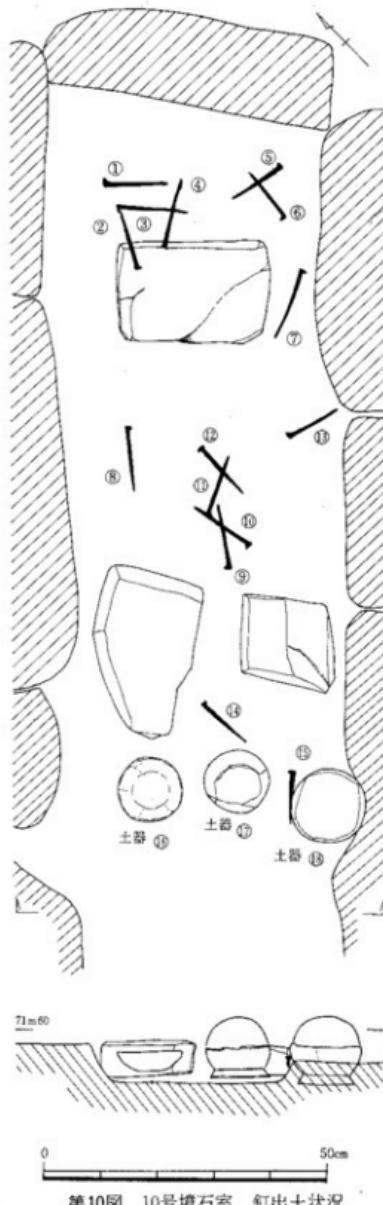
土器は、一列に土師器の杯・壺・甕の順で並ぶ。⑯は杯で口縁部を上にするが、ほかの甕 2 個は転立させる。土器は床面直上に位置し原位置を保っている。これらのことから、釘留の組合式木棺に接して、南側に供進されたものである。

### 11号墳

**位置** 10号墳の西側に位置し、古墳の規模主軸が同一方向・同規模である。

**墳形** 周溝は10号墳と同一方位 N - 47° - E を取り、同規模墳で墳形も 1 辻 4.2 m 前後の方墳と思われる。

**墓塚・石室** 掘方は幅 1.3m、残存長 2 m で隅丸長方形を呈す。奥壁部分は、攪乱塚によって切られ、石材も棺台石 1 石を残



第10図 10号墳石室 釘出土状況

すのみである。石室の幅は抜き取り穴間で40cm~50cmを測るから、復元すれば50cm前後となる。石室の南側に付属する排水溝があり、幅60cm、残存長1mを測り、黄褐色土が堆積する。

遺物の出土状況 遺存する遺物は少なく鉄釘(37)、土師器杯・須恵器高杯(36)が床面より浮いた形で出土しており、木棺内か、棺上に供進されていた可能性がある。

#### 12号墳

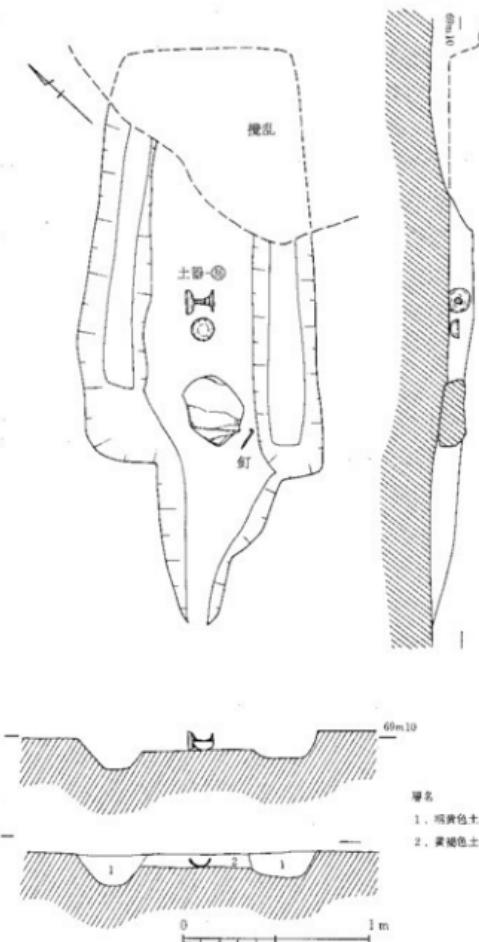
位置 主尾根の西端に立地し、古墳群西端に位置する。

墳形 削平のため墳丘ではなく、小石室と周溝の一部が残存する。

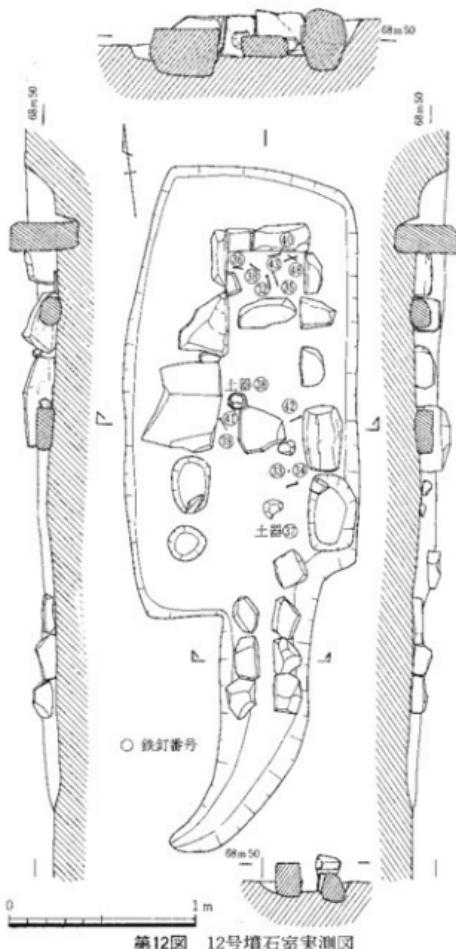
周溝は東側で9号墳と共有する。古墳南側には墓道があり、袖部を地山整形し、弧状をなすことから円墳と考えられる。

墓塚・石室 挖方は幅1.3m、全長2.1mで隅丸長方形を呈する。箱式石棺のようであるが奥壁が意識されており小石室である。石室は、奥壁と両側壁の基底石を残すのみである。石室の規模は幅45cm、長さ1.6mで小振りの石を用いて横積みにしている。石室に付属する石組みは排水溝と思われ、幅10cm、長さ80cmを測る。石室内の施設は、棺台として20cm×25cm大の石2個を設置している。

遺物の出土状況 石室内より出土した遺物は、鉄釘12本(32~36・38~43・48)、刀子(86・87)、土師器杯(37)・小形壺(38)のみである。奥壁部と棺台間に鉄釘7本、南側の棺台周辺に2本、さらに南に2本が散在する。奥壁部では、釘◎を挟んで西側に◎・◎、東側に◎・◎と2対み



第11図 11号墳石室実測図



第12図 12号墳石室実測図

抜き取り穴で、両壁間隔は掘方で60cmあり、石室そのものの内規は45cmとなる。小石室であったと考えられる。

**遺物の出土状況** 石室の床面は攪乱が著しく、鉄釘が1本出土したのみである。

#### 14号墳

**位置・墳形** 主尾根鞍部に位置する11号墳より、さらに南へ下った地点に立地する。墳丘・周溝は全て削平されており不明であるが、小石室が残存する。

られる。他に側板に用いられたと思われる⑧・⑨がある。中央部の棺台の東側に⑩、西側に⑪・⑫が遺存する。南側の⑬・⑭は、木棺の南端部分と思われる。釘⑮と⑯から棺の長さは、1.2mを測ることとなる。土器は棺外に杯(37)が置かれ、棺内か、棺上に土師器壺が供進されている。

#### 13号墳

**位置** 尾根南斜面の中央部で16号墳の北側に位置する。さらに西側に墓道が検出された。

**墳形** 墳丘は畑地で開墾され、石室北側の周溝のみが残存する。周溝は、幅20cm、深さ10cmで淡黄灰色土が堆積する。墳形は残存する周溝が弧状になるため、円墳と思われる。

**墓塚・石室** 南へ開口した墓塚はコ字状を呈し、幅1m、残存長1.6mで北東隅に攪乱がある。石室の石材は完全に抜き取られており、わずか現位置を失った石材を確認したにすぎない。しかし、石材の抜き取り穴から石室の規模を知ることができた。奥壁部分とそれに沿った側壁の

**墓塚・石室** 捩方は幅1.3m、残存長1.9mを測り、南へ開口する。石室は幅50cm、残存長1.6mを測る小石室であり、N-36°-Eの主軸を持つ。石室は基底石1段を横積みにし、奥壁上の石室の角に小石を小口積みにして隙を埋める。付属施設として棺台石1個が検出できた。石材は小振りで、撹方、石室共に小型である。石室の裏込め土は、上層・淡黄褐色土、下層・明黄褐色土であった。

**遺物の出土状況** 石室の奥壁と棺台の間で鉄釘(49)が1本と土師器壺が出土した。

#### 15号墳

**位置** 尾根鞍部の南斜面に3号墳・7号墳・8号墳が占地するのに対し、15号墳は南斜面をさらに1.5m~2m下った部分(標高69m)に立地する。また、3号墳と切り合い関係があり、3号墳が先行する。

**墳形** 石室の北側には、半月状の周溝が残存する。その規模は幅1.7m、深さ30cmを測り、淡黄褐色土が堆積する。墳形は周溝の形状から直径4.1m前後の円墳と思われる。

**墓塚・石室** 南へ開口する小石室で、石材は、全て失われている。抜き取り穴から、内規で幅約40cm、残存長1.3mの小石室が考えられる。石抜き穴は、奥壁に1個、東壁4個、西壁で2個を検出した。

**遺物の出土状況** 石室内より鉄釘(44~46・50~53)が7本と、土師器の小型壺が細片となって出土した。鉄釘は原位置を擾乱されたものが多いが、一部奥壁の手前で旧状を保つものが、確認された。周溝内からは須恵器の平瓶(40)1点が出土した。

#### 16号墳

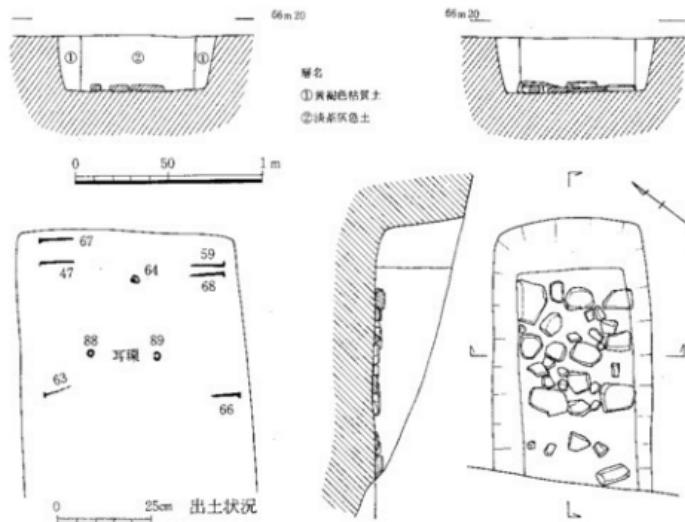
**位置・墳形** 調査区西侧の南斜面の最下段(標高67m)西端に位置する。最下段には、16号墳・17号墳・18号墳・19号墳が4基並列する。墳丘、周溝は削平によって遺存しないため、詳細は不明である。

**内部主体** 主体部は鉄釘で留められた組合式木棺直葬である。南半分が削平されているために、北側の奥行部が50cm×50cmほど遺存するのみである。墓塚は幅70cm内に幅約50cmほどの木棺痕跡が確認できる。木棺に使用されている鉄釘(54~58)は、中央に57を中心に左右に④・⑤と⑥・⑦が2対原位置で出土した。特に57は釘の頭を下にして倒立していた。

このことは、木棺構造が底板の上に短側板・長側板を乗せ、両側板が短側板を挟むこと示すものである。

#### 17号墳

**位置・墳形** 16号墳・18号墳の中間に位置する。墳形は、盛土が遺存しないため不明確であ



第13図 17号墳主体部実測図

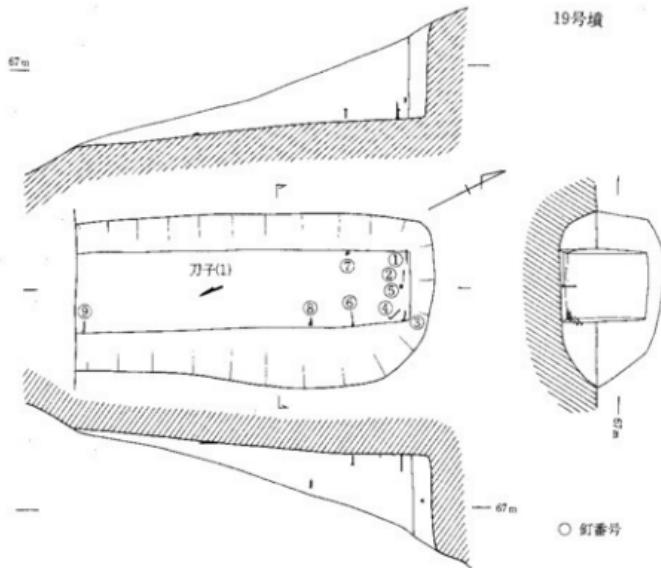
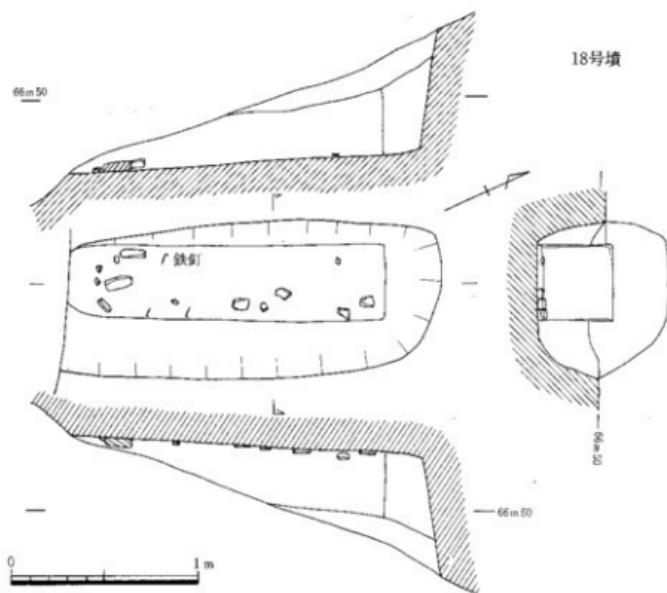
るが、周溝が半月状を呈することから円墳である可能性が高い。周溝は、幅1.1m、深さ15cmを測り、円弧から直径4.5m前後の円墳に復元される。尾根斜面に立地するため、主体部の南半分が削平される。

**内部主体** 主体部は幅45cm、残存長1.5m。釘留めの組合式木棺を直葬したものである。鉄釘は原位置を留めた状態で7本が出土した。木棺の墓壇は、幅90cm、残存長1.7mで隅丸長方形を呈し、裏込め土に黄褐色粘質土を用いている。木棺の床面には拳大の石敷きがあり、3対の扁平な石を両側に配し、棺台の機能も兼ねている。釘は、中央の64を挟んで両側に3対(67・47・63・59・68・66)が散布する。64は、16号墳と同様に倒立しており、47・68・63・66が横になって出土する。このことから、木棺は47・63・59・66が底板と長側板の下部を留めた釘で、67と59が短側板と長側板を留めた釘と考えられる。木棺の構造については、IV章の遺物の項で鉄釘付着の木目を検討する。

**遺物の出土状況** 木棺内の釘64の南側で1対の耳環(88・89)が出土した。耳環は、被葬者のもので、頭部を北側に向けて埋葬したことを示すものである。耳環は、純金製で直径0.2cmのパイプを円形に曲げ、両端をつめる。

#### 18号墳

**位置・墳形** 19号墳と同じ標高66mに位置する。主体部北側に周溝が半月状に残存し、円弧



第14図 18号墳・19号墳主体部実測図

を復元すると直径3m前後の円墳となる。周溝は幅80cm、深さ15cmで淡黄褐色土が堆積する。19号墳と同一規模である。

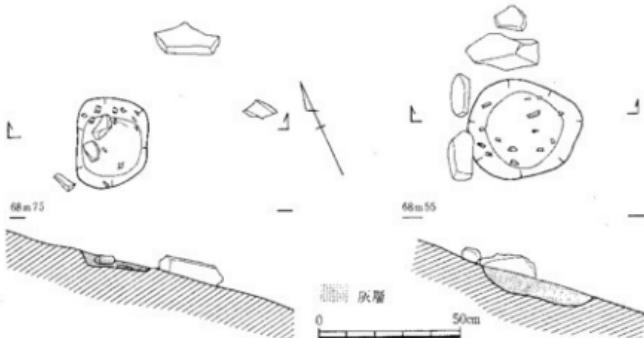
**内部主体** 主体部は組合式木棺で幅40cm、残存長1.8mを測る。墓塚は幅70cm、残存長2.1mで隅丸長方形を呈する。床面は北側が南側より13cmほど高くなっている。墓塚の断面には、木棺内に淡黄褐色土が認められ、掘方内に黄褐色粘質土を詰める。木棺痕跡内には木の根の痕跡があり、床面や側壁が一部破壊されている。釘は3本認められたが、原位置を保っているのは認められない。

#### 19号墳

**位置・墳形** 最下段の4基中、18号墳と同様に主体部北側に半月状の周溝が残存する。周溝の幅は約60cm、深さ50cmを測り、直径3cmほどの円墳の円弧の一部である。周溝は東側を現代の擾乱で切られているが、埋土の淡黄褐色土を確認することができた。

**内部主体** 墓塚は幅90cm、残存長2mで隅丸長方形を呈し、内部に幅0.45m×残存長1.8mの木棺痕跡が認められる。主体部は組合式木棺で鉄釘で留めたものを直葬する。床面は、北側の方が南側に比べて10cmほど高くなっている。木棺痕跡内には黄灰色土で、掘方の裏込め土は黄褐色粘質土を詰める。釘は、奥壁部に5本、中央部に3本、南端に1本が遺存し合計9本となる。奥壁部は⑤が釘頭を下にして直立し、①・②と③・④が対となる。釘⑥・⑦・⑧は原位置を留めており、長側板の横から底板を留めていたと考えられる。釘⑨は、南東隅（木棺の角）に位置するものと思われ、⑤から長さ1.8mを測る。木棺痕跡中央部より刀子（1）が1本出土した。なお、釘実測番号は⑤（65）・①（60）・④（61）・⑥（62）に対比する。

**遺物の出土状況** 検出された鉄釘（65・60～62）は、合計9本である。木棺痕跡内の中央部では、刀子が刃部を南側に向けて1本（85）出土した。



第15図 土塚1実測図

第16図 土塚2実測図

### 土塙 1

14号墳の東側2.5mに位置する土塙で、短径30cm、長径35cmを測る。深さ10cmほどの土塙内には、炭を充填する。土塙の周辺には、10cm×20cmの扁平な石や、10cm×7cm丈の石が散布する。

### 土塙 2

14号墳の東側に位置し、土塙 1 の東側60cmにあたる。土塙は直径30cmのやや不定円形を呈し、深さ8cmを測る。土塙の北側と西側に30cm×10cm大の石を4個ほどT字状に配す。土塙内は厚さ10cmほどの灰層となり、須恵器片が1点出土した。

### 墓道

西方から尾根傾斜面に添い等高線と平行し、12号墳・9号墳・11号墳の前面をつなぐ墓道であり、13号墳の周溝に連なる。墓道は幅90cm、深さ15cmで12号墳・9号墳・11号墳に伴うと考えられる。出土遺物は須恵器の蓋片がこの墓道内で数点認められた。墓道埋土は、単層で淡黄褐色土である。この墓道は、7号墳・8号墳にまでびていた可能性がある。他の古墳に関する墓道は不明である。

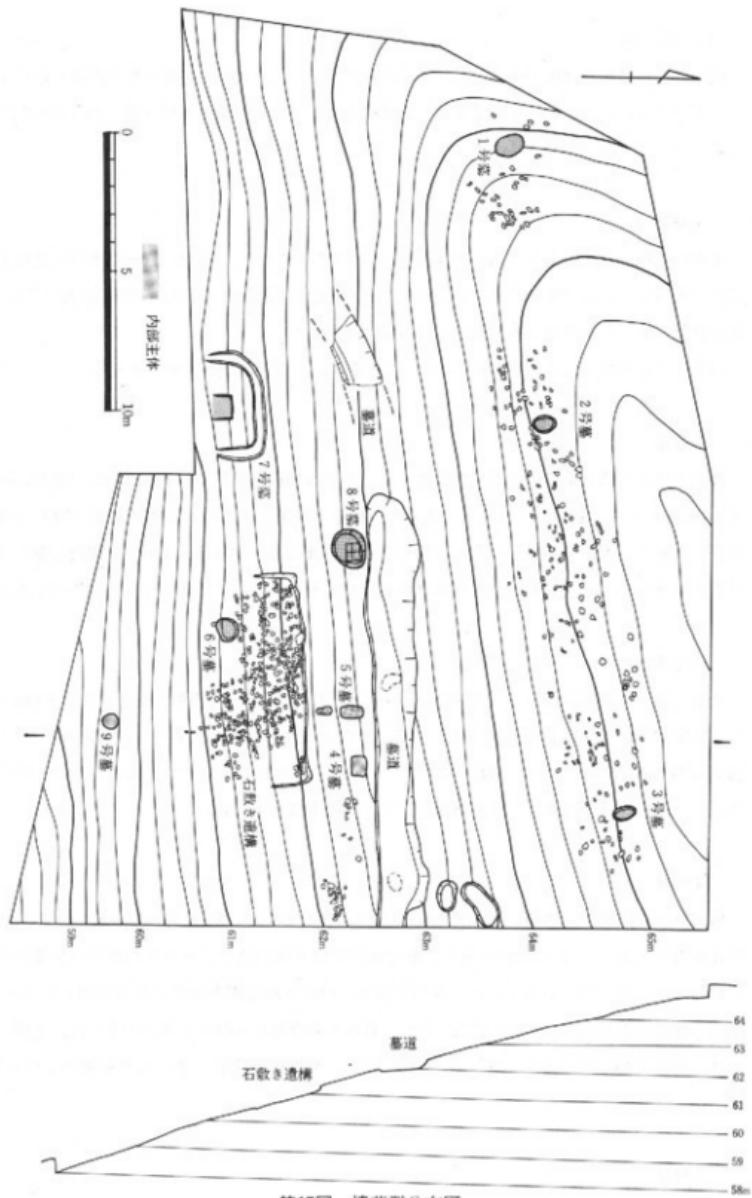
## 2. 田辺墳墓群の調査とその遺構

### 1. 遺構の分布

遺跡は、田辺古墳群より西へ80m離れた地点に位置し、古墳群と同一丘陵に立地するが、その間に小支谷をへだてる。尾根上は標高65.91mで、南の田辺池に傾斜する。全ての遺構は、耕土直下の黄褐色砂礫土（地山層）上面で検出した。開墾の為に遺構は、斜面中央部を除くとほとんどが削平される。

墳墓は、中央の墓道を挟んで上段に3基（1号墳・2号墳・3号墳）、下段に6基（4号墳～9号墳）検出された。墓道上段は、10cm内外の石が集中分布する5ヶ所のまとまりが確認され、その内の3ヶ所に墳墓がみられた。下段は、墓道に接して並ぶ8号墓・5号墓・4号墓と石敷き遺構、西へ隔ててコ字形に周溝を遺存した7号墓、藏骨器を内包する9号墓が存在する。

このように、墓と墳墓の間に切り合い関係がないことから、計画的に墓道を中心に上下段の墳墓が配置されたものと考えられる。



第17図 墳墓群分布図

## 2. 墳墓

検出された墳墓群は削平が著しいため、造墓期の全体数や規模の詳細な事象を明らかにすることはできなかったが、9基の墳墓は、内部構造によって火葬墓と木棺（櫛）の存在が明らかとなった。

### 1号墓

尾根の上段に立地、長径1m、短径0.8mで椭円形を呈する。深さは5cmで木炭が充填しており、層内より鉄釘（76・77）2本が出土した。墓塚の周囲には、拳大の河原石が認められる。保存状態が悪く平面形態が椭円形でない可能性もある。

河原石の散布地は、4m×4mである。この遺構は、内部主体は木櫃であろう。

### 2号墓

墓道上段にある3基中、中央部に位置する。形態は椭円形を呈し、長径0.7m、短径0.5mで深さ10cmを測る。墓塚底には木炭を詰めてこれを木炭床とする。木炭内で鉄釘（78）1本が遺存しており、木櫃墓の残存と考えられる。墓塚周囲には、約6m×4mの範囲内に拳大の河原石が分布する。河原石散布地内では須恵器蓋片が出土したが、2号墓に伴うかは不明である。

### 3号墓

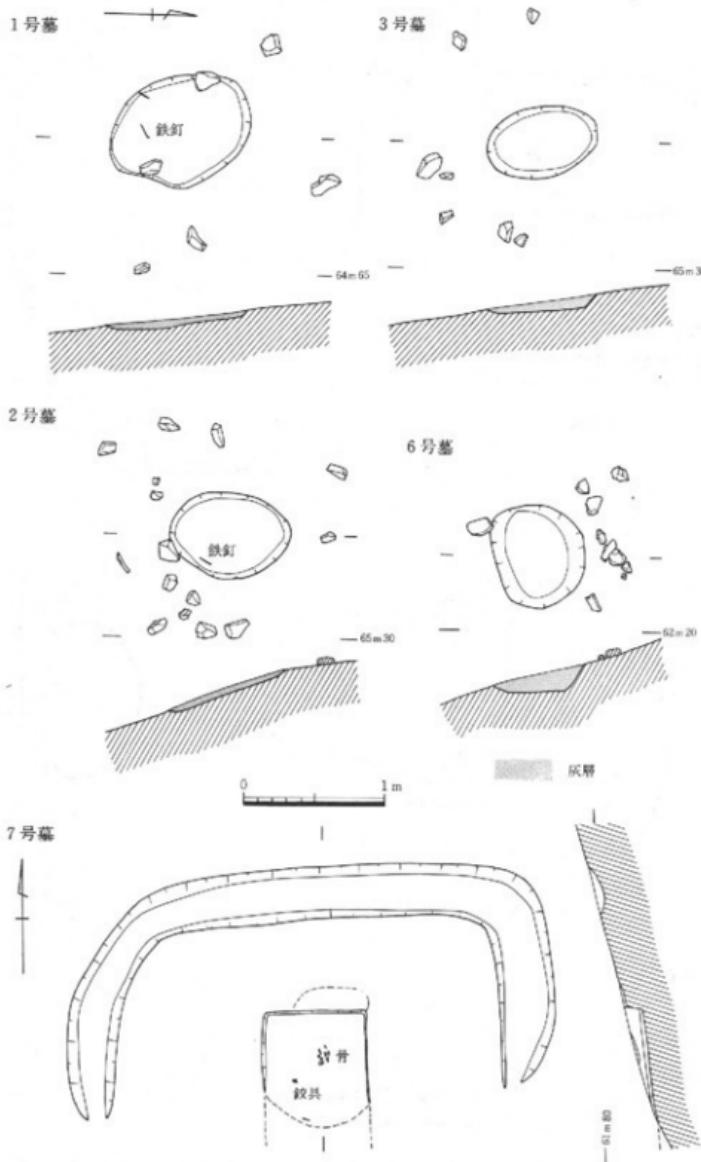
墓道上段の東端に位置する。形態は長径0.7m、短径0.5mで椭円形を呈し、深さ10cmを測る。墓塚内には木炭を詰めて木炭床とする。層内より鉄釘2本が出土した。墓塚の周囲には、河原石が3m×3.5mの円形の範囲に分布する。河原石の散布地内では、須恵器（49・50）が出土している。この遺構は、鉄釘が出土しており、木櫃墓と考えられる。

### 4号墓

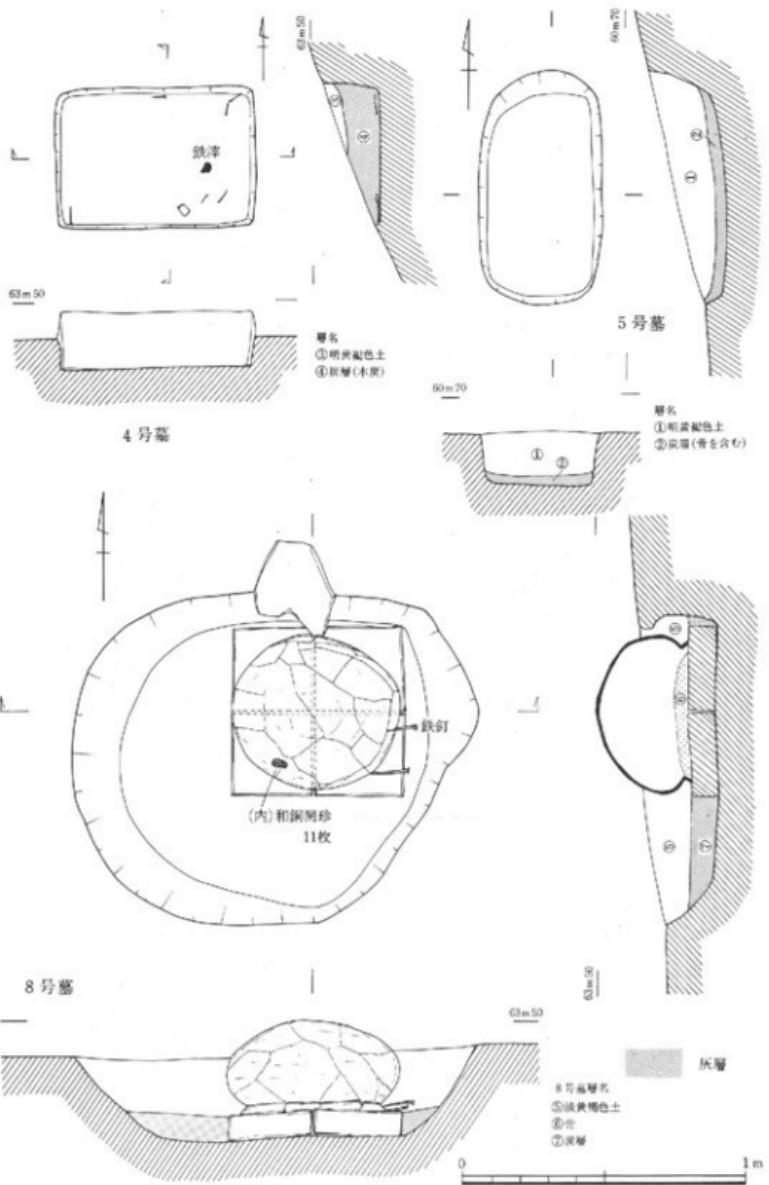
墓道下段に位置し、墓道より南へ50cmの地点に営なまれる。墓塚は長辺70cm、短辺50cmで隅丸長方形を呈し、深さ20cmを測る。墓塚底面には木炭が詰めてありその面から少量の骨片と鉄釘6本（70～74）が出土した。鉄釘は墓塚の四隅と長辺側中央部に各1対出土しており、木櫃の埋置が考えられる。木炭層内より他に鐵滓が須恵器片（68）と共に出土した。木櫃の主軸は、墓の主軸と同一方位でN-3°-Eである。墓塚の木炭層上部には明黄褐色土があり、盛土の一部と考えられる。

### 5号墓

墳墓下段に位置し、墓道の主軸に直交する。墓塚は長径80cm、短径40cmで椭円形を呈するが、



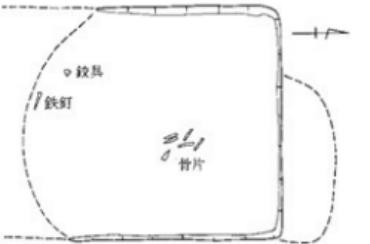
第18図 1・2・3・6・7号墓実測図



第19図 4・5・8号墓実測図

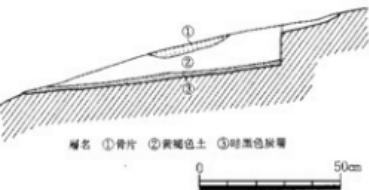
底面では長辺70cm、短辺37cmの隅丸方形となる。

墓壇内は深さ23cm、底部に木炭層があり骨片が少量出土した。木炭層上面には明黄褐色土が中央に凹んで落下しており盛土の一部と思われる。墓壇底面の規模は、4号墓とほぼ同じである。埋土内からは鉄釘の出土はない。



#### 6号墓

石敷き遺構の西南隅に位置し、墓壇は直径65cm前後の不定円形を呈し、深さ20cmを測る。埋土は木炭層のみで、火葬骨の有無は明らかでない。石敷き遺構とは切合い関係がなく、同時期のものと考えられる。また、木炭層内で鉄釘(79)が1点出土した。



第20図 7号墓主体部実測図

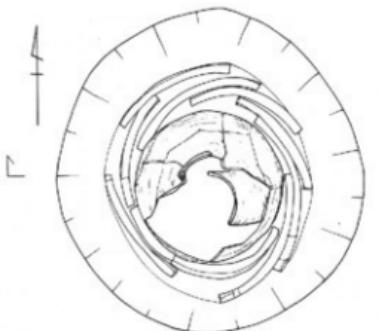
#### 7号墓

墓道の下段に位置し、幅50cmのコ字状の周溝を持つ墳墓である。周溝は深さ15cmで一辺が3.2m~3.3mを測る。周溝内には淡黄褐色土が堆積し、須恵器・土師器片が少量出土した。主体部は幅85cm、残存長90cm、深さ15cmを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。主体部内では骨片・銅製鉗具(第36図)、鉄釘1本が出土した。鉄釘は1本遺存したのみであるが、鉗具の出土状態からして木櫃墓の可能性がある。主体部は底面に厚さ4cmの木炭層があり、その上に黄褐色土が堆積している。遺物は全て木炭層より出土した。また、墓壇壁面が赤く火化している部分がある。この古墳は周溝の形状より一辺3.3m前後の方形の盛土を持つ墳墓と考えられる。

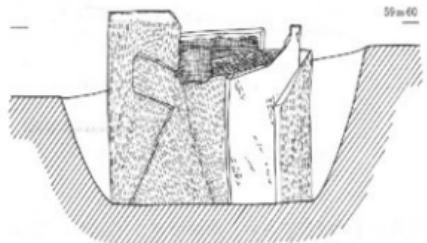
#### 8号墓

墓道下段にあり、墓壇が隣接する。墓壇は長辺1.45m、短辺1.25mの不定円形を呈し、深さ28cmを測る。墓壇の北東隅に1辺28cmの方塊4枚を正方形に並べ、1辺56cmの基盤とする。埠上には火化した火葬骨が直径45cmの範囲に集骨され、和銅開珍11枚(第35図)が伴って出土した。

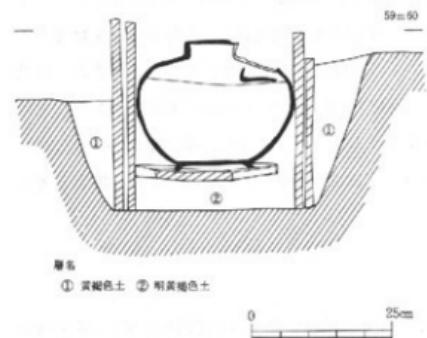
和銅開珍は埠の西南隅に11枚が横倒しに連なって検出された。銅錢は本来立ててあったものであろう。また、埠上には鉄釘3本(75・80・82)が認められた。しかし、完存する状態にもかかわらず釘が3本しか遺存しておらず、埠上の火葬骨は、木櫃内に内包されていなかったと



堆積される。さらに、塚上の須恵器壺(71)は口縁部を下にして、蓋として用いている。墓壇内の埋土は塚の上面にそろえて木炭を敷き、木炭床として甕埋置後、淡黄褐色で覆う。墳丘・周溝は削平のため遺存しない。時期は8世紀前半である。



**9号墓**  
尾根斜面の最下段に位置し、標高59.5mを測る。墓壇は、直徑50cm、深さ28cmで中央に瓦敷き須恵器の蓋付短頭壺(69・70)に火化した火葬骨をおさめる。土器の周囲に平瓦を2~3重に囲み、外囲いとして用いている。平瓦(第34図)は、9枚とも破損した瓦を使用している。削平のため周溝、盛土等は確認できなかった。時期は8世紀中葉である。



#### 石敷き遺構

墓道下段の中央部に東西7.8m、南北4.4mの石敷きがある。墓壇の掘方は、北側をカットしコ字状に掘削している。石敷きは直徑20cm前後の河原石約120個を集めて分布させている。また遺構内には、6号墓が西南隅に位置するため石敷きを精査したが、他に墓址は確認できなかった。堆積層は石敷き上層に淡黄褐色土、下層に厚さ15cmほどの明黄褐色土がある。出土遺物は

第21図 9号墓実測図

なかったが、遺構の位置関係から8世紀前半のものであろう。

#### 墓道

尾根斜面の中央部に位置し等高線に沿って東西に連なる。墓道は幅1.4mで、長さ15.5mほどが調査された。墓道の断面は尾根頂部側が深く40cmあり、南側は浅く5cm前後で、底面が平

坦で幅50cmを測る。遺物は溝の上下2層中、上層の黄灰色土から須恵器蓋(51~65)、土師器杯10個体が出土している。下層には遺物はほとんど認められなかった。墓道は7世紀後半~8世紀前半の遺物が出土しており、7世紀後半に作られたと考えられる。

古墳名	墳形	規模	墓 塚			石 室			周 围			主 軸	備 考
			幅	残存長	深さ	幅	残存長	深さ	幅	残存長	深さ		
1号墳	円 墳	8.5	3.8	5	0.9	1.1	3.6	1.5	0.15				0.8×1mの棺束
2号墳	円 墳	8	2.5	3.8	0.8	0.9	2.2	1.2	0.7				床に石敷き
3号墳	円 墳	8.5	2.4	5.1	0.8	0.9	4.2	1.5	0.6	N-32°-E			床に石敷き
4号墳	円 墳	7.5	1.8	4.2	0.7	0.7	2.9	2.5	1.1				閉塞石が残存
5号墳	円 墳	6.3	2.5	2.8	1.8	0.7	1.8	1	0.6				
6号墳	円 墳	4.1	2.3	3.8			0.9	2.2	1.2	0.15			擂台石2
7号墳	方 墳	8.5	2.8	5.5	0.7	0.9	4.35	0.5	0.7	N-32°-E			擂台石3、墓道の附属
8号墳	方 墳	8.5	2.7	4.7	0.9	0.8	3.6	1	0.2	N-31°-E			床に石敷き、墓道の附属
9号墳	方 墳	5	—	—	—	0.75	0.7	0.5	0.5	—	N-31°-E		床に石敷き
10号墳	方 墳	4.2	1.6	1.8	0.5	1.4	1.7	0.4	0.15	N-47°-E			擂台石3、排水溝附属
11号墳	方 墳	4.2	1.3	2	0.05	0.5	—	床0.4	0.2	N-47°-E			擂台石1、排水溝附属
12号墳	円 墳	4.2	1.3	2.1	1	0.45	1.6	0.4	0.2				擂台石2、排水溝附属
13号墳	円 墳	1	1	1.6	0.3	0.45	1.3	0.2	0.1				
14号墳	円 墳?	—	1.3	1.9	0.45	0.5	1.6	—	—	N-39°-E			擂台石1
15号墳	円 墳	4.1	0.8	1.8	0.2	0.4	1.3	0.75	0.3				
16号墳	円 墳?	—	0.55	0.4	0.1	0.5	0.5	—	—	N-39°-E			
17号墳	円 墳	6.5	0.9	1.7	0.5	0.45	1.5	1.1	0.15	N-39°-E			床に石敷き
18号墳	円 墳	3	0.7	2.1	0.6	0.4	1.8	0.8	0.15	N-27°-E			
19号墳	円 墳	3	0.9	2	0.55	0.45	1.8	0.6	0.5	N-27°-E			

※ 16号墳~19号墳は木棺直葬　※ 寸法の単位は(m)

古墳一覧表

塚馬名	内 部 構 造			外 部 構 造			形 态	備 考				
	幅	長	深さ	周溝幅	深さ	幅		幅	長	深さ	幅	長
1号墓	0.8	1	0.05	—	—	—	橋円形	配石の範囲4×4m				
2号墓	0.5	0.7	0.1	—	—	—	橋円形	配石の範囲6×4m				
3号墓	0.5	0.7	0.1	—	—	—	橋円形	配石の範囲3×3.5m				
4号墓	0.5	0.7	0.2	—	—	—	隅丸長方形					
5号墓	0.4	0.8	0.25	—	—	—	隅丸方形					
6号墓	0.65	0.2	—	—	—	—	不定円形					
7号墓	0.85	0.9	0.15	0.5	0.15	溝丸長方形?	—	1辺約3mの方形埴塗と考えられる				
8号墓	1.25	1.45	0.28	—	—	—	不定円形	埴4枚と甕を使用				
9号墓	—	—	0.28	—	—	—	円形	平瓦を外殻類として9枚を使用する。				
石敷き	4.4	7.8	0.4	—	—	—	長方形	河原石120個残存				

※ 寸法の単位は(m)

墳墓一覧表

第1表 古墳群・墳墓群の規模一覧表

## 第IV章 遺物

### 1. 田辺古墳群とその遺物

#### 土器類

古墳群が造営された時期のものは、須恵器の杯・蓋・長頸壺・高杯・平瓶、土師器の杯・壺・甕があり、整理箱にしても4箱ほどである。原位置を保って出土したものは、8号墳の前庭部のものと、10号墳・11号墳の石室内から出土した土器群、他に可能性があるのは、1号墳の周溝より出土した須恵器の杯・蓋・長頸壺である。

出土遺物の大半は、須恵器の杯・蓋であるが、一つの古墳に副葬される数は少ない。

須恵器の杯についてみると、蓋と身が逆転する直前の形態（杯H）と、逆転して蓋につまみのつくもの（杯G）があり、いずれも口径10cm前後の小型品である。

杯Hには、身が深めで底部と体部の境が不明瞭で、受部が狭くたちあがりが短く内湾するものの（1）がある。この杯Hは1号墳周溝より1点出土したのみである。杯Gの蓋には、扁平で器高が低く、かえりの先端が口縁部より下方へ突出するもの（2）と、ほぼ同一の高さになるもの（3～11・22・28）とがある。傾向として前者には乳首形のつまみが付き、後者には、扁平な宝珠形つまみが付くことが多い。（30・34）のように口径12cm前後と大きい蓋は、高く外方にしっかり踏張った高台を持つ杯（杯B）の蓋と思われる。

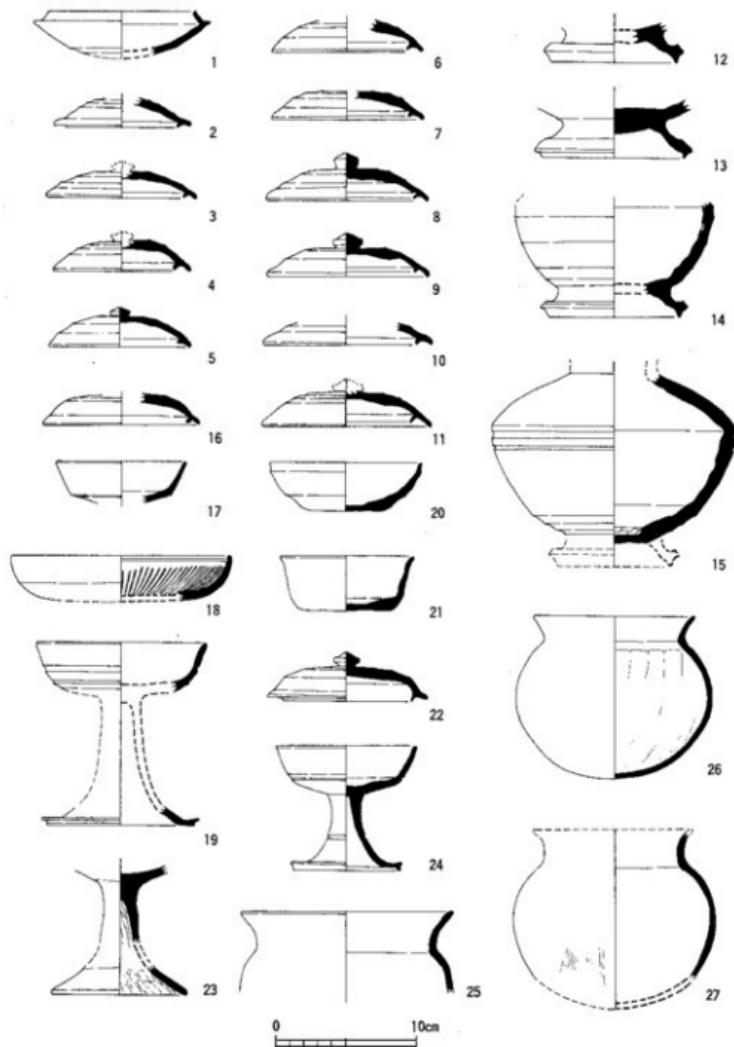
8号墳の場合でみると、杯Gと杯Bの蓋が石室前庭部で共有する。杯身は、口縁部が垂直に立ちあがるもの（21）と、若干内弯し外方へ開くもの（20）があるが、いずれもヘラ切りのままである。

高杯には、脚部が杯部より長く脚部に凹線を施すもの（24）や、脚部に透しを持たない小型品（36）がある。

長頸壺には、底部の高台のみで高台に透しを持つもの（13）と、持たないもの（12・14・15）が認められる。

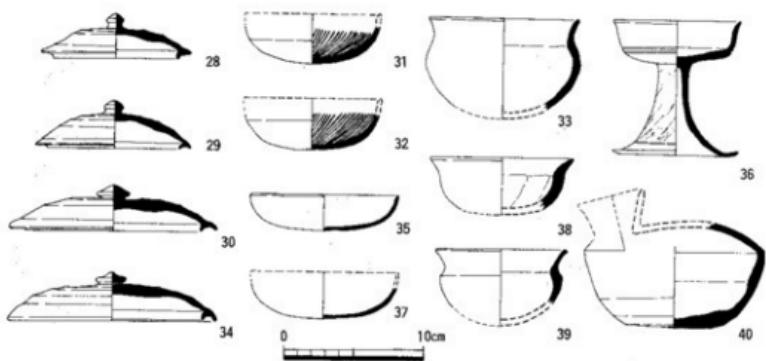
これら的一群の須恵器は、『飛鳥・藤原京発掘調査報告 II』<sup>註7</sup>に7世紀の土器をI～V期まで編年されている中のIII期を中心とする時期のもので、実年代で7世紀中葉に位置づけられている。しかし、1号墳周溝出土の杯H（1）は、形式的にII期に包括され、7号墳の蓋（34）はIV期に位置づけられる。すなわち遺物ではほとんど大きな形式差がないが、1号墳周溝出土品と7号墳・8号墳石室内出土品を比較した場合、若干1号墳が先行するものと思われる。

土師器は、口径9cm前後の杯（31・32）と口径15.5cmの杯（18）があり、前者は内面に斜



第22図 古墳出土の土器実測図（1）

出土地点	1号墳 周溝内①～⑯	6号墳 周溝内⑮・⑯
	3号墳 石室内⑩・⑪・⑫ 周溝内⑯	8号墳 石室内⑯ 前庭部⑮～⑯
	5号墳 周溝内⑯・⑰	



第23図 古墳出土の土器実測図（2）

出土地点 7号墳 前庭部④ 10号墳 石室内◎ 12号墳 石室内◎・◎  
8号墳 前庭部◎～◎ 11号墳 石室内◎ 15号墳 石室内◎ 周溝内◎

古墳名	出土位置	鉢 形	前 漆 製		土 壁 製	その他の時期の遺物	備考
			杯	高長頸高杯半腹			
1号墳	石室内	①				瓦器柄	
	周溝		①	◎		鉢	
2号墳	石室内	②				瓦器(鉢)3	
3号墳	石室内	①	①	②		土器形(杯) 黒色土器(碗)	羽釜
	周溝				①	瓦器(柄・壺)	
4号墳	周溝				①	土器形(杯・壺) 刀子	
5号墳	石室内	①					
	周溝		②				
6号墳	石室内	①					
	周溝		①		②		
7号墳	石室内	①	②			土器形(杯)	
8号墳	石室内	◎	②	①	③	④	刀子
9号墳	石室内	①					
10号墳	石室内	◎		①	②	③	
11号墳	石室内	①		①	③		
12号墳	石室内	◎			③	④	刀子
13号墳	石室内	①					
14号墳	石室内	①				③	
15号墳	石室内	◎				④	
16号墳	石室内	◎					
17号墳	石室内	◎					瓦器2
18号墳	石室内	◎					
19号墳	石室内	◎					刀子

第2表 古墳出土遺物一覧表 ○は個体数

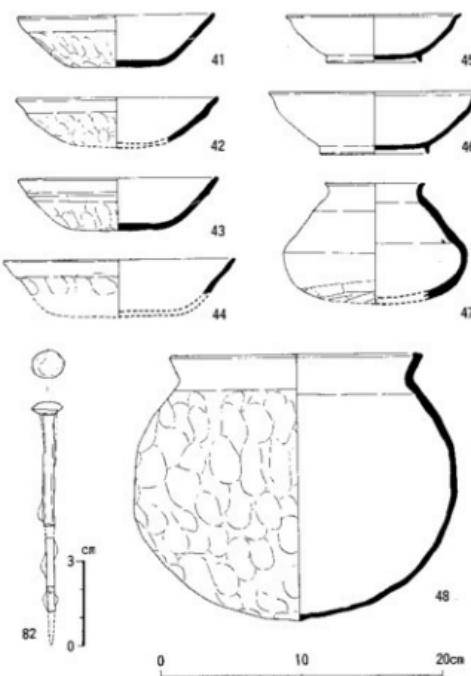
方射暗文、後者は正方射暗文を施す。他に壺（38・39）、高杯（23）、甕（25・26・27）があるが、非常に保存状態が悪い。

古墳群中最も多くの土器を出土したのは1号墳周溝で、他は量的に少ない。器種は須恵器の蓋類が最も多い。8号墳の出土状況を検討すると土師器の甕がセットをなして副葬されており、杯、蓋類が日常の生活セットと異なった組合せを持つ事が明らかとなった。これらの土器は煤が付着しておらず未使用である。

#### 平安時代以降の土器

田辺古墳群の再利用された時期は、大きく9世紀末から10世紀の時期と、12世紀の二時期があり、各時期に伴って副葬された土器が出土している。土器は、土師器（杯・甕）、黒色土器（椀B）、瓦器（椀・壺）があり、1号墳・2号墳・3号墳・4号墳・7号墳から出土している。

土師器の杯（41～44）は、法量や手法が同一で口径14cm、器高3.8cmを測る。口縁部は大きく外方向へ広がり、端部を丸くおさめる。外面は指おさえで成形し、口縁部と内面をナデ調整する。黒色土器（45・46）は内外面共に炭素を吸着させたもの<sup>註8</sup>の黒色土器B類である。甕（48）は体部が球形を呈し、く字状に口縁部が付く。口縁端部は内面に肥厚する。体部外表面は粘土紐の巻き上げ後、指おさえで成形している。内面はナデ調整で器壁を薄くしている。瓦器は椀4個体があるが図示できるものはない。高台は低く三角形を呈し、口縁端部は丸くおさめている。壺（47）は瓦質で色調は灰白色を呈し、焼成が不良である。口径は7.4cm、器高8.6cmで体部と底部は下膨れである。底部はかるい手持ちヘラケズリを行っている。土器は41・43～46が3号墳石室内、47が3号墳前庭部で瓦器椀と共に出土した



第24図 平安時代以降の土器・鉄釘

ものである。48は4号墳周溝内の土器棺である。

### 金属製品

出土した金属製品の大半が木棺に使用された鉄釘類で他に刀子、金環がある。これらの遺物は全て遺構に伴い、石室内から出土したものである。個数は、鉄釘108点、刀子5本、金環2点と鉄滓1点である。

**鉄釘** 釘は各古墳から95個体出土しており個体数を別表2に示した。後世の盗掘にあったものが多く、木棺に使用された全ての釘を遺存するものはない。

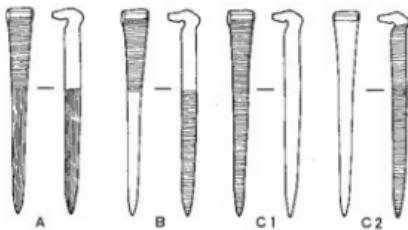
木棺に使用された釘は、大きさや形態・使用法によって数種類に分類できる。釘は全て鍛造製であり、頭部の成形は一端を薄く叩き伸ばし一方へ折り曲げて作られている。釘は完形品のものが21本あり、長さによって5種類に分けられる。寸法は全長19cmのもの(4)、13cm前後のもの(31・56)、11.5cm前後のもの(21・22・24・28・29)、10cm前後のもの(25・27・54)、9cm前後のもの(11・41・47・67・68)がある。全長19cmのものは1号墳・7号墳から出土している。頭部の形態は三角形を呈するもの(4)、正方形のもの、長方形のものが認められ、中でも長方形が最も多い。

釘に付着した木目について、旭山古墳群の分類を基礎に付着状況を観察してみると、4種類に分類できる。

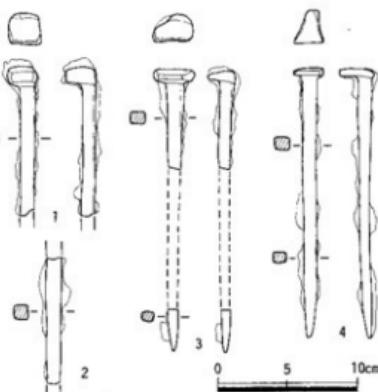
A. 木目が頭部より体部にかけて3.5cm～5cm内外の幅で表裏の2面に対になつて付着し、それ以外先端にかけて縦方向に木目が走るもの。

B. 木目が頭部より3.5cm～5cm内外は表裏を対にし、それ以外は両側を対にして横方向に付着するもの。その逆に上半は両側が対に、下半が表裏となるものの。つまり木目が直交するもの。

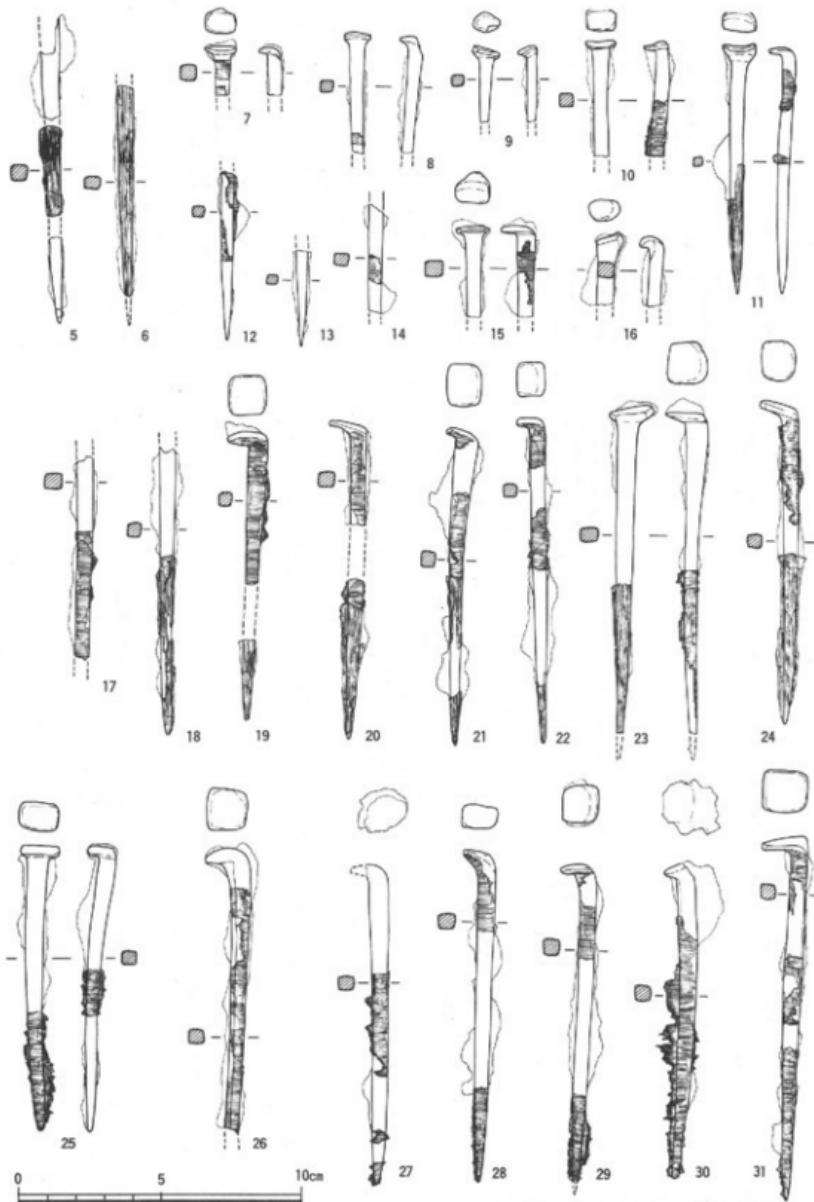
C 1. 木目が頭部より先端まで表裏、



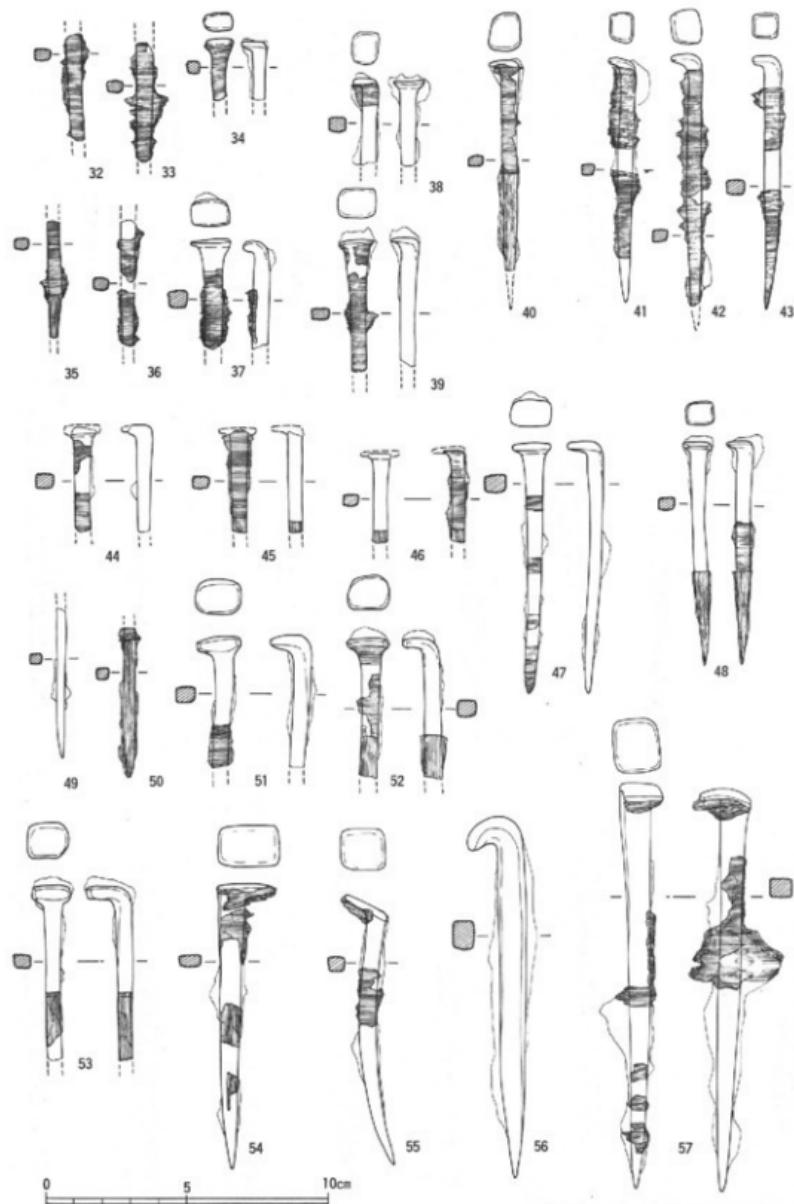
木目の分類 (模式図)



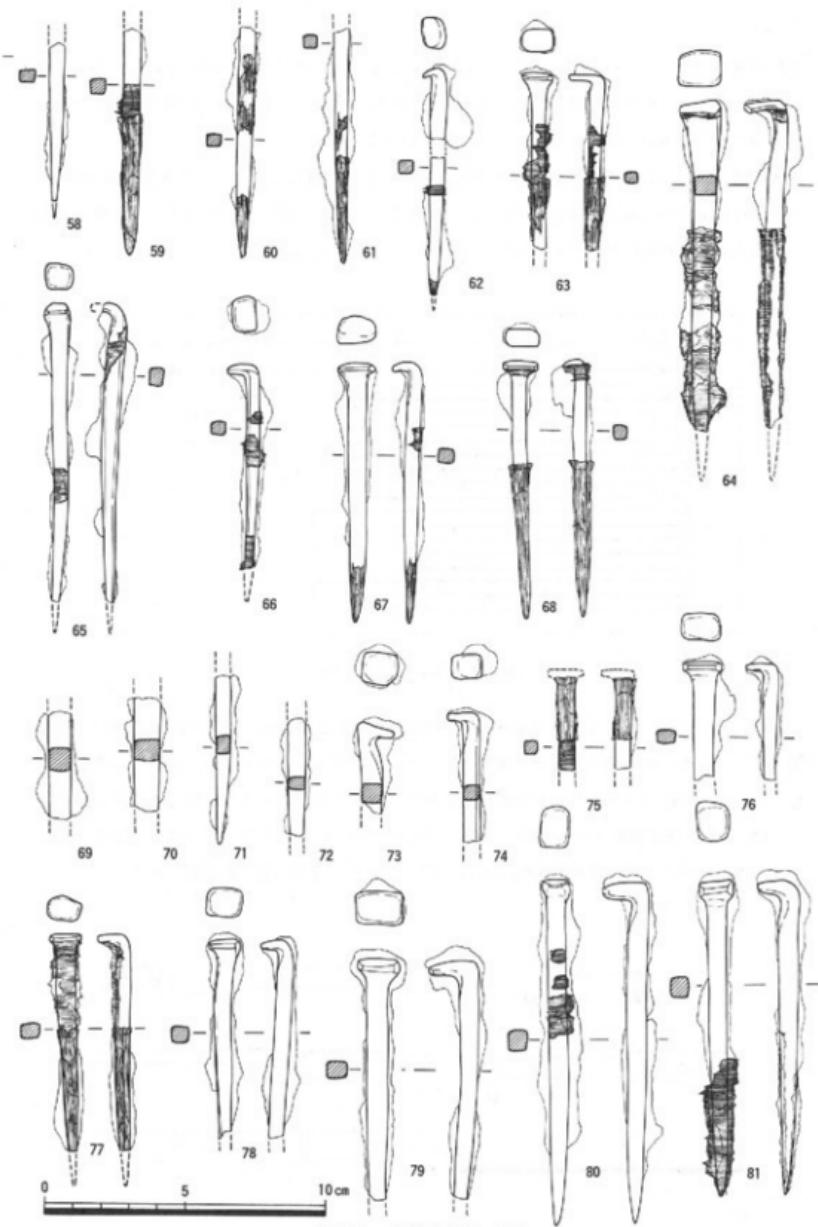
第25図 鉄釘実測図(1)



第26図 鉄釘実測図 (2)



第27図 鉄釘実測図 (3)



第28図 鉄釘実測図 (4)

また両側が対になって横方向に走る。この場合、釘上半と下半に木目の境がないものと、明確なものがある。C 1・C 2 と同様であるが、釘側面に木質が付着している場合、このときも釘上半と下半に木目の境があるものとないものがある。

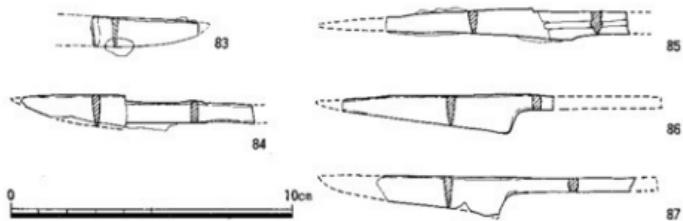
A の様な木目が付着する場合、板の平面から別の小口へ打ちつけたことを示す。B の場合、木目が付着するのは板の組み合せが直交し、90度ずれる。C の様な木目が残るのは、板の平面から別の側面に釘を打ち付けた場合で、木目が同一方向である。

釘番号	長さ(cm)	5	10	15	20
④					
①					
②					
③					
⑤					
⑥					
⑦					
⑧					
⑨					
⑩					
⑪					
⑫					
⑬					
⑭					
⑮					
⑯					
⑰					
⑱					
⑲					
⑳					

第3表 釘の全長の比較

刀子 5点出土している。発見古墳は4号墳(83)・8号墳(84)・12号墳(86・87)・19号墳(85)である。86・87は切先を欠損しているが、ほぼ完形に復元できる。84は、切先を欠損しているが刃部はほぼ完形で現存長8.5cmを測り、関部を残す。刀子の種類は、刃部の短いもの(84)、刃部の幅が狭いもの(85)、刃部が7cmあるもの(86・87)の3種類が認められる。

また刀子の中で刃部に使用痕を残すもの(87)がある。刀子は全て鍛造製である。



第29図 刀子実測図

金環 直径1.4cm、径0.2cmの純金製、中は空洞となっており、両端の穴を青銅製の鐘で蓋をする。

重量は、88が2g、89が2gである。17号墳の木棺内より出土しており、88が右耳、89が左耳に着装されていたと思われる。



鉄澤 1号墳の周溝内より1点出土している。

大きさは2×5cm大で25gである。共伴遺物は7世紀中葉である。

第30図 17号墳出土の耳環

## 2. 田辺墳墓群とその遺物

### 土器

火葬墓に伴って出土し土器は少なく7号墓・8号墓・9号墓の須恵器の鉢(68)・甕(71)・短頸壺(70)の3個体のみである。大半の土器は墓道の上層で発見されており、土師器杯・須恵器杯・蓋が多量に出土している。

須恵器の杯・蓋をみると古墳群同様に杯G・杯Bの蓋が認められ、出土量の8割を占める。杯Gの蓋は、口径11.5cm~12cm、器高が3cm前後で宝珠つまみも偏平なもの(49・52)と、やや乳頭形をなすもの(58・59)である。杯Bの蓋は、口径15cm~16cm前後、器高2.5cm前後で偏平な宝珠が付くもの(61~64)と蓋のかえりの消滅したもの(65・66)が認められる。

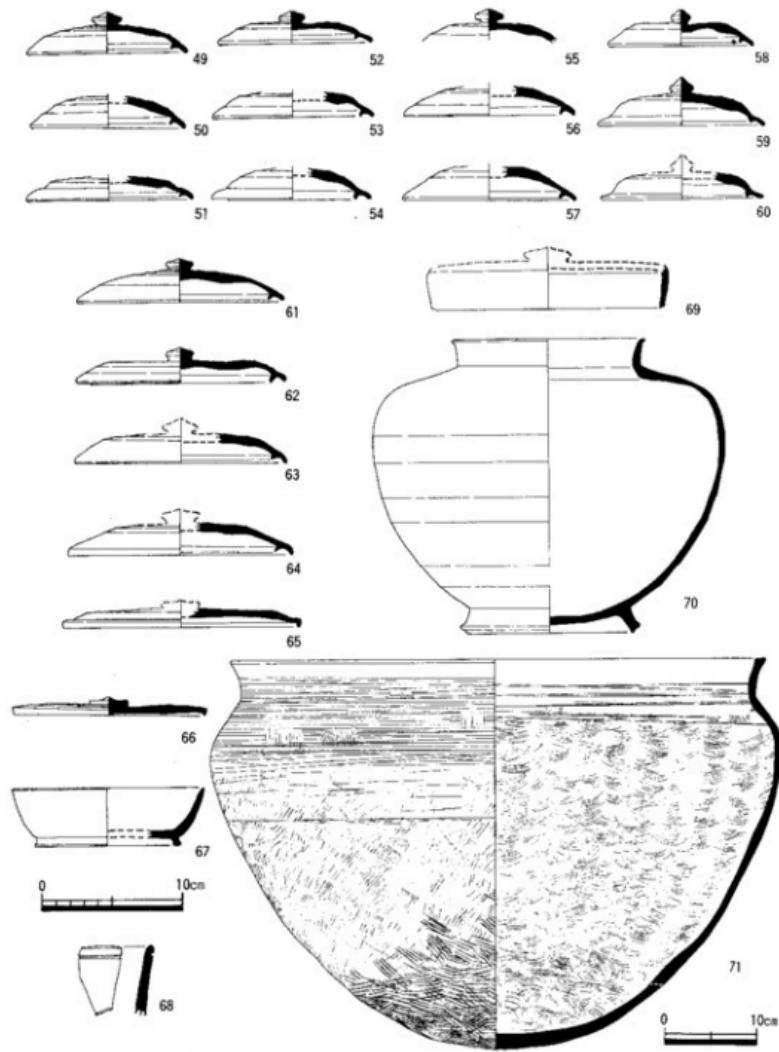
有蓋短頸壺(69・70)は、口径13.5cm、器高21.8cmで体部最大径が高い位置にあり、外面は回転ヘラケズリの後にかかるいヨコナデ調整する。高台は、下方へ踏ん張っている。

甕(71)は、口縁部がくの字状に外反し、体部最大径を肩部に置き丸底を呈する。外面は叩きで成形し、内面は当具痕をナデ消す。色調は暗青灰色を呈する。

これらの土器群を先の報告に従って編年すると、墓道出土のものは飛鳥III~V期の土器にあたり7世紀中葉~後葉に比定できる。墓道下段の淡黄褐色土出土のもの(65・66・67)は8世紀中葉、鉢(68)や蓋に用いられた甕(71)は8世紀前半と考えられる。藏骨器(69・70)は8世紀中葉頃の所産と思われる。このように墳墓群から出土した土器は、7世紀後葉~8世紀中葉までの時期に限定され、墓道が7世紀から8世紀に用いられ、墳墓群は8世紀初頭から中葉に造墓されているということができる。

### 瓦類

火葬墓に用いられた瓦類は、全て田辺庵寺跡に使用されているのと同一である。それは方塊4枚と平瓦9枚である。



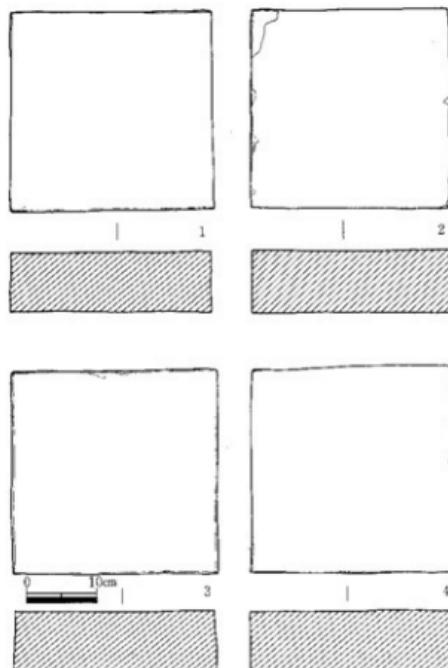
出土地点 3号墓—49・50 4号墓—68 9号墓—69・70 草道—51～64  
包含層—65・66・67

第31図 墳墓群出土の土器実測図

古事名	出土位置	被 付 物	遺 物 基 本 情 況		其 他
			種 類	土 器 部 分	
1	墓室內	(2)			
2	"	(2)			
3	"	(2)	(2)		
4	"	"			鉢底上点
5	"	"			
6	"	"	(2)		
7	"	(2)			(2) 瓦从1個
8	"	"	(2)		瓦側面11枚、瓦4枚
9	"	"	"	(2)	十九枚
黒 包 布 石 歌	上 層	左 右 上 下	左 右 上 下	左 右 上 下	

第4表 墳墓群出土遺物一覧表 ○は個体数

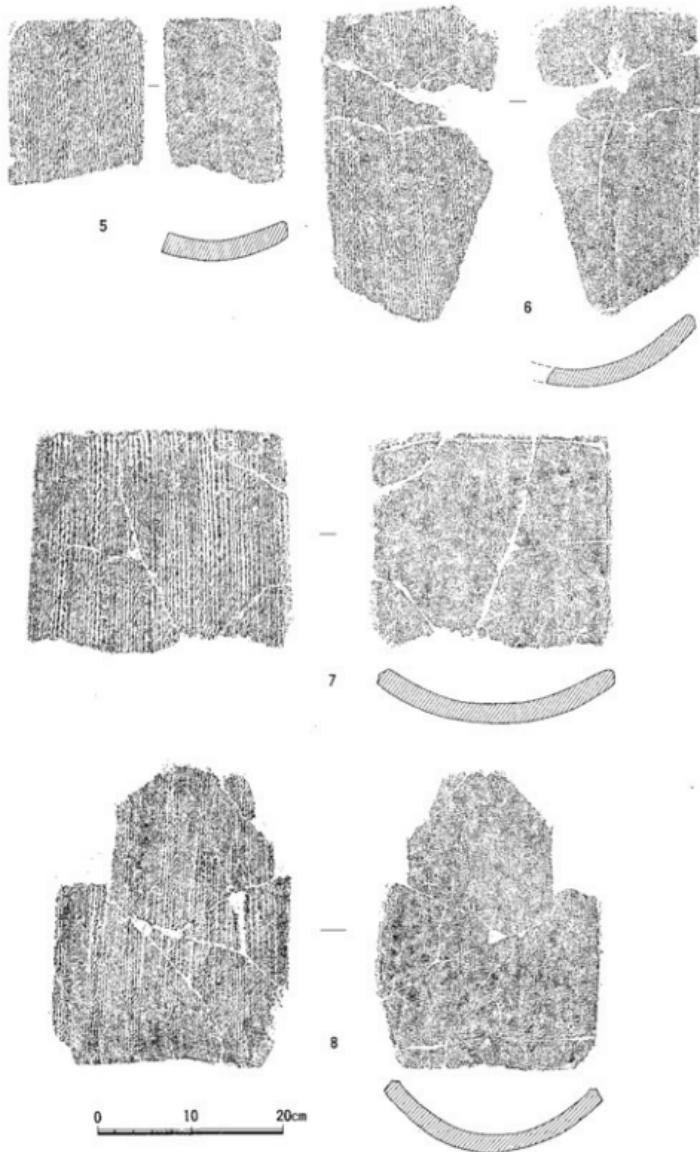
埠 4枚の埠は1辺28cm~28.5cmの方埠で、厚さ9cmを測る。埠の両面はヘラケズリによつて調整し側面をナデる。胎土は、0.2mm~0.4mm前後の長石・石英粒を多く含み、色調・焼成には黄灰色のものや、青灰色で須恵質を呈するものが認められる。田辺廃寺跡の東塔の調査で、同塔の所用埠に長方埠2種と方埠1種があり、その方埠と寸法・胎土・焼成が共通する。



平瓦 6~8は凸面に廻転繩目を持ち、凹面に布目を残す。凹面の端には布目の切れがあり、1枚造りの特徴が認められる。また、瓦側面は面取りをほどこしており断面三角形状を呈している。出土した平瓦は全て完形品ではなく破片である。胎土は0.2mm~0.3mm以下の石英・長石粒を含み、色調は暗青灰色を呈する。焼成は良好である。

5は耐斗瓦である。平瓦もまた田辺廃寺跡所用の平瓦と共通するものである。

第32図 墳実測図



第33図 平瓦実測図

### 金属製品

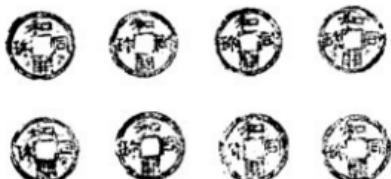
出土した金属製品の大半が木櫃に使用された鉄釘（69～81）で、他に銅製鉗具や和銅開珍がある。

鉄釘 15本出土しており全て鍛造製。頭の成形は端を薄く叩き伸し一方に折り曲げている。長さは完形のもので12.3cmのもの（80）、11.2cmのもの（81）、9cmと思われるもの（77）がある。他は、欠損しており全長は不明である。釘に付着した木目を古墳群と同様に分類すると、Aタイプ（75・77）、C1タイプ（76・80・81）となる。

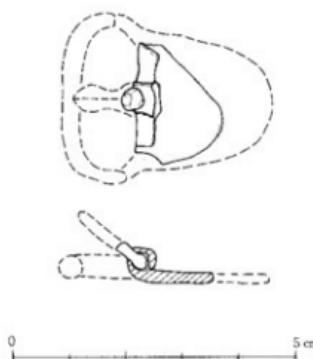
貨幣 8号墳から総数11枚の和銅開珍が発見されたその内に完形品が10枚ある。全て和銅開珍で外縁外径が2.4cm、内郭外径も2.1cmを測る。重量は0.2gである。保存状態もよく文字が判読できるものが9点ある。錢文は全体に角張った文字であり、画線は比較的細字。開は“聞”につくる。

銅製鉗具 7号墓より1点出土した。残存する部分は刺金具と板金具の一部である。軸部には、C字形の外枠が付くと思われ、一部刺金が遺存する。

鉄滓 4号墓から1点出土している。寸法は4cm×4cm、厚さ2cmで重量が50gの小鍛治滓である。おそらく木櫃墓内に副葬されていたものであろう。



第34図 貨幣拓影



第35図 7号墓出土の鉗具

# 第V章 結語

田辺古墳群・墳墓群は過去その存在が知られて居らず、周知の遺跡として取扱われていなかつたため、從来は田辺庵寺を建立したと考えられる田辺史氏の墓域は脅田山古墳群とされてきた。ところが、今回の調査によって7世紀に突如出現する同古墳群が、その墓域として、最も有力な候補地となるに至った。本古墳群は19基の円墳・方墳から構成されており、無袖式の横穴式石室・小石室・木棺直葬など各種の内部主体を持ち、古墳の時間的変遷を明確に示している。古墳の数は現在19基が検出されているが、墳丘が削平されたものの存在は現状では確認できないから、いま少し実数が増える可能性はある。墳墓群は9基の火葬墓からなる。8世紀前半～中葉にかけての時期に造営されており、古墳群の西の丘へ墓域を移している。畠地で削平が著しかったため、部分的に残存したものを検出したという状況であり、墳墓の実数や具体的な様相を詳細に提示することはできなかった。

今回の調査の過程で明らかとなった事象を、次に検討してみたいと考える。

## 1. 古墳群・墳墓群の群構成

### 1. 古墳群の群構成

<sup>註12</sup> 単位群の構成と形成過程 本古墳群を構成する各古墳群は、石室形態・棺台・鉄釘の出土状態からみて、全て単葬墓であることが明らかである。古墳は尾根の占地・周溝の共有のあり方から数グループに分類される。それは、東西に伸びる尾根東側の東群（1号墳～6号墳・15号墳）、尾根西側とその斜面に分布する西群（7号墳～14号墳・16号墳～19号墳）に大別される。

東群は周溝を共有する3号墳・4号墳・5号墳と15号墳、尾根の占地を同じくする1号墳・2号墳・6号墳の2グループに分類される。それらは、3～4基の古墳を1単位とする単位群である。

東群のAグループは、1号墳・2号墳・6号墳の3基からなる。墳形は全て円墳であり、直径8.5mの1号墳、8mの2号墳、4.1mの6号墳である。石室は全て無袖式横穴式石室で、同群中1号墳の規模が奥壁1.1m、残存長4.2mで最大である。1号墳は7世紀前半の土器が周溝から出土しており、2号墳・6号墳より古い。石室・墳形の規模の大型の石室から、小型の石室へと変化していくことが明らかであり、1号墳→2号墳→6号墳という形成序列が考えられる。

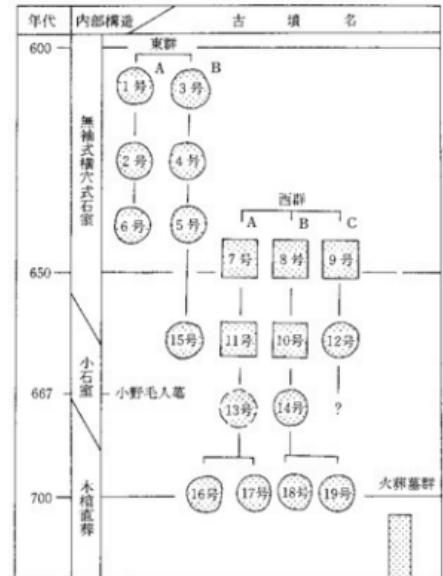
東群のBグループは3号墳・4号墳・5号墳・15号墳の4基からなる。全て円墳と考えられ、

周溝を共有する。時期は3号墳が造墓された後、4号墳が3号墳の東側周溝に付属して、幅1.5mの溝を円形に配置する。この為に3号墳の周溝底面にくらべ、4号墳の周溝底面は50cm~60cm深くなり、さらに4号墳の西周溝の形態が弧状とならない。のことから、両古墳の先後関係を確認することができる。5号墳はさらに4号墳に付属して周溝を共有する。副葬された土器も3号墳の遺物は、5号墳より先行する結果を示している。このように本グループは、3号墳→4号墳→5号墳→15号墳といった形成序列が考えられる。石室・墳形も大型の石室（3号墳）から小型の石室（5号墳）へと移行し、さらに小石室（15号墳）となる。

すなわち、東群のAグループとBグループは、3基ずつの古墳から構成される2小単位群があり、それらの中に時間的な流れと系譜が認められる。

次に西群について検討することにしよう。西群は、東群と異なった造墓占地が行なわれており、隣接する尾根の上段、尾根の中段、尾根の下段という3地区に区分される。こうした地区を基盤として、4つの単位群が形成されている。時期的にも構造的にも尾根上段の7号墳~12号墳が古く、中段の13号墳・14号墳が次の下段の16号墳~19号墳へ移ると云う流れが認められる。

尾根上段の6基の古墳については、石室構造からみて7号墳~9号墳の無袖式横穴式石室の古いグループと、10号墳~12号墳の小石室からなるグループの2種類があり、前者の石室様式



第36図 造墓模式図

をもつ石室では7世紀中葉の土器を出土しており、後者の形式に従う小石室には、新しい7世紀後葉に比定される土器の発見があり、従ってこの間に時間的な推移のことに気付くのである。こうした結果をもとに、単位群を把握すると次のように考えられるであろう。

西群のAグループは、7号墳・11号墳・13号墳・16号墳・17号墳の5基からなる。墳形は7号墳・11号墳が方墳、13号墳・16号墳・17号墳が円墳と考えられる。石室は7号墳が無袖式横穴式石室、11号墳・13号墳が小石室、16号墳・17号墳が木棺直葬であり、横穴式石室から小石室へ変り木棺直葬へと変遷する過程がたどれる。のことから、形成序列は7号墳→11号墳→13号墳→

16号墳→又は17号墳の順で逐次造墓されたものとされるであろう。墳形も11号墳が方墳、17号墳が円墳であることから、13号墳の段階で円墳に変化するのである。

次に西群のBグループであるが、8号墳・10号墳・14号墳・18号墳・19号墳の5基から構成されている。西群のAグループと同様に立地・内部構造から造墓の序列は、8号墳→10号墳→14号墳→18号墳又は19号墳へ移向する。墳形は、方墳→方墳→円墳→円墳の順で変化しておりAグループと同じ変遷をしている。

西群のCグループは9号墳・12号墳の2基が構成されており、調査区西端のグループである。9号墳は12号墳と周溝を共有するが、12号墳より先行するものと考えられている。造墓の形成序列は9号墳→12号墳となるが、他は調査区内には存在しない。墳形は9号墳が方墳、12号墳が円墳であり、内部構造も前者が無袖式横穴式石室と考えられ、後者が小石室である。

西群で特に注目されることは、尾根上段に同規模墳と考えられる7号墳・8号墳、西に隣接する10号墳・11号墳があり、2基が1対となっているようである。時期は先の通り7号墳・8号墳が古く、10号墳・11号墳が後出するが、この各2基が規模・石室の主軸方向が同一であり、同時に計画的に対で造墓された可能性を示唆する。このことから、造墓に対する選地がある段階にすでに決定されていたと見なすことができよう。

このように、本古墳群は単葬である各古墳が5単位群によって構成されており、7世紀前半から8世紀初頭にかけて逐次造墓がなされていると考えられる。一応の模式図（第36図）を提示して理解に具えたい。これらの単位群は、戸主の死を契機に造墓を行なった有力家父長層の系譜と考えられ、東群で2家族3世代、西群で3家族4世代にかかる造墓と解することが可能であろう。

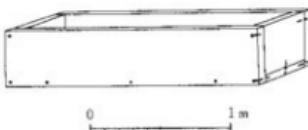
造墓時期について、副葬品としての土器を出土している古墳は10基認められるが、年代を決定できるものは少ない。造墓模式図（第36図）を基にまず無袖式石室から検討することにしよう。最古の古墳と考えられるのは1号墳である。周溝内の土器群が造墓時期を示すものであれば、7世紀前半（第2四半期）とすることができるが、造墓後の供獻具と考えると古墳の造墓時期はさらに一形式古く考えることもできよう。7世紀中葉の土器を出土する5号墳・7号墳・8号墳がある。さらに、やや新相を示すものと考えてさしつかえないものに11号墳・15号墳出土品があるが、ほとんど大差ない。これらのことから考えると、無袖式横穴式石室の下限は7世紀後半（第3四半期）<sup>114</sup>墳と考えられる。小石室の年代を探る上で参考になるのは小野毛人墓である。小野毛人墓は、677年の銘をもつ墓誌が内部主体である小石室から出土している。すなわち、小石室の年代の1点を680年頃に求めることができる。これにつづく木棺直葬墓は遺物が出土しておらずその時期不明であるが、おそらく小石室に統く時期の所産であり、古墳に一般的に検出される耳環とはやや異なる点が認められる事もあり、7世紀末～8世紀初

頭と考えることが最も妥当であろう。

**木棺の復元** 組合式木棺には釘・鉄を用いるものの多くの場合、横穴式石室と云う空間に葬られるため木棺の痕跡が残らず、追葬や再利用によって動力されることもあり、復元のため良好な資料の遺存は稀めて少なく不明な点が多い。すでに復元を試みた論文もあるが、釘の分布範囲から木棺の埋葬位置と規模の確認にとどまることが多い。田辺古墳群の場合、木棺直葬の16号墳・17号墳・19号墳及び小石室の10号墳・12号墳が単葬が明らかたため、これらの鉄釘を基に木棺の復元を試みることができた。

19号墳は木棺痕跡の北西部に釘①が位置し、少し離れて釘②が出土した。木目Bの釘⑤は木棺痕跡の主軸中央に位置し、釘の頭を下にして直立しており底板から短側板を留めたものと思われる。先の釘①・釘②は、棺の北西隅である。釘③・釘④は原位置を留めていないが、北東隅部分の長側板から短側板を留めていたと考えられる。長側板の底面近くに木目Aの釘が東側に2本（釘⑥・釘⑧）、西側に釘⑦があり、底板に横方向に走る木目の幅が板材の厚さとして示されるので、底板が3.5cm、両側板が5cm前後と短側板寄りに4対が認められる。釘の長さは、9cm～11cmで厚さ0.6cm×0.4cmの鉄釘を用いており9本が残存する。棺身の釘の本数を復元すると1棺分で16本となる。

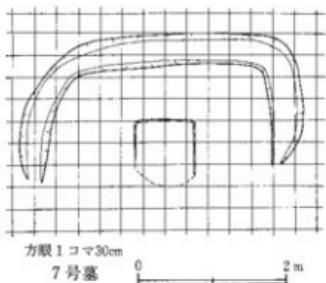
同様に16号墳・17号墳を検討すると、短側板と底板と両長側板の釘の留め方が上記と同一である。さらに、17号墳では木棺痕跡北半で耳環が1対出土されており、被葬者の頭位が北枕であった事も知られる。木棺の構造は各古墳の出土状況を総合すると両側板の間に底板を挟み、その小口部に短側板を落し込む構造で、短側板を留めるため上・下に釘を打つ。さらに、長側板を留めるため、底板に向って6ヶ所を留める手法をとっている。棺材は1号墳・7号墳で厚さ10cm前後の厚い底板を使用していると考えられる。他のものは、底板が厚さ5cm～6.5cm、側板が厚さ3.5cm～4cm内外のものが一般的に使用されているようである。このように、1号墳・7号墳を除くと横穴式石室・小石室・木棺直葬に用いられた木棺は、規模こそ差があるが構造上同一のものとして考えることができる。棺蓋は鉄釘を用いず1枚板であろう。



第37図 19号墳木棺復元図

## 2. 墳墓群の群構成

**墳墓の分布** 墳墓は等高線に沿って東西に走る墓道を挟んで上段・下段に区分されている。上段は周囲に配石した木櫃藏骨器が3基からなり、下段は木櫃藏骨器を内部主体とする4基と、有蓋短頭壺を藏骨器として用いるもの1基からなる。これらの内には、木櫃藏骨器を内部主体



第38図 木櫃の復元と計画図

遷するものではなく、同時期に共存する葬法といえる。時期は、8号墓の土器が平城宮II期（S D 485）に類似しており、8世紀前半に比定できよう。<sup>註17</sup> 9号墓は、八尾市心合寺山出土の<sup>註18</sup> 蔵骨器に類似しており、8世紀中葉と考えられる。さらに、7号墓は周溝内より土師器と須恵器の壺が出土しており、8世紀前半に造墓されているようである。墳墓群の造墓は、墓道が7世紀後半に作られた後、上段に1号墓～3号墓が8世紀初頭に造墓され、続いて下段に4号墓～8号墓が8世紀前半、9号墓が8世紀中頃と云うように上段から下段にかけて逐一造墓がなされている様である。

**副葬品** 4号墓から鉄滓、7号墓から銅製鉢具、8号墓から和銅開珍11枚が出土している。その副葬品を基に被葬者の性格を分析すると、小鍛治の出土した4号墓は田辺史氏の中でも特に小鍛治に関連した職種の被葬者であると考えられる。8号墓は墓域の中でも最も厚葬であり、墳墓中最も有力戸主の被葬者であろう。7号墓は1辺3mの方形墳墓で唐尺にすると10尺四方を示すと思われる。内部主体の木櫃もほぼ中央部に埋置されている。副葬品の中には、鉢具が検出されているが、銅鏡等の発見もないことからして、田辺史氏の内でも無位の被葬者であろう。墳墓は墓道によって区画され造墓されており、石敷き遺構・7号墓の南部分が削平されているが、基底面を復元すると斜面を階段状に整地している可能性が濃厚である。またこのよう<sup>註19</sup> な例は、奈良県桜井市横枕火葬墓群や岡山県矢掛町の下道閉道依田夫人の火葬墓地ででも指摘

として周囲にコ字状に周溝を配するものも存在する。

また、石敷き遺構は中央部下段に位置し、幅7.5mのコ字状に22.5m<sup>2</sup>の配石がある。4号墓・5号墓は、墓道の主軸に対し直交又は平行しており、墓道が作られた後に造墓がなされている。

**内部構造** 主体部から出土する遺物や土層堆積の検討を通じて、3種類に大別できる。1は、鉄釘の出土によって、木櫃藏骨器と考えられる内部主体をもつもの（1号墓～7号墓）、2は、いわゆる土器内に火化した骨を内含する藏骨器（9号墓）、3は、火化した焼骨を捨骨し、壇上に盛り土器を用いて蓋としたもの（8号墓）である。これらは、全て火葬骨を内含した藏骨器である。これらは、全て火葬骨を内含した藏骨器である。

うした3種の葬法は、土器で見る限り時間的に変

<sup>註16</sup>

遷するものではなく、同時期に共存する葬法といえる。時期は、8号墓の土器が平城宮II期

（S D 485）に類似しており、8世紀前半に比定できよう。

9号墓は、八尾市心合寺山出土の<sup>註17</sup> 蔵骨器に類似しており、8世紀中葉と考えられる。さらに、7号墓は周溝内より土師器と須恵器の壺が出土しており、8世紀前半に造墓されているようである。

墳墓群の造墓は、墓道が7世紀後半に作られた後、上段に1号墓～3号墓が8世紀初頭に造墓され、続いて下段に4号墓～8号墓が8世紀前半、9号墓が8世紀中頃と云うように上段から下段にかけて逐一造墓がな

されている様である。

されており、同様な墓域区画と考えることができる。

## 2. 『田辺史』氏とその氏墓をめぐって

### 1. 田辺史氏の墓域

田辺史氏は、田辺廃寺を建立した氏族と考えられ、その居住区域は現在の柏原市田辺を中心とする一帯であろうとされている。集落は、この地域の調査で柏原市教育委員会によって、掘立柱建物・井戸状遺構・溝跡が発見されており、<sup>註20</sup>田辺地域の三つの台地上に立地することが知られ、その中央に田辺廃寺がある。この氏族の墓域と考えられるのが、今回調査した田辺古墳群・田辺墳墓群であろうと考えている。その根拠とするところは、次の3点である。

1. 立地的に田辺台地周辺には、おいなり古墳を除くと古墳時代後期～奈良時代の古墳・墳墓群は認められず、最も近接する芝山古墳群でさえ北へ1.1km、譽田山古墳群は南へ1.2km、玉手山東横穴群で西へ0.9km離れている。地理的にも譽田山古墳群・玉手山東横穴群は、原川左岸にあたり対岸となる。芝山古墳群は府分布図に記載されているが、その存在や具体的な内容は不明であり、いま立論の対象にしえない。このようなことを総合すると田辺池谷を挟んで300m距離をもって隣接する本古墳群・墳墓群がその墓域として最も妥当であるといえよう。

2. 物的証拠としては、本墳墓群内の8号墓使用の方堀（1辺29cm、厚さ9cm）が、田辺廃寺東塔所用の方堀と寸法・手法・胎土・焼成において同一であり、寺用の堀が転用されているといえる。さらに、9号墓の外容器として使用されている平瓦も、田辺廃寺所用の一枚造り平瓦と酷似しており、そうした点で田辺廃寺を建立した氏族の墳墓であるとすることができる。

3. 古墳群は、墳墓群の東側40mの同一尾根上に立地しており、7世紀に始まり8世紀初頭で造墓をほぼ終了している。西側の墳墓群は、8世紀初頭に始まり8世紀中葉まで造墓を行っており、この時間的な相異を通じてみる限り、同一氏族の墓域が東側の丘陵腹から西側の尾根先端へと占地したことを示唆しているものとみることができる。

こうした3点から本古墳群・墳墓群は、田辺廃寺を建立した氏族の古墳群・墳墓群であり、



第39図 田辺史氏の墓域

すなわち田辺史氏の墓域と見なすことができると考えられるのである。

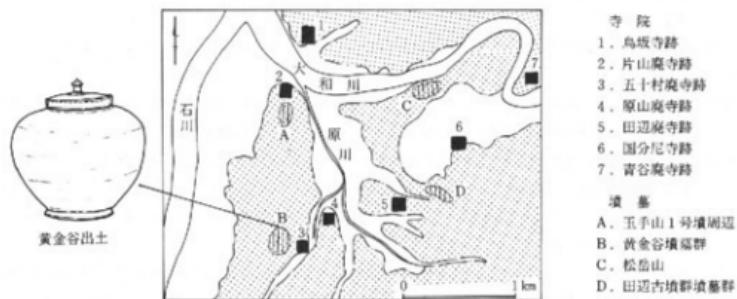
古墳群は東群A・Bグループと西群A・B・Cグループの5単位群から構成され、時期的にその系譜がたどれる。この単位群は、田辺史氏の有力家父長層の戸主の死を契機に造墓された单葬墓である。造墓は、試案で示したように東群A・B家族が7世紀前半より中葉まで3世代にわたって造墓を行っている。やや遅れて西群A～C家族は、7世紀中葉に方墳として出現し4世代にわたって造墓を行い8世紀初頭に造墓をおえている。東群のA・B家族は、1号墳・3号墳の段階では直径8.5m前後の円墳を造墓しているが、5号墳・6号墳になると直径4.5m前後の円墳となり、墳形の規模も石室の規模も小型化している。しかし、円墳と云う墳形と無袖式横穴式石室様式は踏襲されている。西群のA～Cの家族は、造墓1段階は方墳として西尾根に立地し、内部主体は無袖式横穴式石室である。造墓2段階で小石室が内部主体となり、墳形も円墳となるものや一辺4.5mの方墳となるものがあり、小型化が著しい。さらに造墓4段階になると、木棺直葬を内部主体とした直径3m前後の円墳となる。このように西群では、無袖式横穴式石室→小石室→木棺直葬と云う内部主体の変化が系譜的にたどれるのである。東群・西群の2群は、古墳の占地・形成過程・存続のあり方が異なり、東群では1単位群で一定空間に造墓地が設定されているのに対し、西群は数単位群で上段・中段・下段と云う様に造墓空間が各世代ごとに移動するようである。このような造墓地の占地は墳墓群とも類似する面として注目される。また、1号墳の周溝内には、土器と共に鉄滓が供獻されており、被葬者の性格が小鍛冶関連の職種と関係するものと考えられよう。

墳墓群は西南地域の削平が著しく、群の系譜は明らかにしない。これらは全て火葬墓で、墓道によって上・下段に区画され、その内部に8世紀初頭から8世紀中葉まで造墓がなされている。特に火葬墓は8世紀前半に出現しており、田辺史氏が中央の埋葬方法をいち早い段階から採用していることを示している。このことは、田辺史氏が百濟系の渡来系氏族であるとされる要因を求めることができよう。そのあり方は、文献で見られる「氏墓」として把えることができよう。墓域内には特別な厚葬を示すものではなく、小規模で木櫃・土器を藏骨器とするものが多い。この事は墳墓内に墓誌・銅鈔等を副葬した厚葬ではなく、田辺地域を本貫地として朝廷に仕えた宮人墓を含んでいない可能性が濃厚である。そのあり方は、この田辺地域に居住する田辺史氏の有力家族の墓域であろう。また、本古墳群・墳墓群は、墓地として一部9世紀末～10世紀と、12世紀頃に古墳が再利用されている以外には全く後世に利用されておらず、遺構の重複は認められない。奈良時代以降もその存在が意識されていたかのようであるが今では立証することができない。

## 2. 周辺の墓域

7世紀中葉から8世紀にわたる墓域は、旧安宿郡（柏原市内）内では、4ヶ所を認めること<sup>註24</sup>ができる。1は船氏の墓誌を出土した松岳山周辺、2は玉手山丘陵の北端、玉手山1号墳や片山庵寺周辺であり、3は玉手山9号墳の東側斜面の黄金谷、4は今回調査を実施した田辺古墳群・墳墓群である。これらは、1の船氏の墓域を除くと全て古代寺院が周辺に占地している。その内でも、黄金谷古墓は、金銅製藏骨器に和銅3年の墨書銘があり、周辺から藏骨器が多量に出土したと云う。文献上では、船氏の本貫地、野中寺の地の南側、『寺山』に葛井・船・津氏の共同墓域であったとされており、同様な事例として本古墳群・墳墓群をあげうるに至った意義は大きい。

これらの知見をもとに旧安宿郡内の各種の葬法を用いた藏骨器があり、被葬者を故地に火化した後に拾骨し、この墓地に搬入し造墓したものである。この地域に所在する黄金谷墳墓群や田辺墳墓群は、河内出身である道昭の火化以後、直ちに火葬が行なわれた地域といえるであろう。旧安宿郡内で墳墓群の墓域を形成した氏族としては、今回の田辺史氏・船氏以外には必ずしも明らかでないのが現状である。しかし、古代寺院の背後に立地しているものが多く、各寺院の建立氏族との関連や氏族名の探求が今後の課題となるであろう。このように、古代の渡米系氏族中でも著名な田辺史家の墓址の実態が明らかとなった。その中でも特に墓域の変遷・群構成・墳墓の構造・造墓時期等の若干の問題について述べ簡単に問題を提示するに留まったが、残された課題も多く後日あらためてその責を果したいと考える。



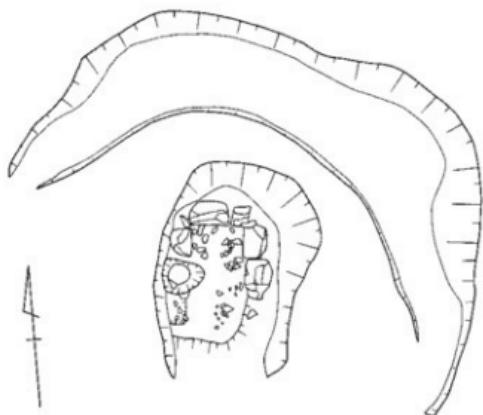
第40図 墳墓の分布

## 参考文献

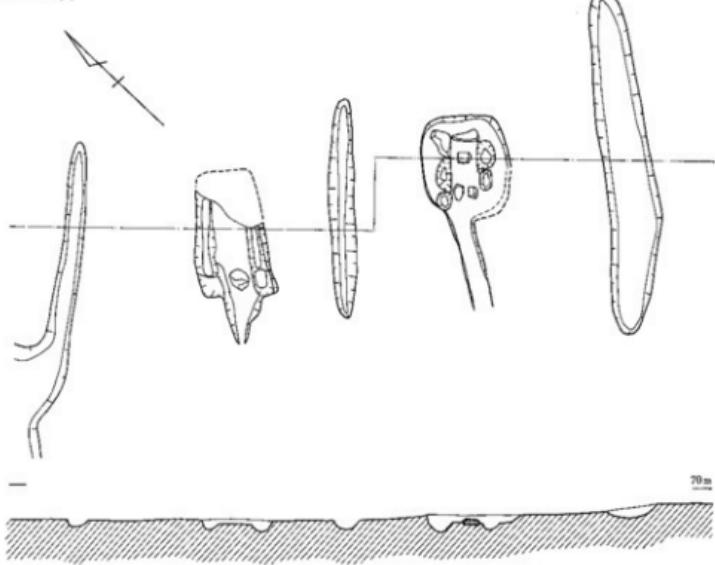
- 註1. 白石太一郎 「畿内後期大型群集墳に関する試考—河内高安千塚及び平尾山古墳群を中心として」 『古代研究』 42・43合併号 昭和41年)
- 註2. 堅田 直 「玉手山遺跡の検討」 (『古代を考える』第7号 昭和51年)
- 註3. 大阪府教育委員会 『田辺廃寺発掘調査概要』 (昭和47年)
- 註4. 柏原市教育委員会 『柏原市埋蔵文化財概報』 (昭和57年)
- 註5. 大阪府教育委員会 『柏原市国分東条町河内国分寺発掘調査概要』 (昭和45年)
- 註6. 従来より箱式石棺と呼ばれている小型の石室で、单葬として多くの場合使用されている石室様式である。呼び方についてはさまざまな意見があるが、便宜的に「小石室」の用語を用いて取り扱っている。
- 註7. 奈良国立文化財研究所 『飛鳥・難波京発掘調査報告-II』 (『学報』第31冊 昭和53年)
- 註8. 田中 研 「土器一覧内一」 (『日本の考古学 歴史時代(上)』 昭和42年)
- 註9. 木下保明 『旭山古墳群発掘調査報告』 (『京都市埋蔵文化財調査報告』第5冊 昭和56年)
- 註10. 柏原市教育委員会調査 田辺瓦窯址群 昭和58年10月調査
- 註11. 大阪府教育委員会 昭和41年調査
- 註12. 水野正好 「雲雀山東尾根古墳群の群構成とその性格」 (『古代研究』第4号 昭和44年)
- 註13. 水野正好氏によって单次葬についての概念規定が行なわれている。田辺古墳群の場合、小石室・木棺直葬は、木棺の釘を基に復元すると1体の被葬者のみの单葬墓であることが明らかである。横穴式石室について、石室空間や釘の出土本数から考えると单葬が主体を占めると考えられるが、单次葬のものも含まれる可能性もある。水野正好 「群集墳の終焉」 (『古代の日本』畿内地方 昭和48年)
- 註14. 梅原末治 「小野毛人の墳墓とその墓誌」 (『考古学雑誌』7卷第8号 大正6年)
- 註15. 前掲書(註9)
- 註16. 奈良国立文化財研究所 『平城宮跡発掘調査報告-IV』 (『学報』第23冊 昭和50年)
- 註17. 清原得慶 「心合寺山出土の藏骨器」 (『大阪文化誌』第6号 昭和52年)
- 註18. 末永雅雄 「磯城郡上之郷村大字笠字横枕火葬墳墓」 (『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第5集 昭和30年)
- 註19. 梅原末治 「備中國小野郡を於ける下道氏の墳墓」 (『考古学雑誌』第7卷第5号 大正6年)
- 註20. 前掲書(註4)
- 註21. 柏原市内では、鉄津を副葬した古墳としては平尾山古墳群太平寺支群中の1基(昭和58年6月 桑野一幸調査)、同古墳群安堂寺支群中の1基(昭和58年8月 花田勝広調査 烏坂寺内)の2ヶ所がある。
- 註22. 『類聚三代格』巻第16 「山西數沢江河地沼事」條の、慶雲三年(706)三月十四日詔として「氏々祖墓及百姓宅並、栽樹為林、并両二三十許步不在禁限」とあり、その「氏々祖墓」として出現するのが氏墓と考えられる。氏墓については、岡野慶隆 「奈良時代における氏墓の成立と実態」 (『古代研究』第16号 昭和53年)を参照した。
- 註23. 本質地に造墓していないものとして、美努連岡万呂(河内国若江郡)、文忍寸称麻呂(河内国古市郡)、山代恩寸真作(河内国石川郡山代郷)等があげられる。下級官人は含まれていないと考えられる。( ) 内は本質地である。
- 註24. 小島俊次 「墓誌」 (『新版考古学講座』第6巻 昭和45年)
- 註25. 山本 昭 「工芸品」 (『柏原市史』第4巻 昭和51年)

# 図 版

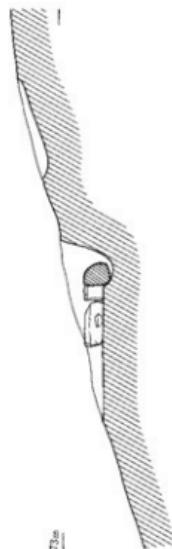
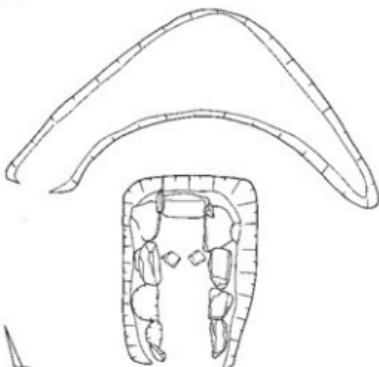
2号墳



10・11号墳

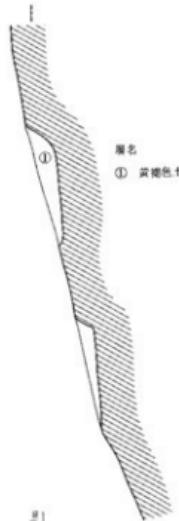
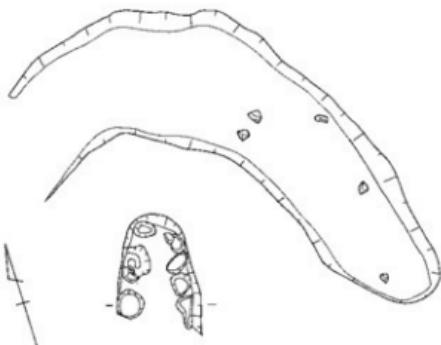


6号墳



73m

15号墳



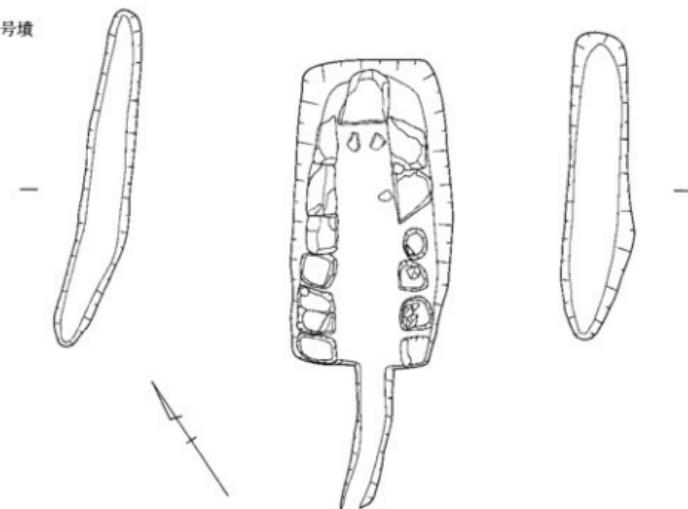
層名  
① 黄褐色土

70m

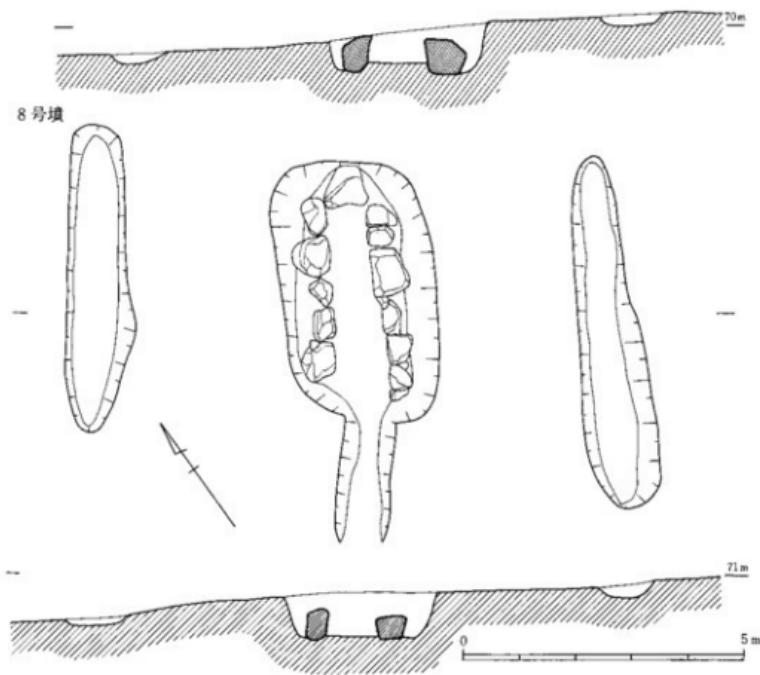
0

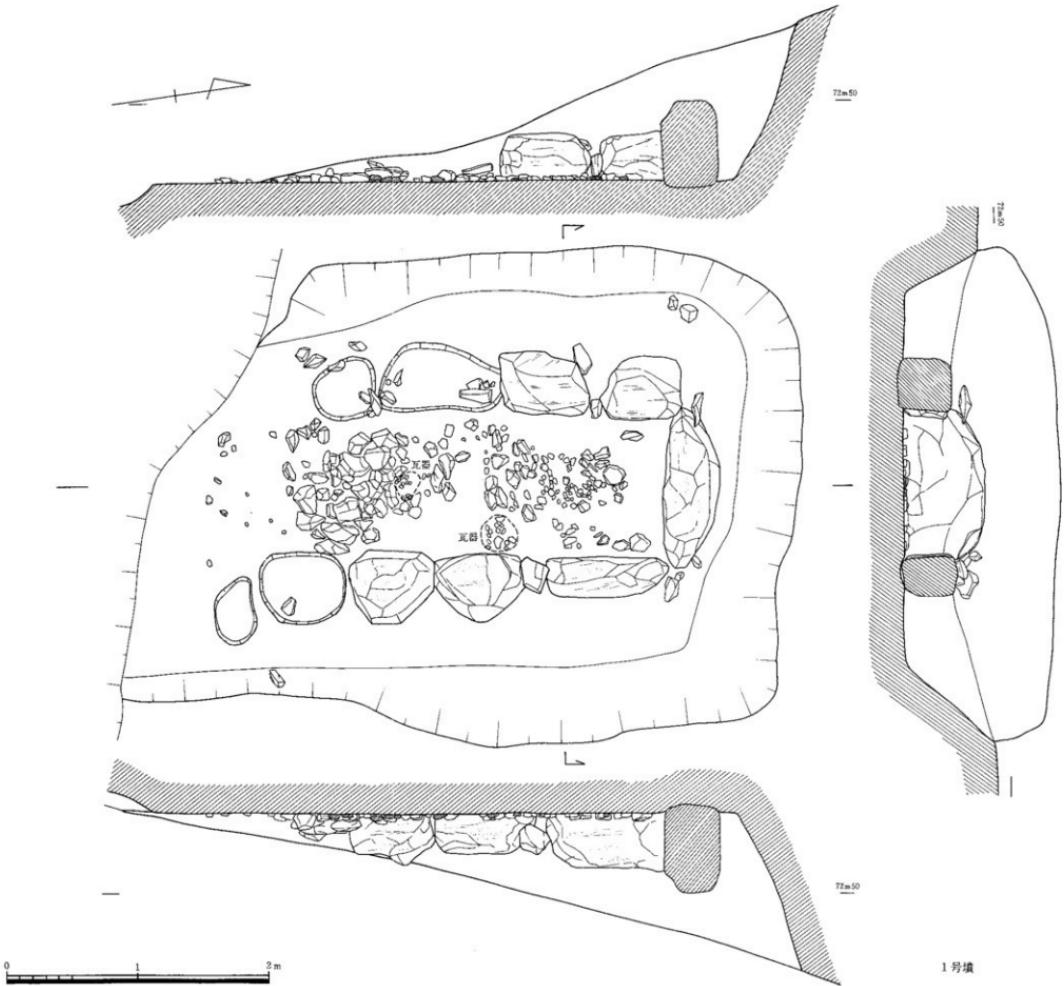
5m

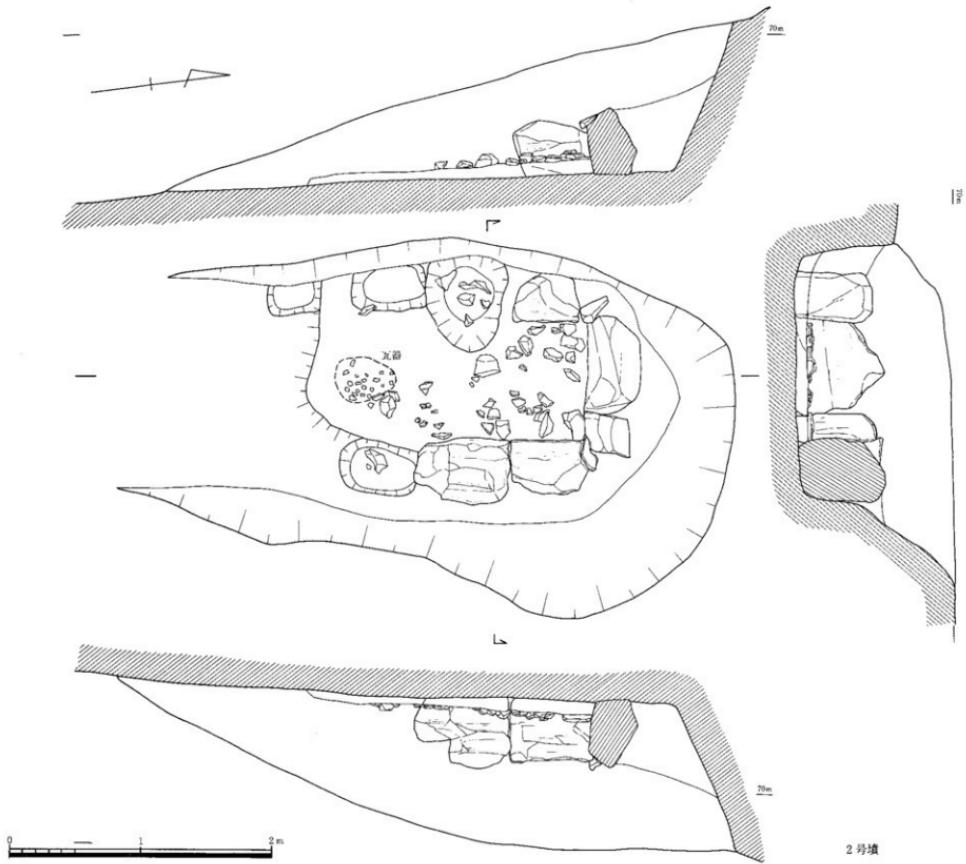
7号墳

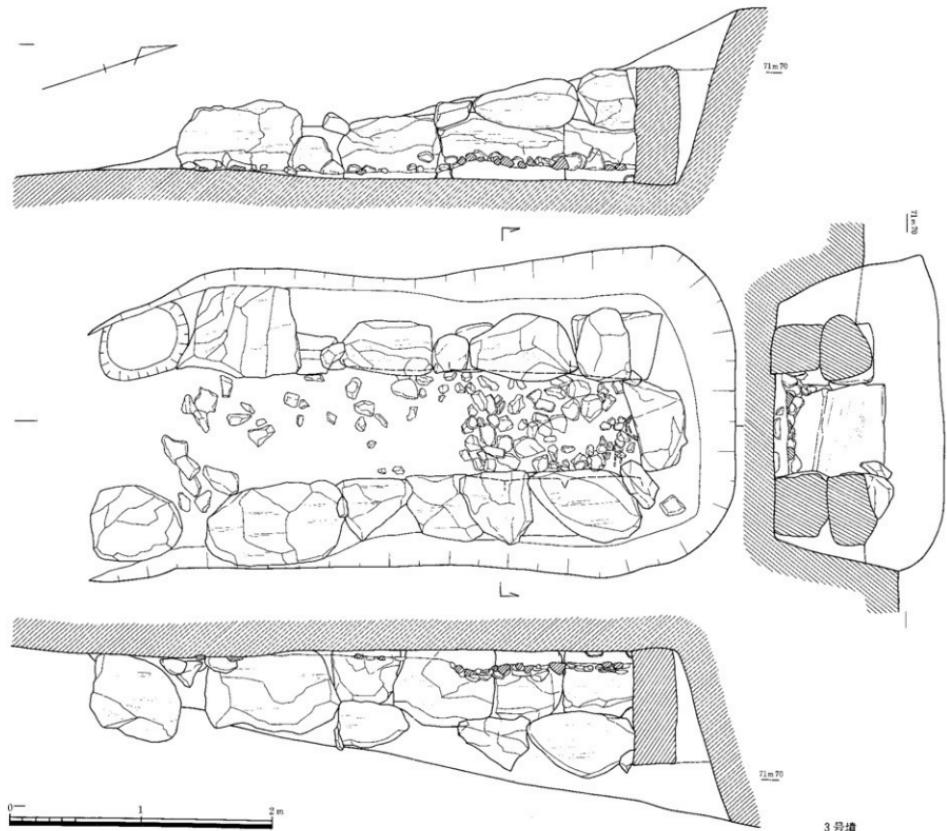


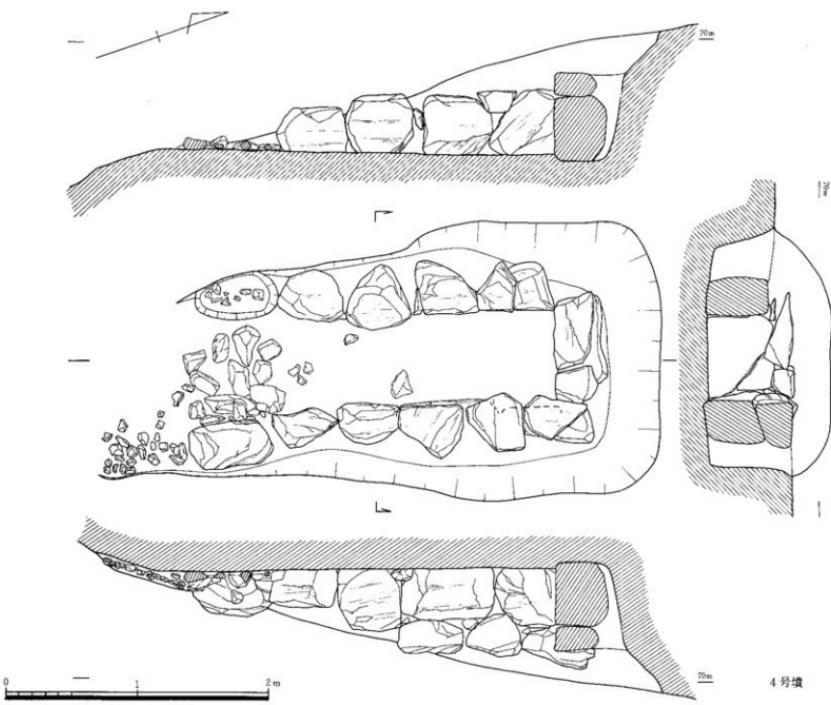
8号墳



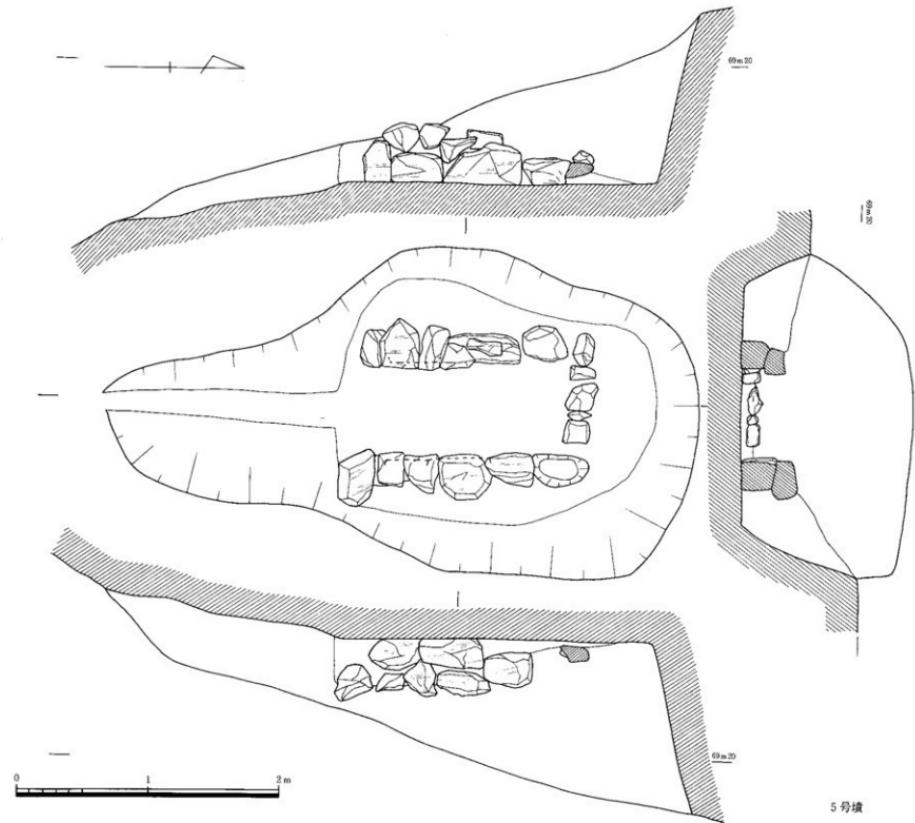


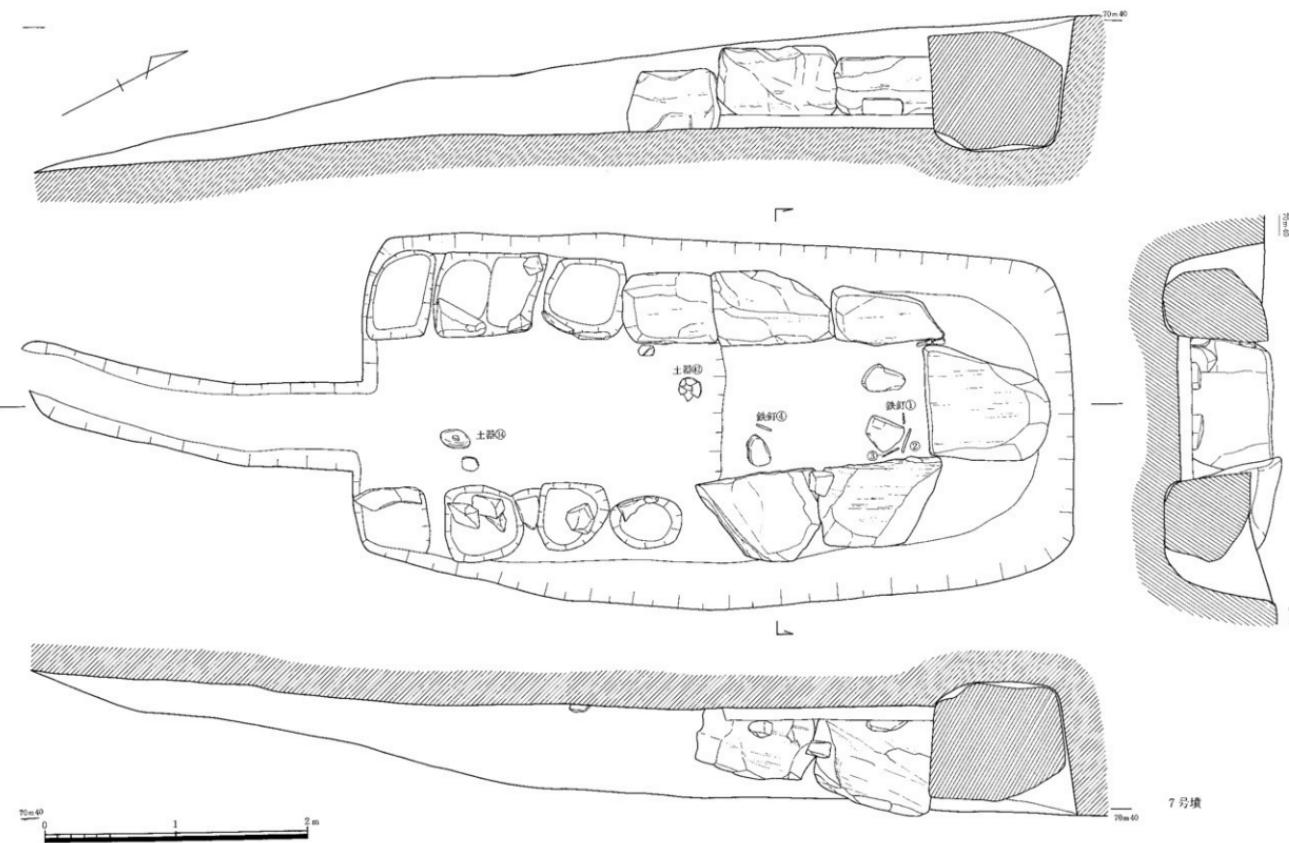


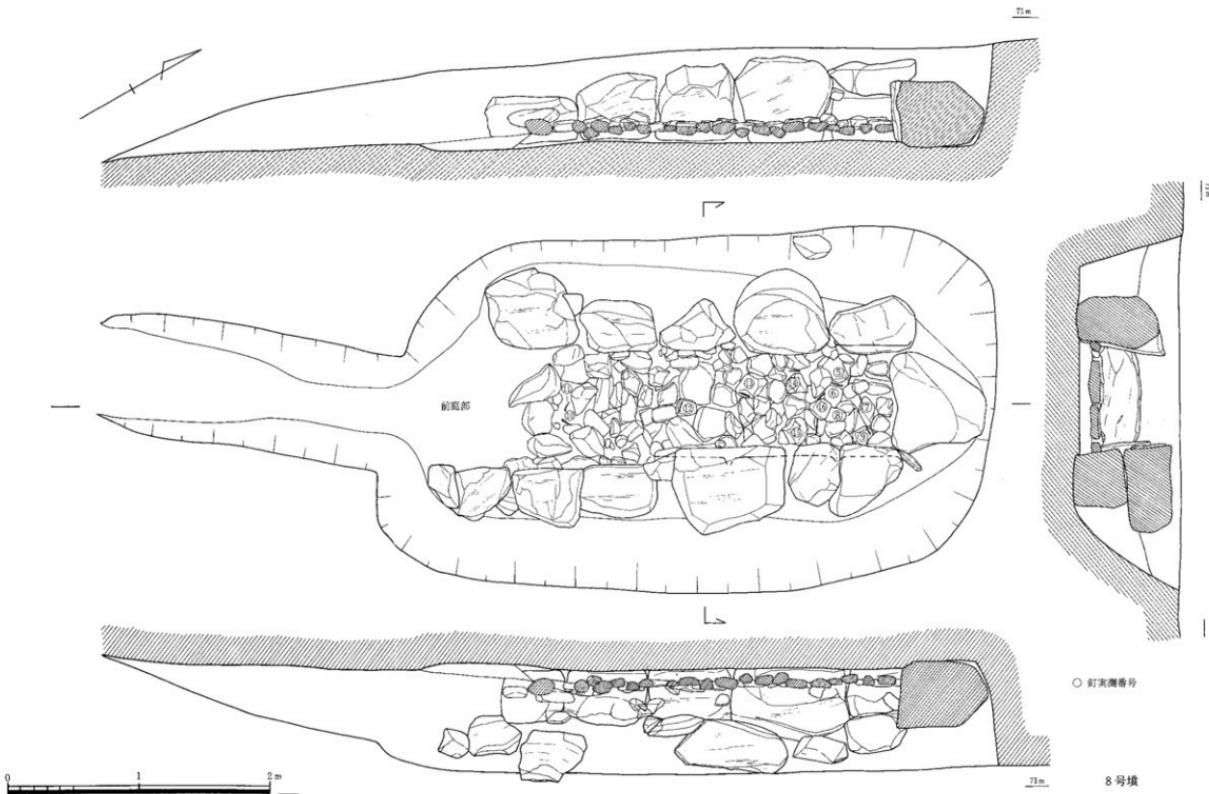


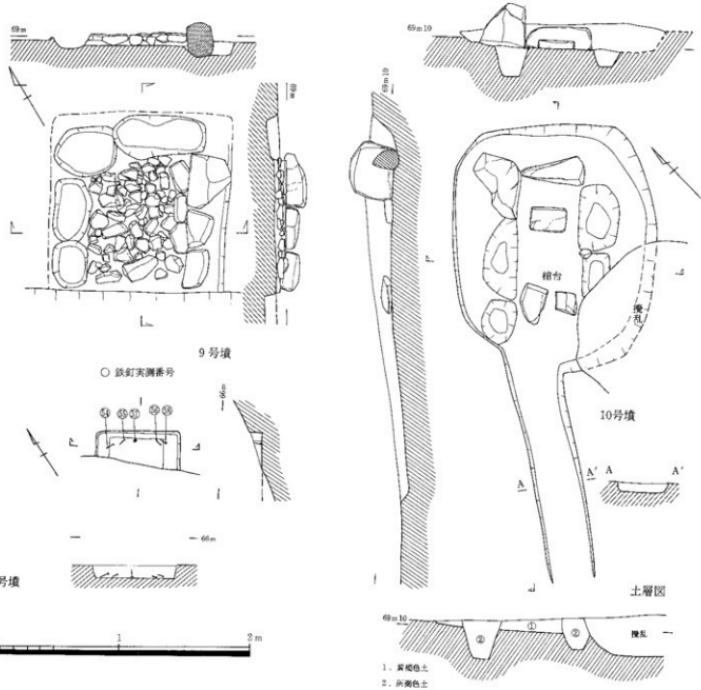


4号墳

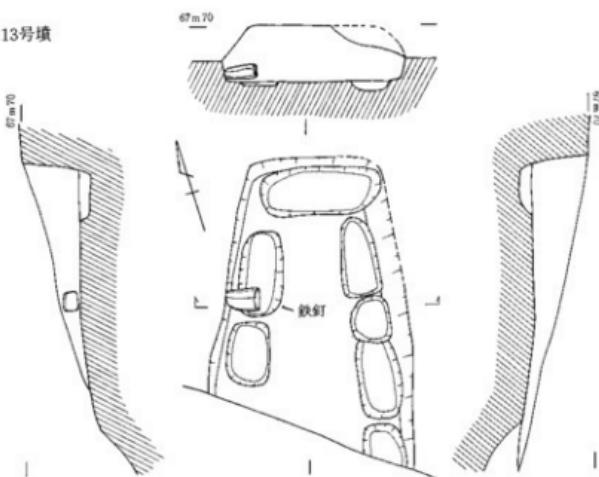




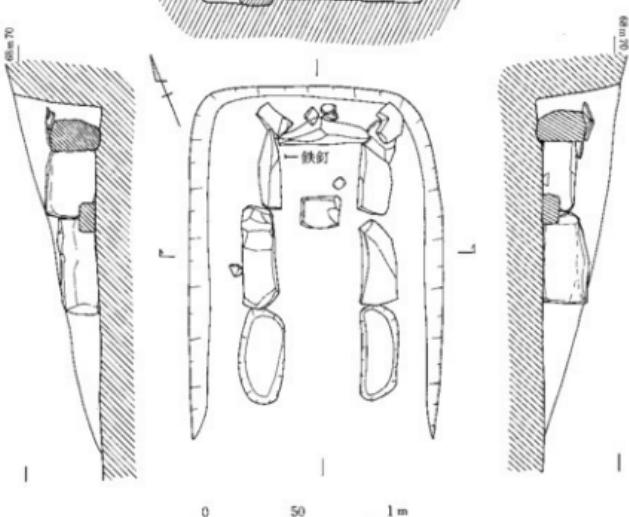




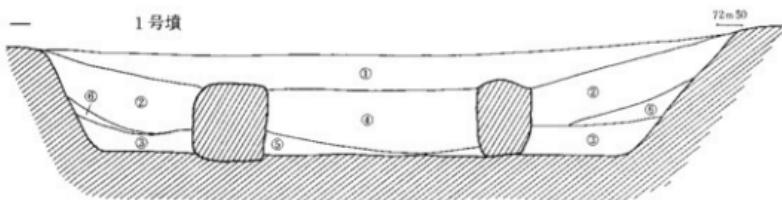
13号墳



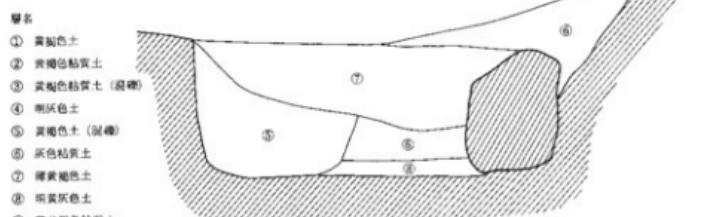
14号墳



1号墳



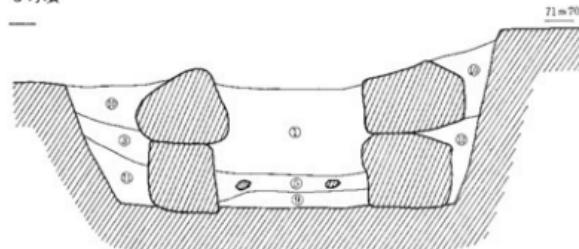
2号墳



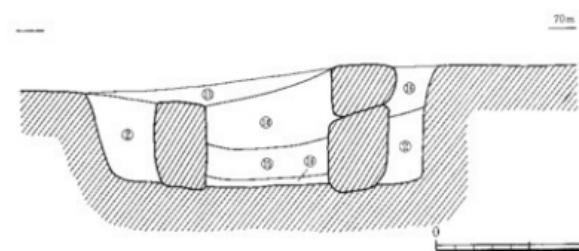
## 層名

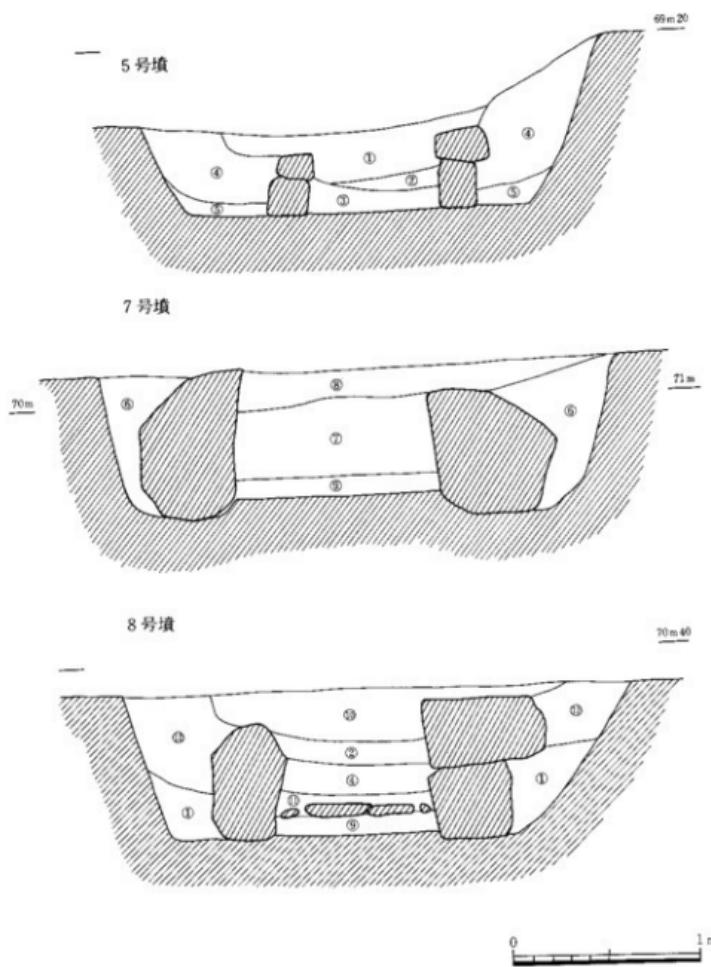
- ① 黄褐色土
- ② 黄褐色粘質土
- ③ 黄褐色粘質土(泥炭)
- ④ 明灰色土
- ⑤ 黄褐色土(泥炭)
- ⑥ 灰色粘質土
- ⑦ 薄黄褐色土
- ⑧ 明黄灰色土
- ⑨ 薄黄褐色粘質土
- ⑩ 明黄褐色土(泥炭)
- ⑪ 黄灰色粘質土
- ⑫ 薄黄褐色粘質土
- ⑬ 黄灰色土
- ⑭ 黄色土
- ⑮ 明黄褐色粘質土

3号墳



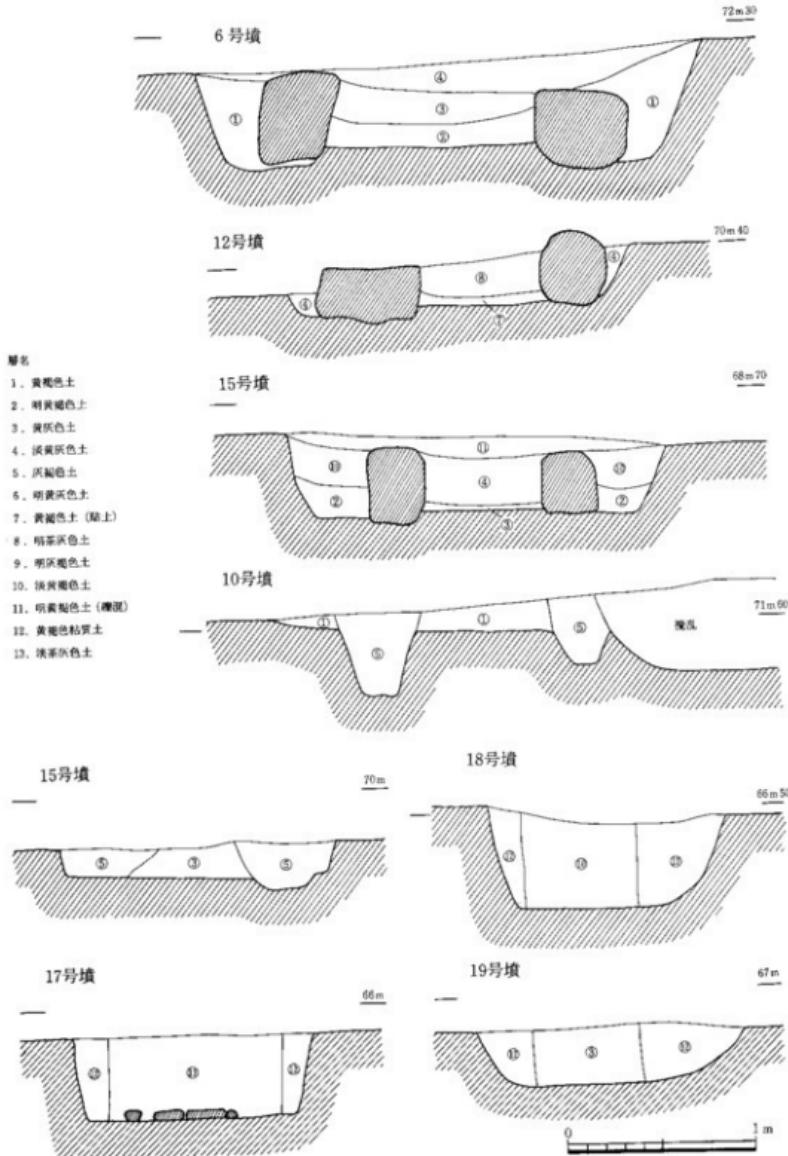
4号墳

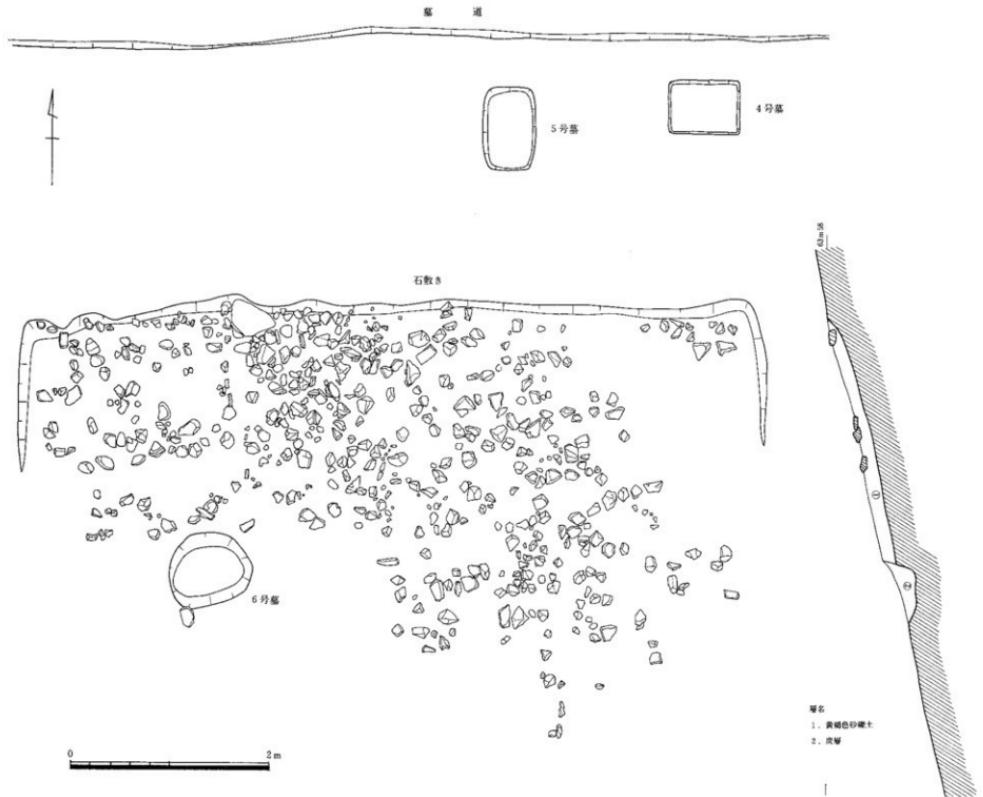




- | 層名       |               |              |
|----------|---------------|--------------|
| ① 明黃褐色土  | ⑤ 黃褐色土        | ⑩ 薄黃褐色土      |
| ② 黃灰色土   | ⑦ 明黃色土        | ⑪ 黃褐色粘質土(泥炭) |
| ③ 黃褐色砂質土 | ⑧ 淡黃色土        | ⑫ 薄黃褐色土      |
| ④ 黃灰色粘質土 | ⑨ 明黃褐色砂質土(粘土) |              |
| ⑤ 灰色粘質土  | ⑩ 黃褐色粘質土      |              |

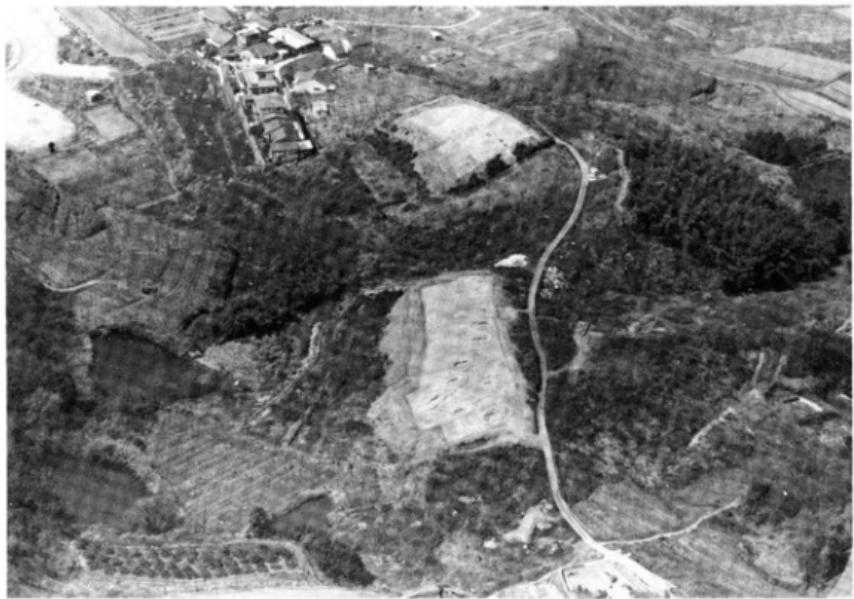
0 1 m







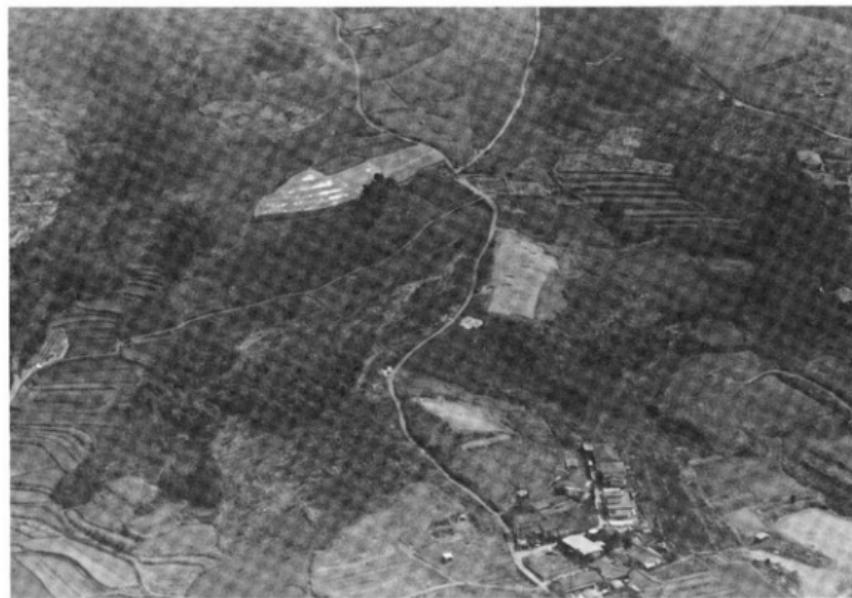
古墳・墳墓群 全景（南より）



同 全景（東より）



古墳群 全景（北より）



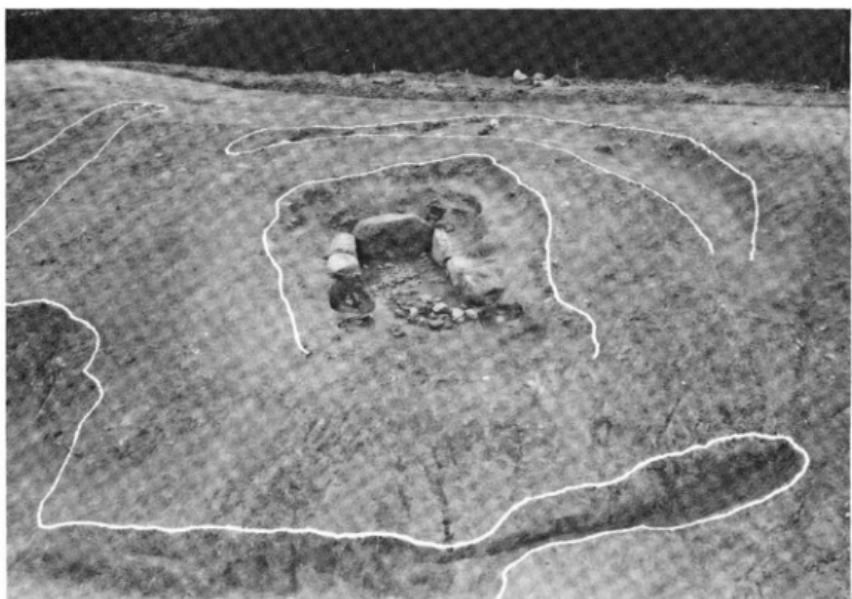
同 全景（西より）



東群 全景



西群 全景



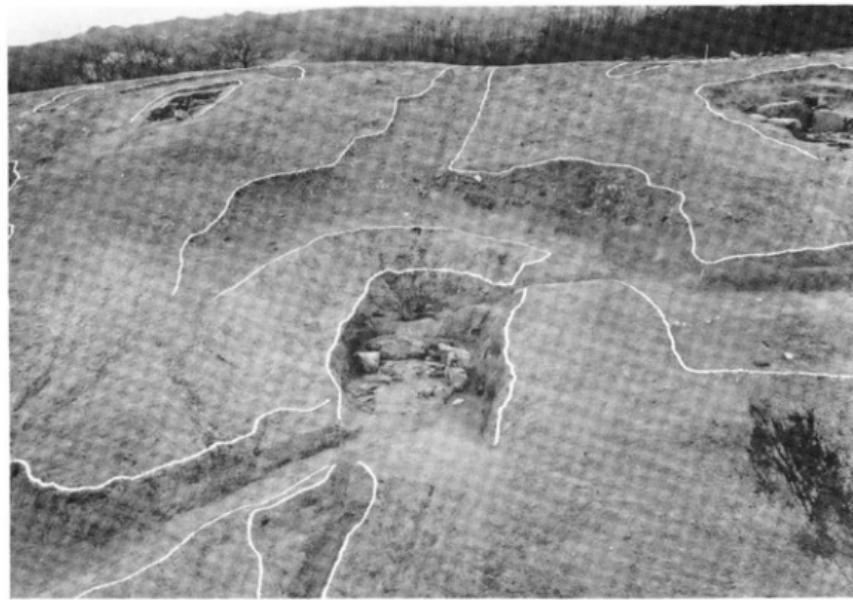
1号墳 全景



1号墳 奥壁と棺床



1号墳 棺床



2号墳 全景



2号墳 石室



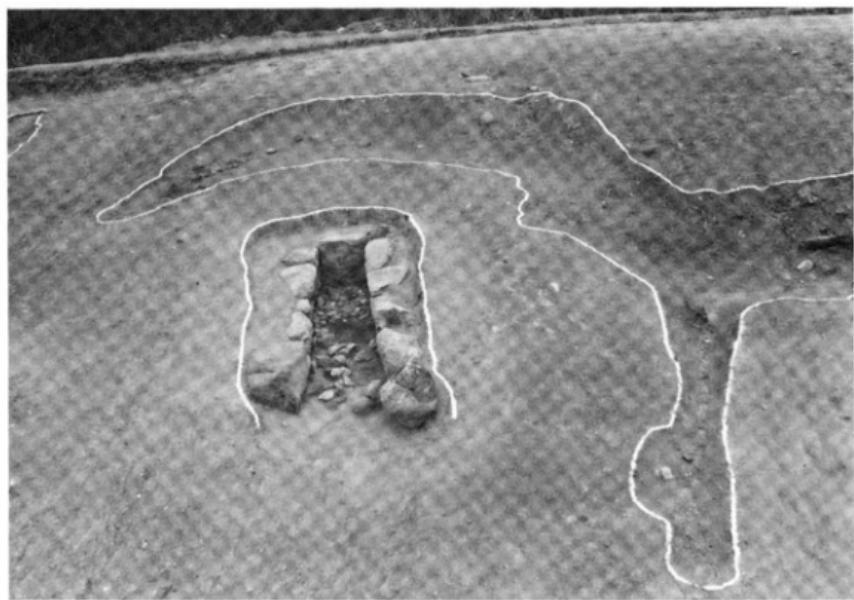
1号墳 石室



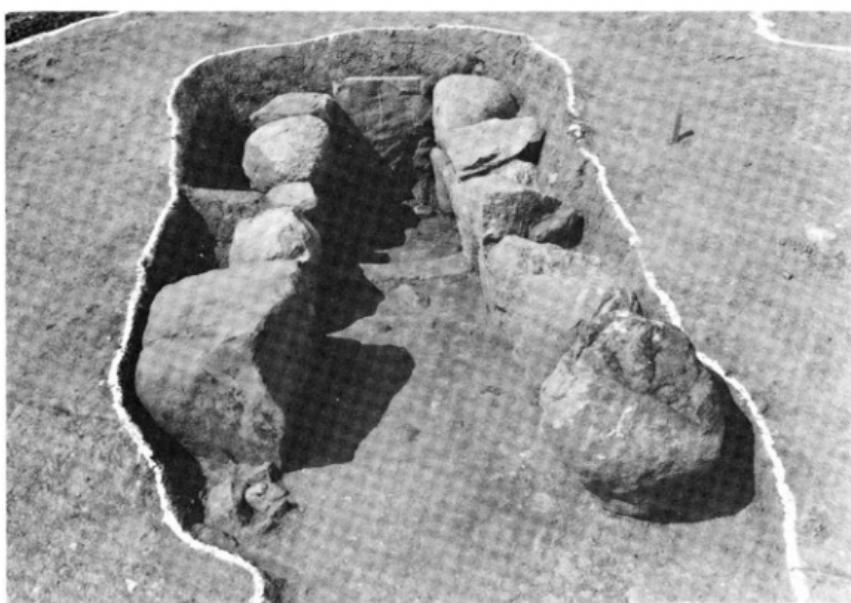
2号墳 奥壁



3号墳 全景



3号墳 全景（南より）



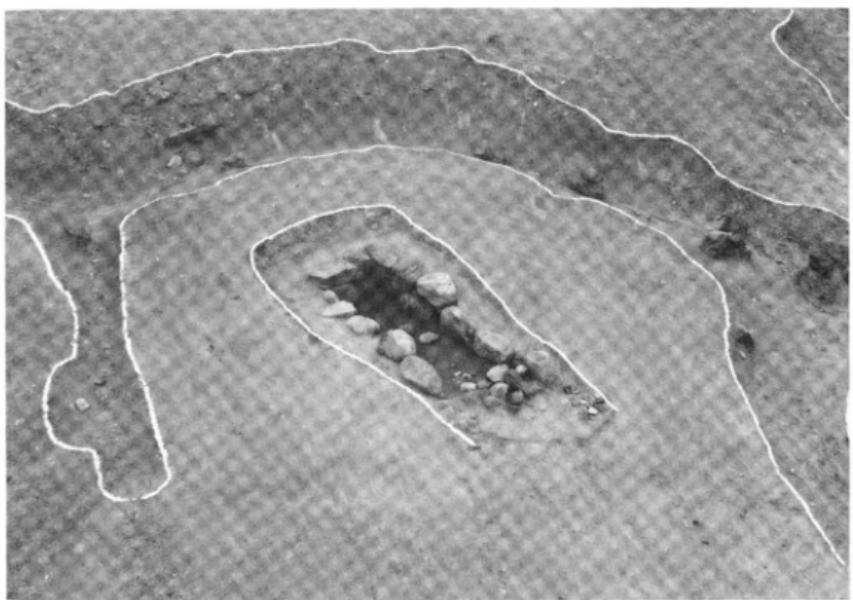
3号墳 石室



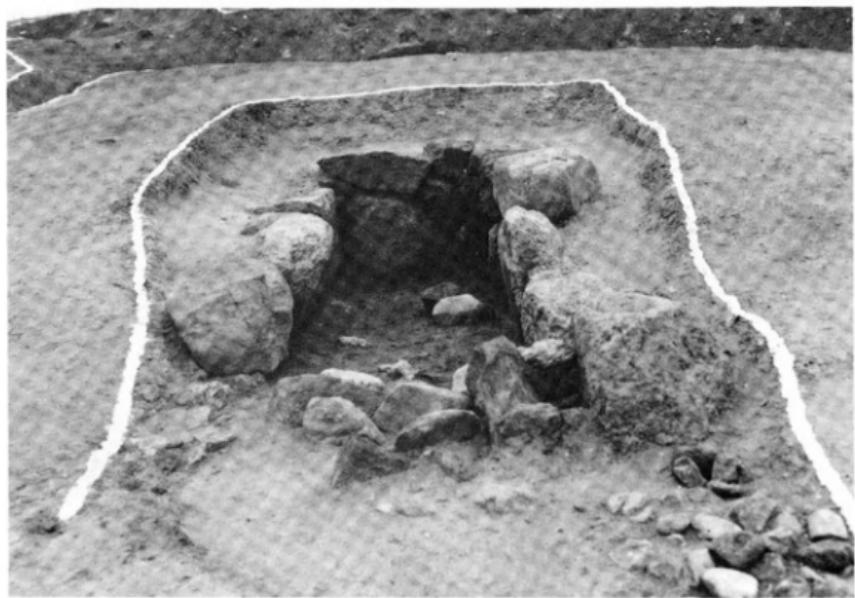
上—3号墳 奥壁  
下—4号墳 奥壁



4号墳 石室



4号墳 全景



4号墳 石室



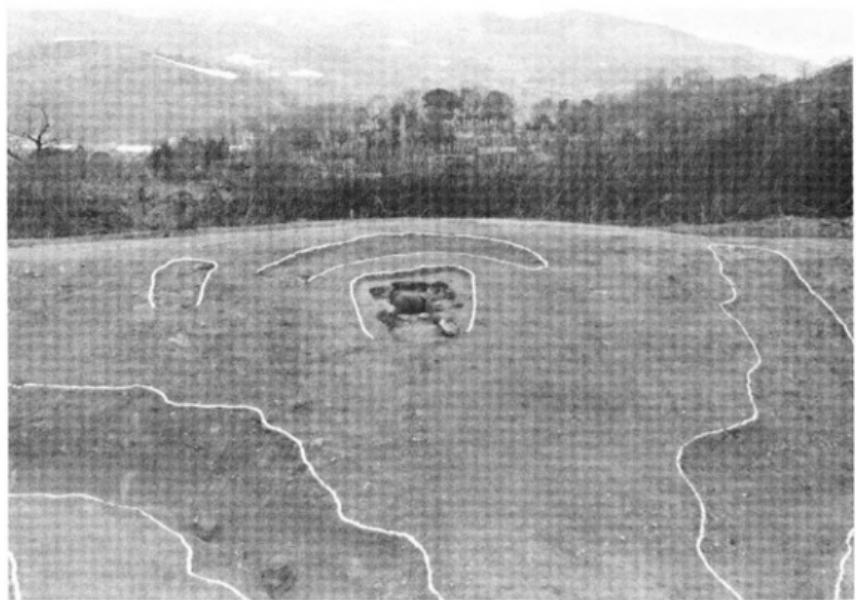
5号墳 全景



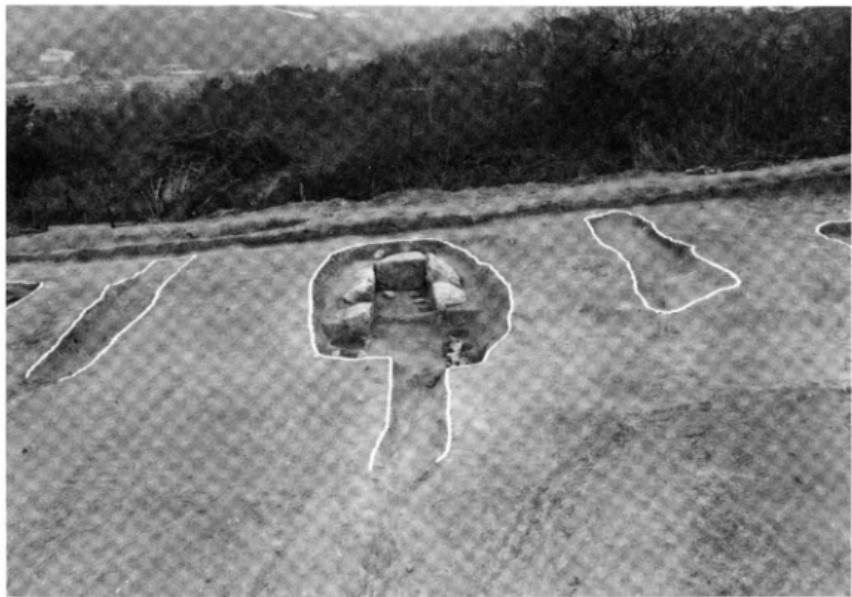
5号墳 石室



6号墳 石室



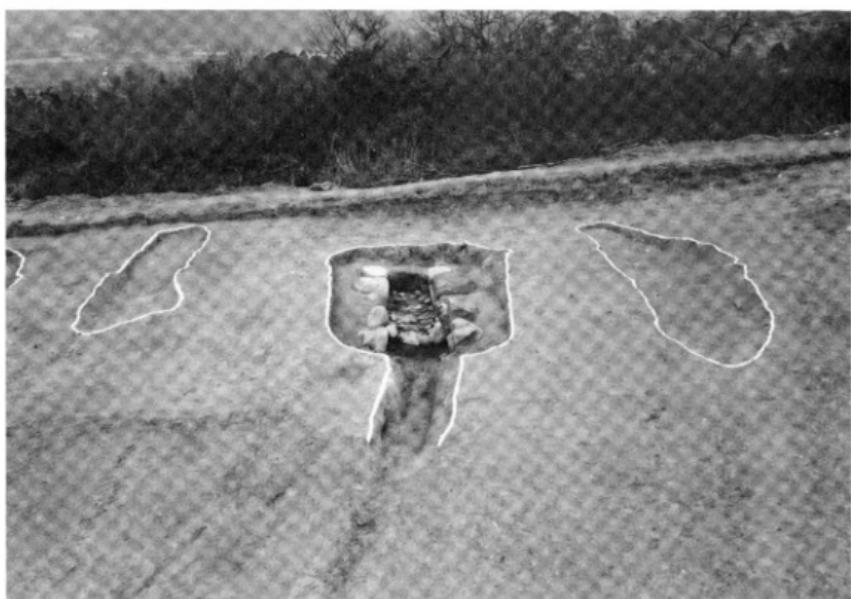
6号墳 全景



7号墳 全景



7号墳 石室



8号墳 全景



8号墳 石室



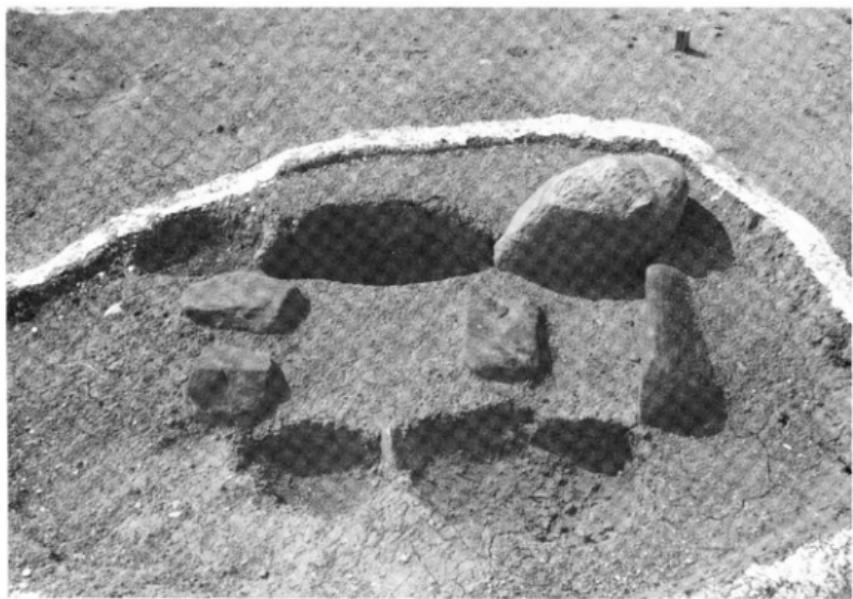
8号墳 前庭部



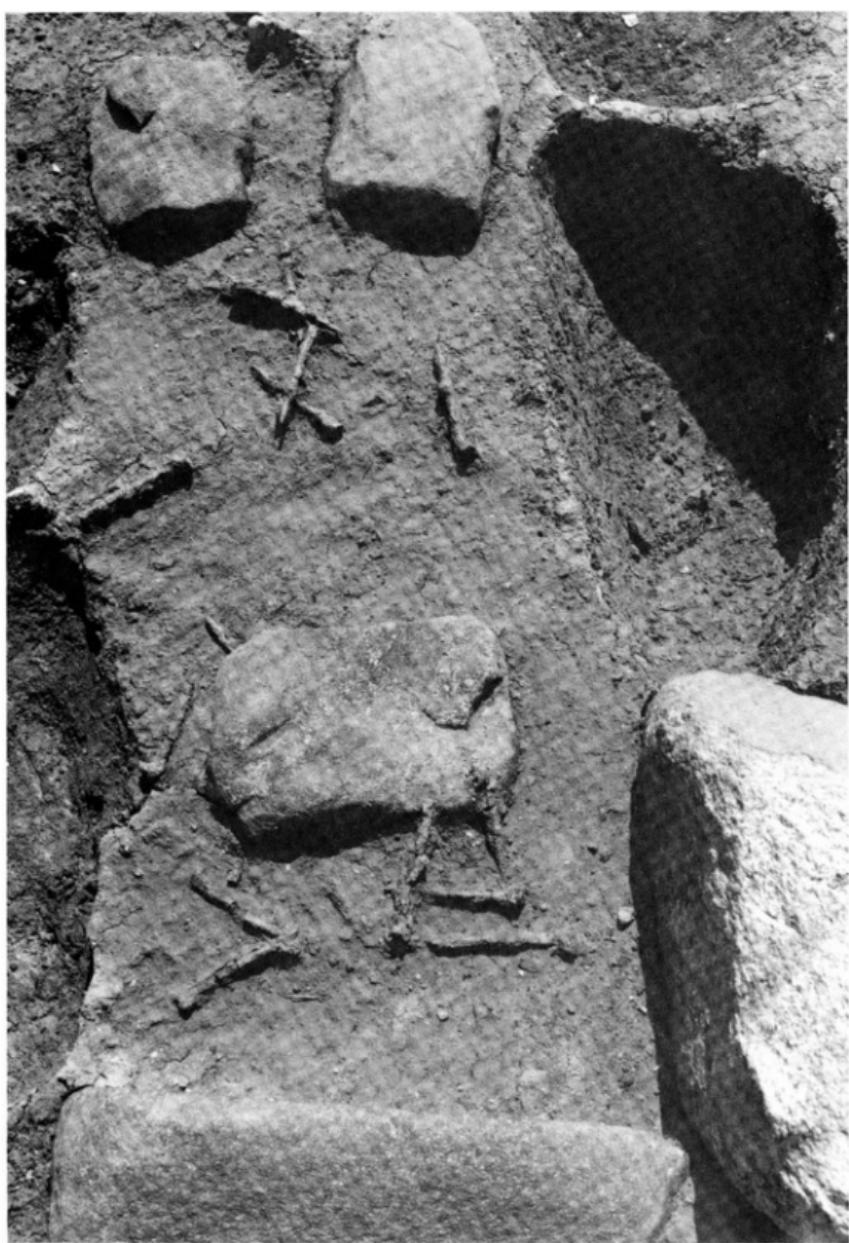
同 土器出土状況



9号墳 石室



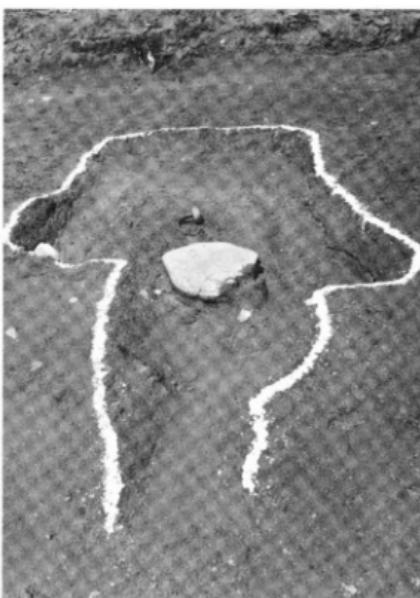
10号墳 石室



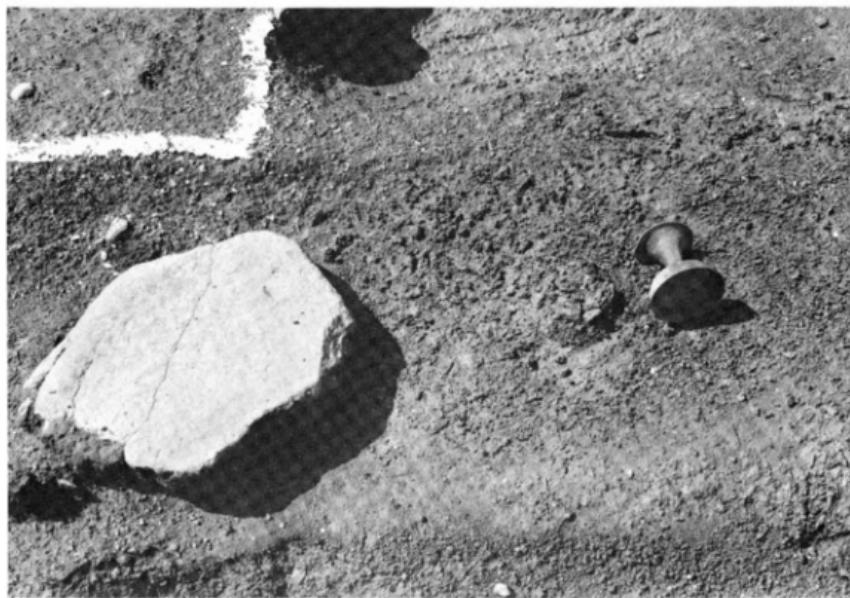
10号墳 釘出土状況



10号墳 石室



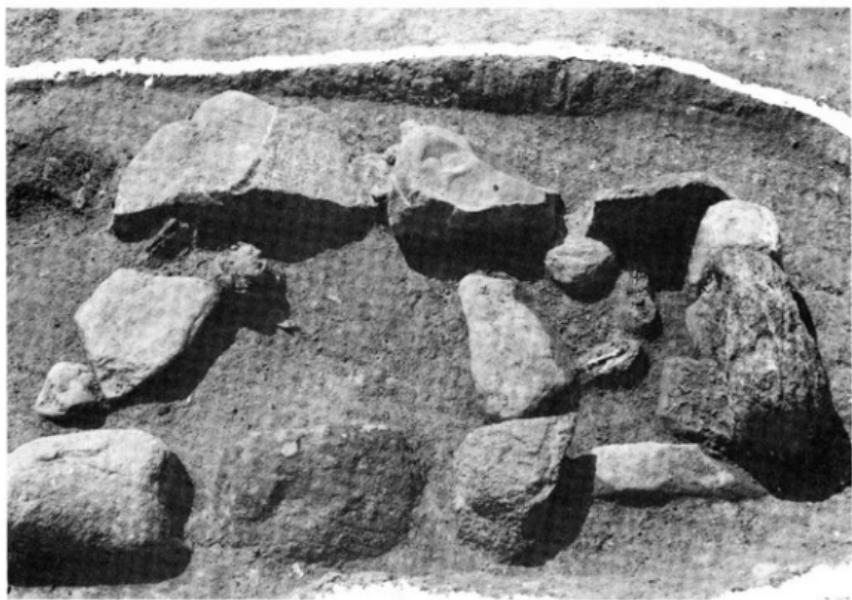
11号墳 石室



11号墳 棺台と副葬品



9号墳・12号墳 全景



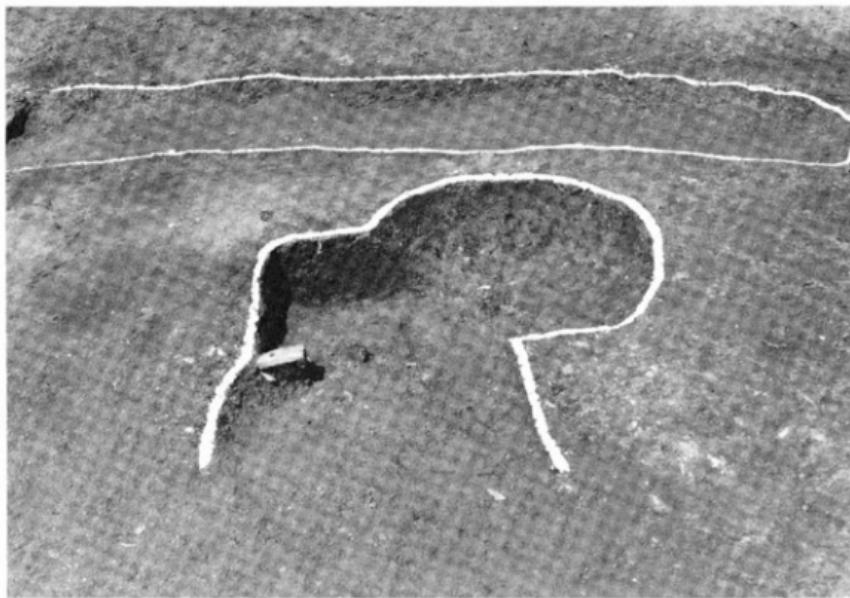
12号墳 石室



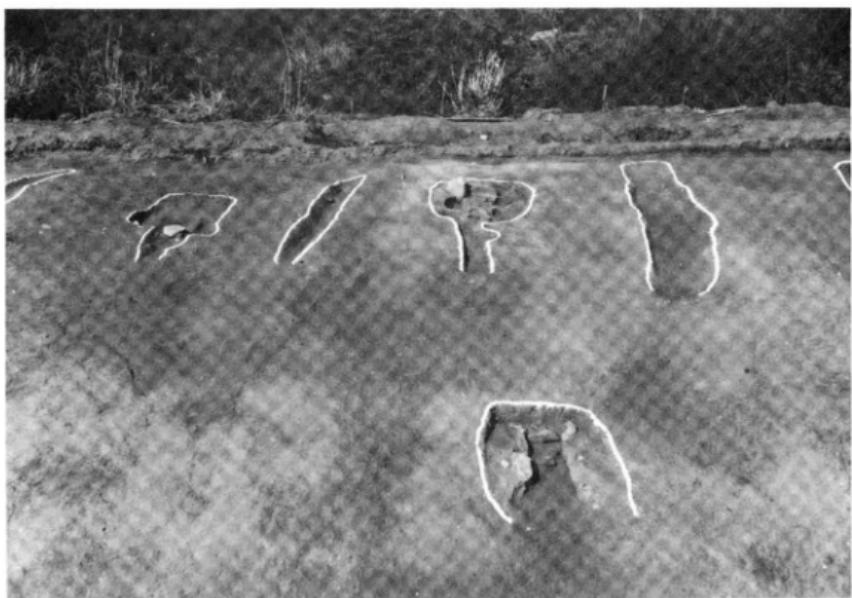
12号墳 石室



12号墳 石室



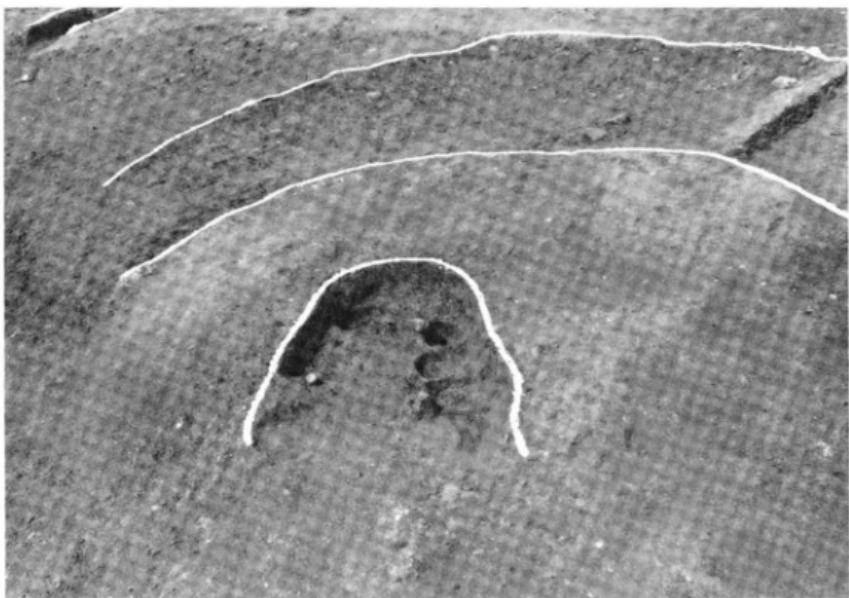
13号墳 全景



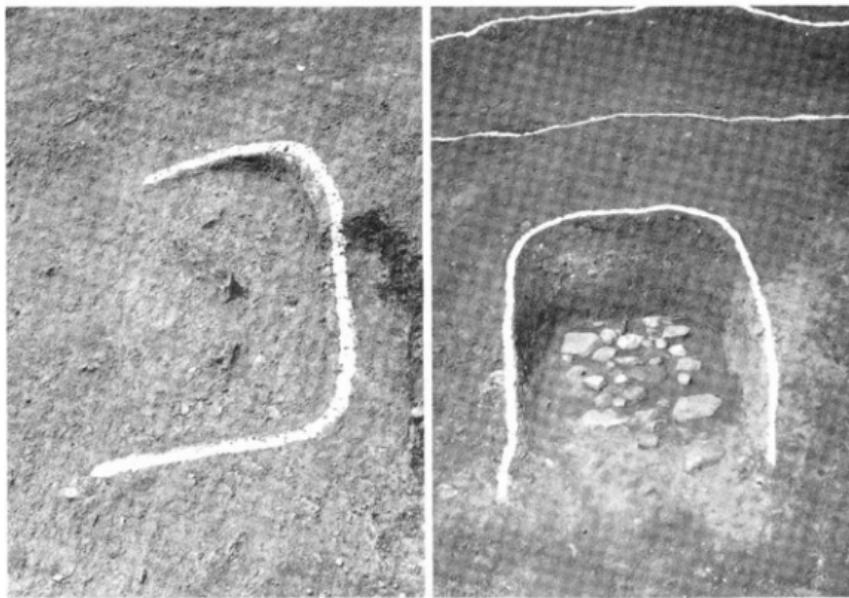
10号墳・11号墳・14号墳 全景



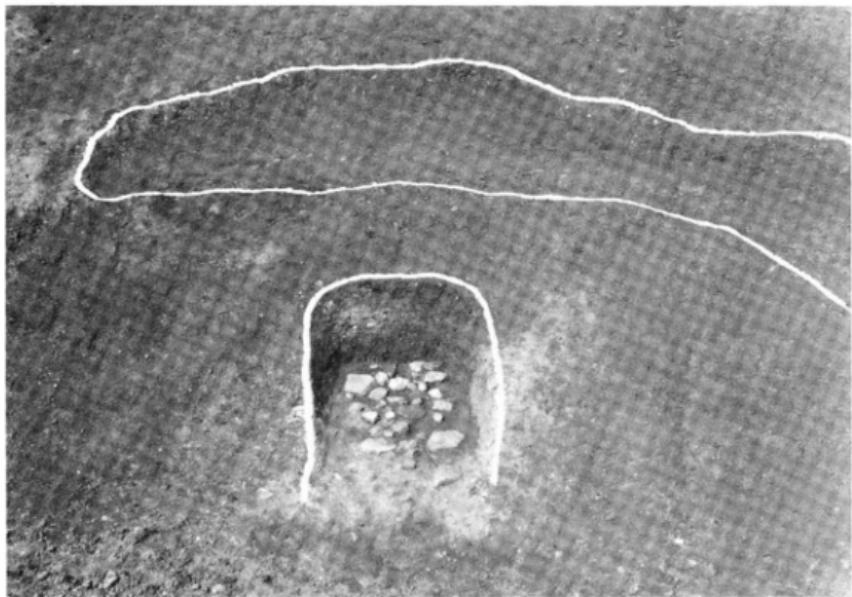
14号墳 石室



15号墳 全景



17号墳 主体部



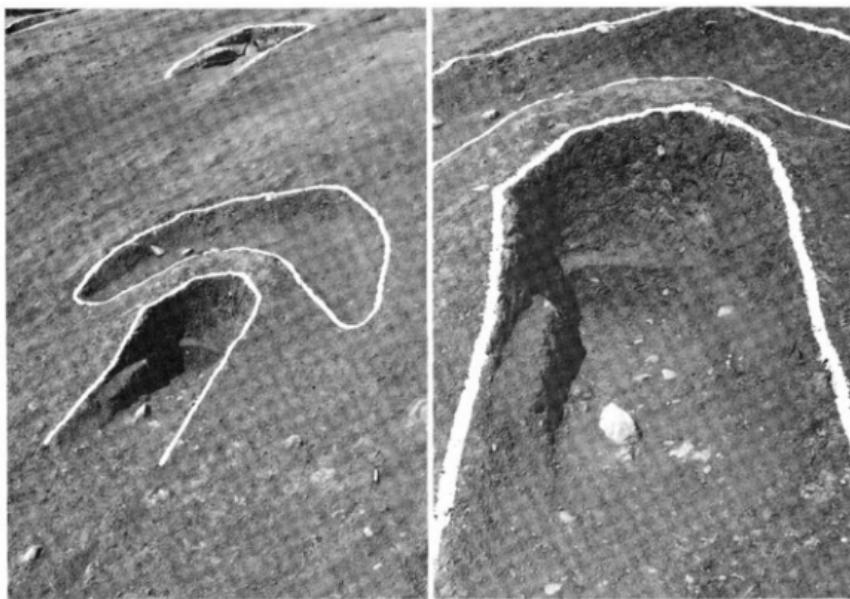
17号墳 全景



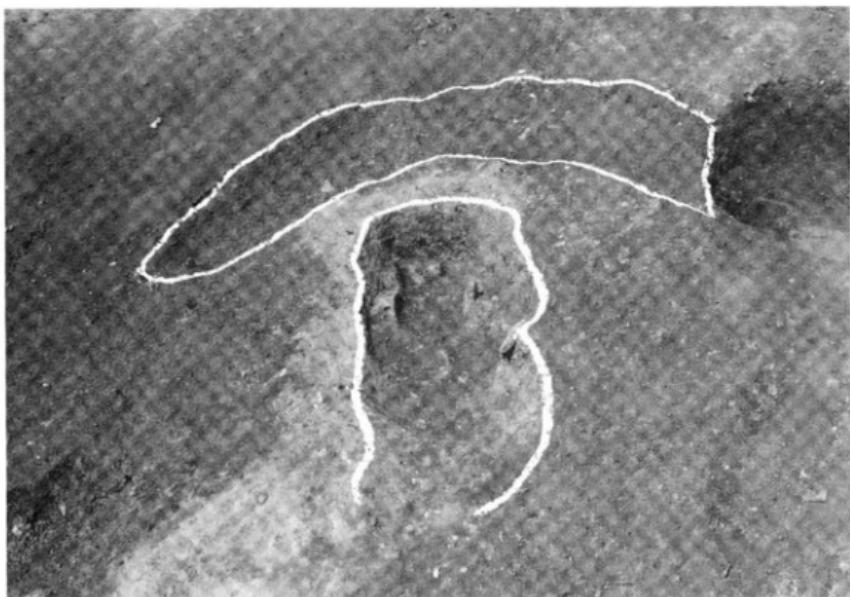
17号墳 耳環出土状況



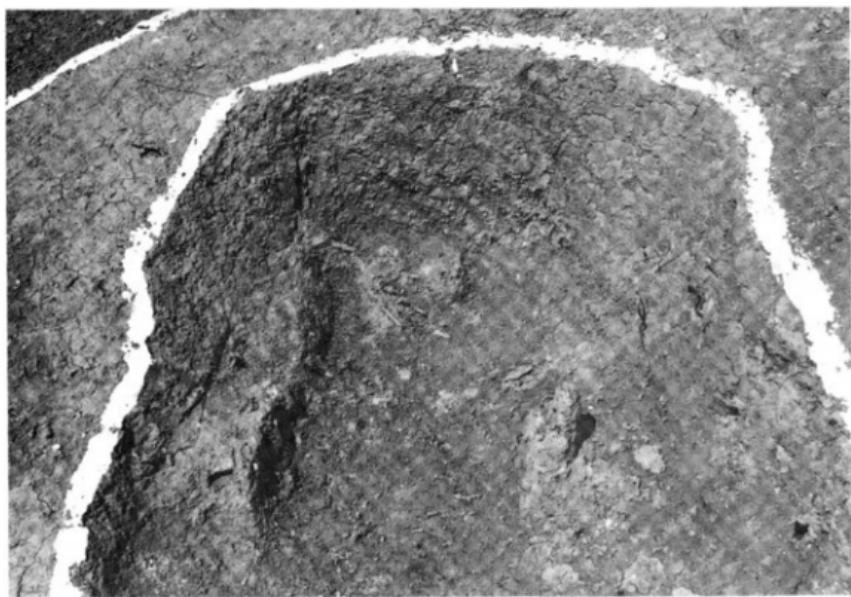
18号墳 全景



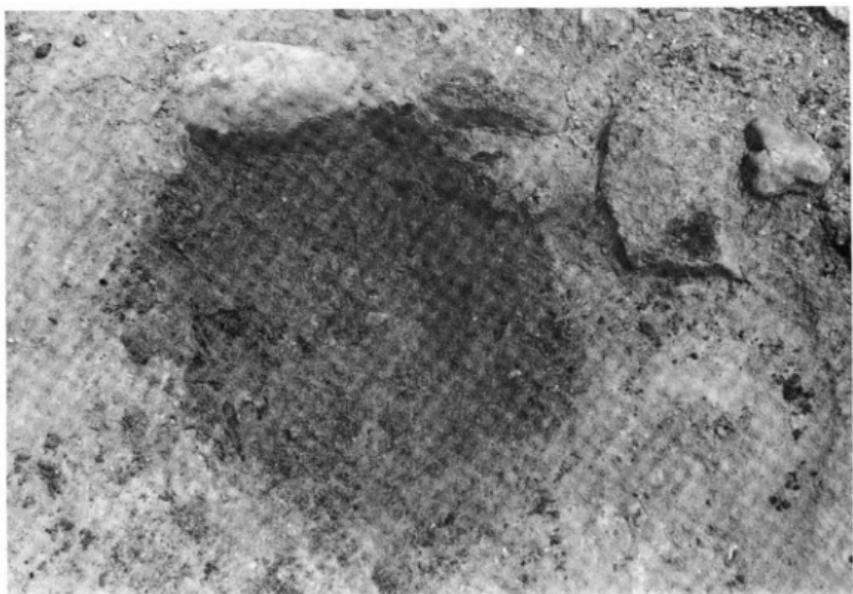
18号墳 主体部



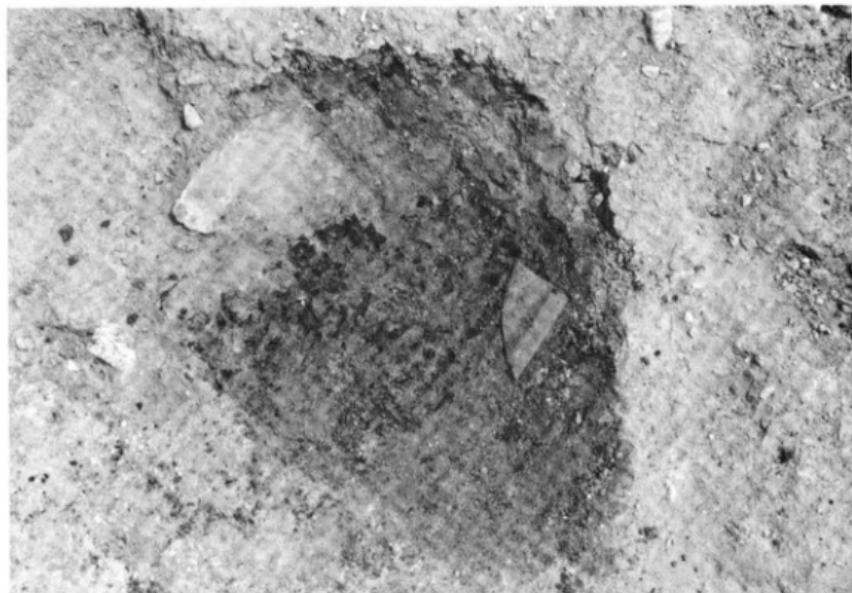
19号墳 全景



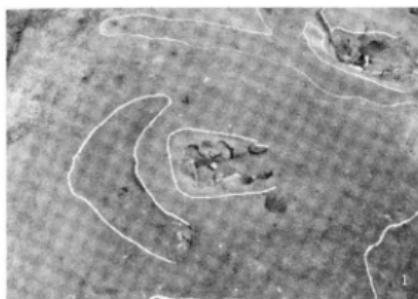
19号墳 主体部



土塙 1



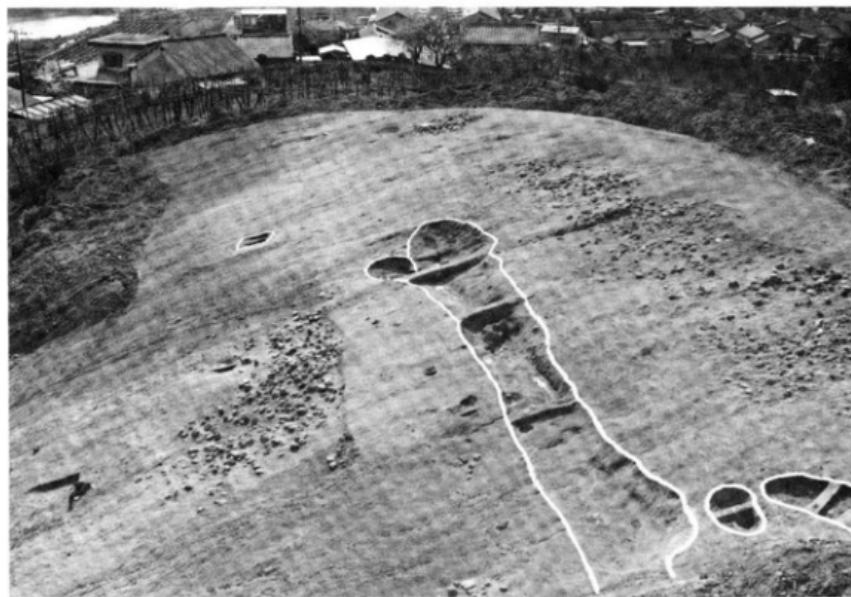
土塙 2



1. 6号墳 2. 西群 3. 8号墳前部 4. 17号墳断面  
5. 3号墳 6. 5号墳 7. 7号墳 8. 8号墳



墳墓群 全景（背後に平尾山古墳群）



墳墓群 全景（東より）



1号墓



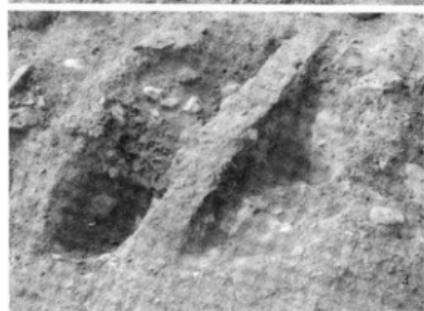
2号墓



3号墓



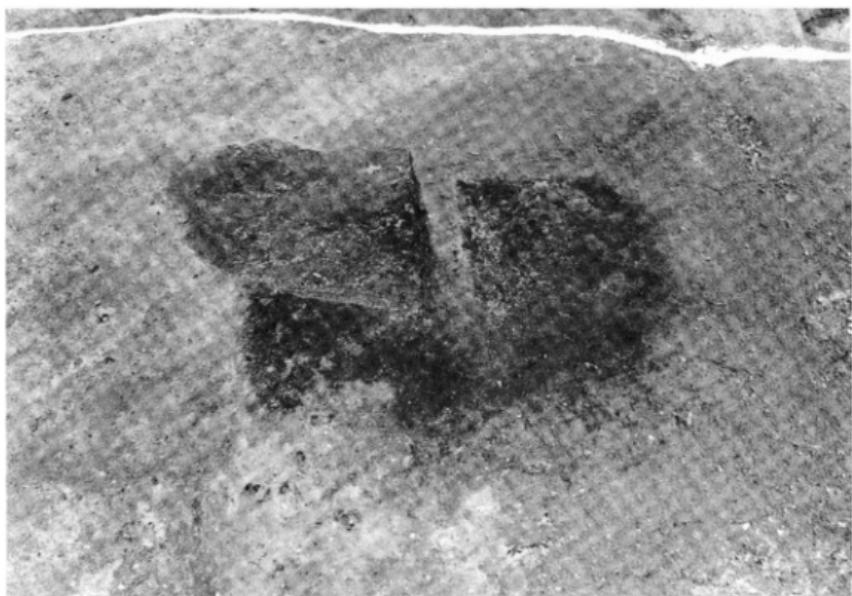
1



3



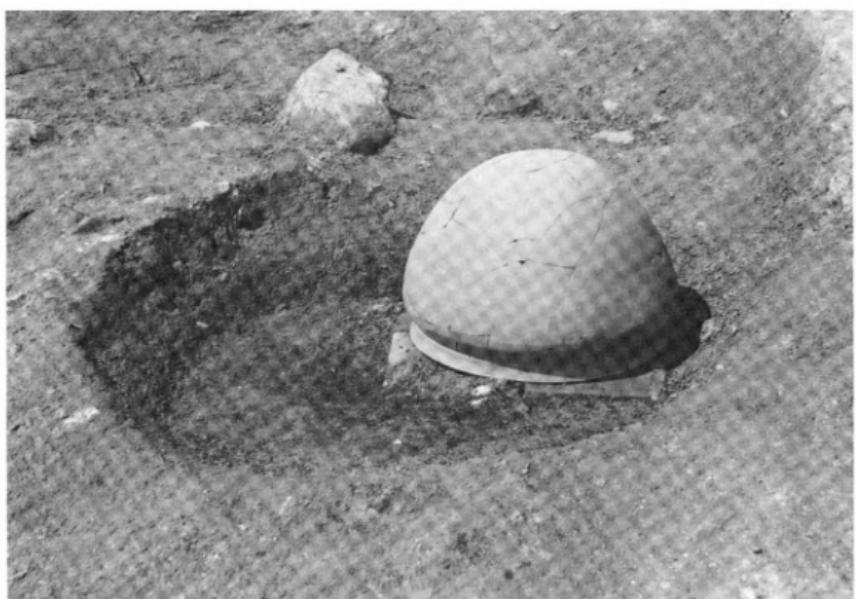
1. 1号墓 2. 2号墓 3. 3号墓 4. 4号墓



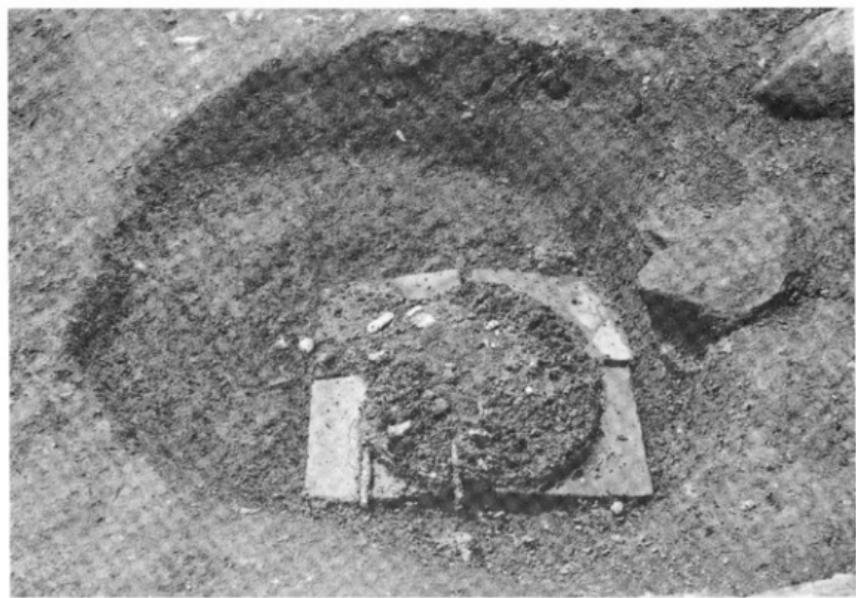
4号墓



8号墓 主体部



8号墓



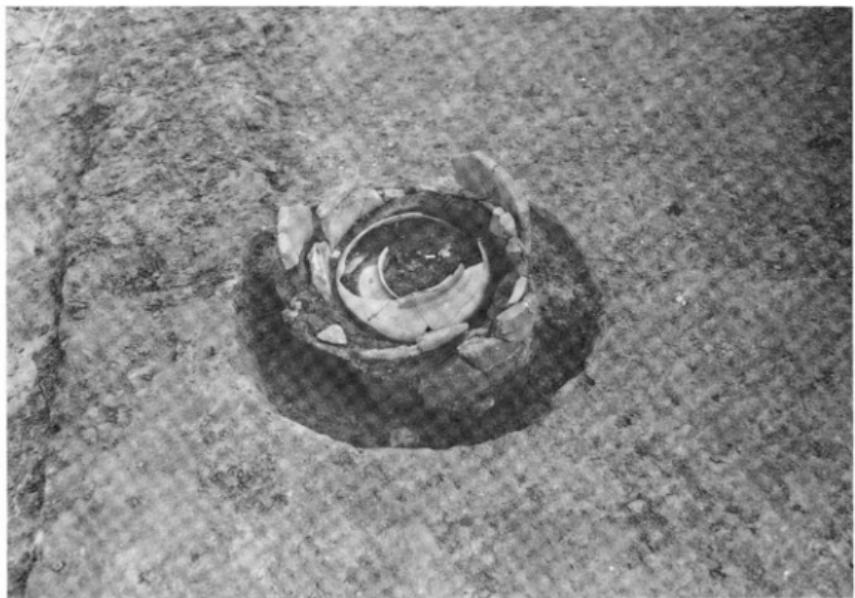
8号墓 塚上遺物



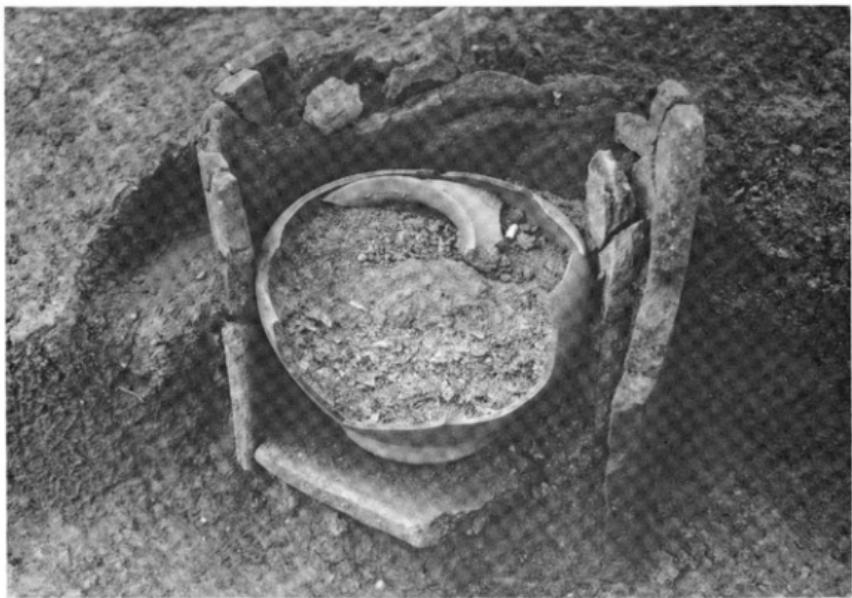
石敷き（東より）



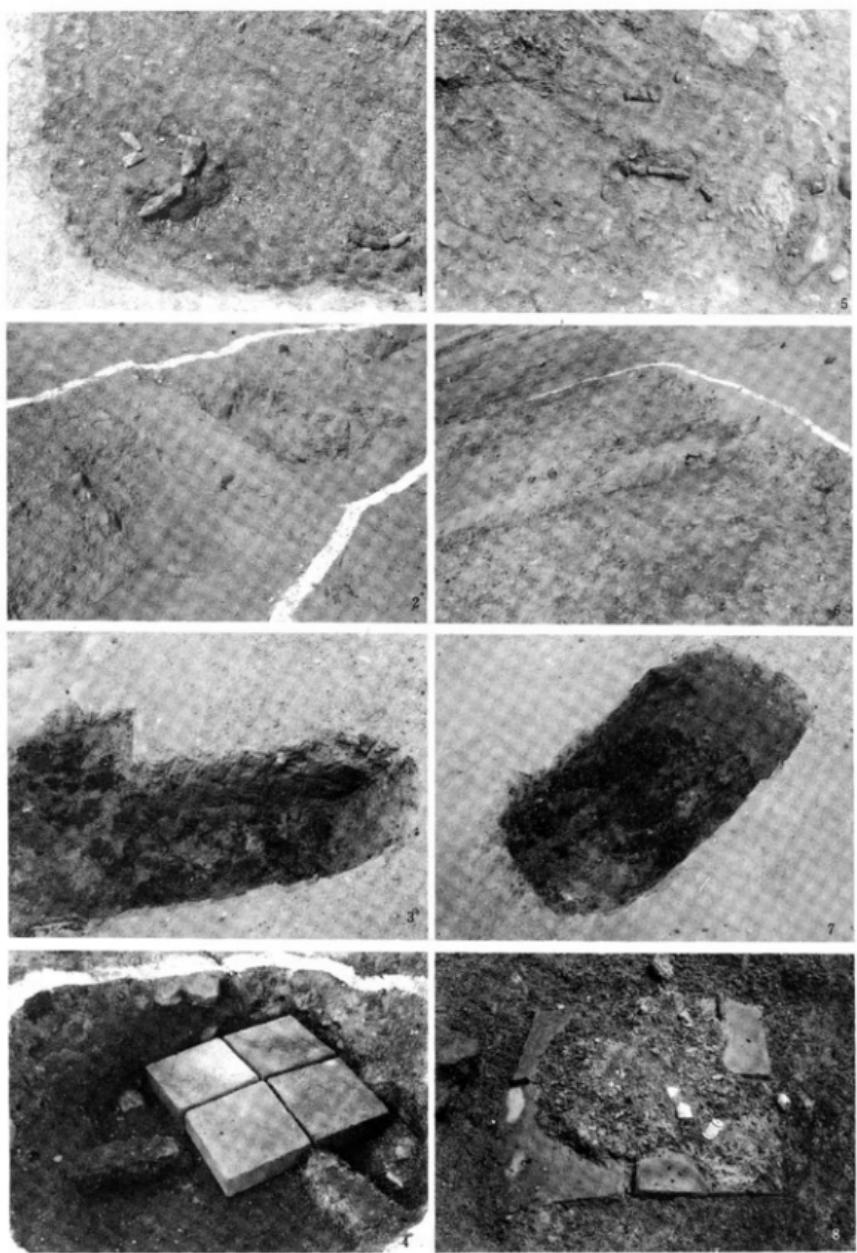
石敷き（南より）

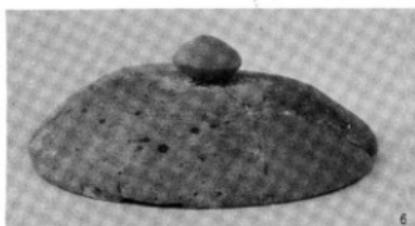


9号墓

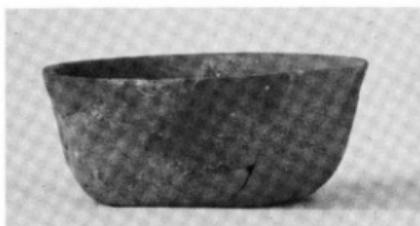


9号墓（断面）

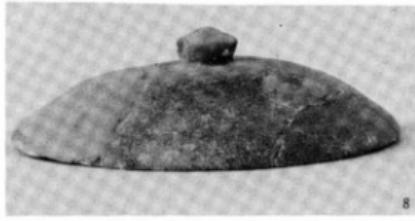




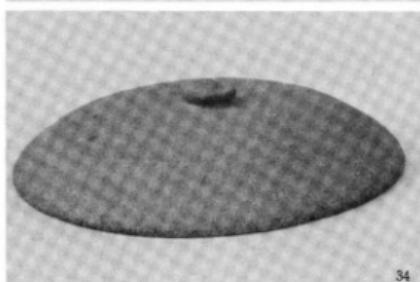
6



21



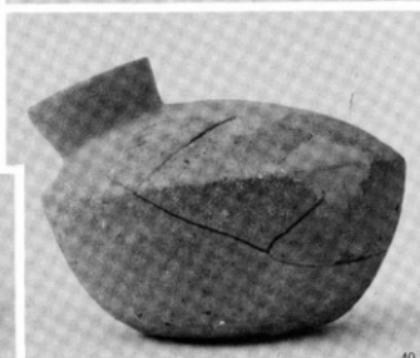
8



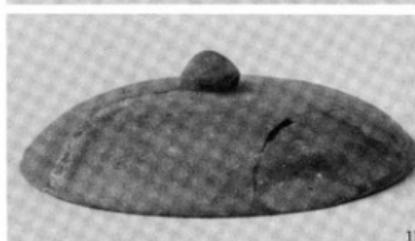
34



9



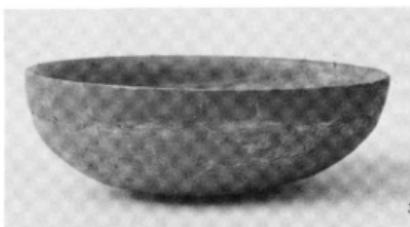
40



11



14



32



41



24



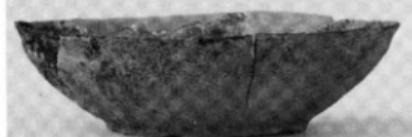
43



45



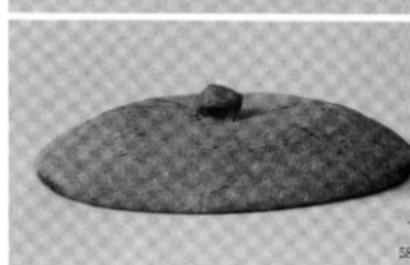
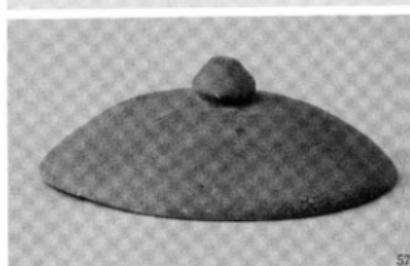
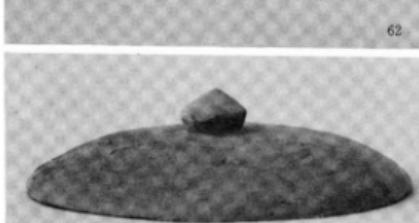
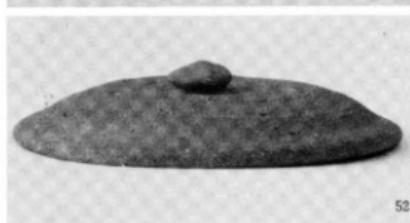
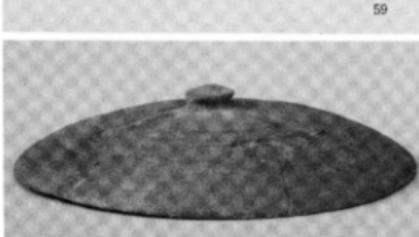
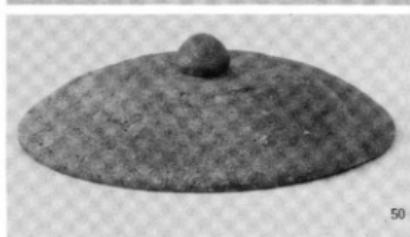
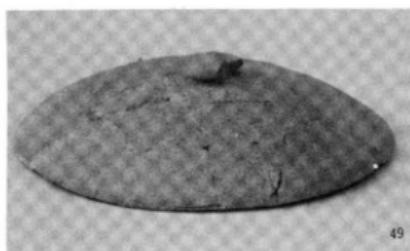
37

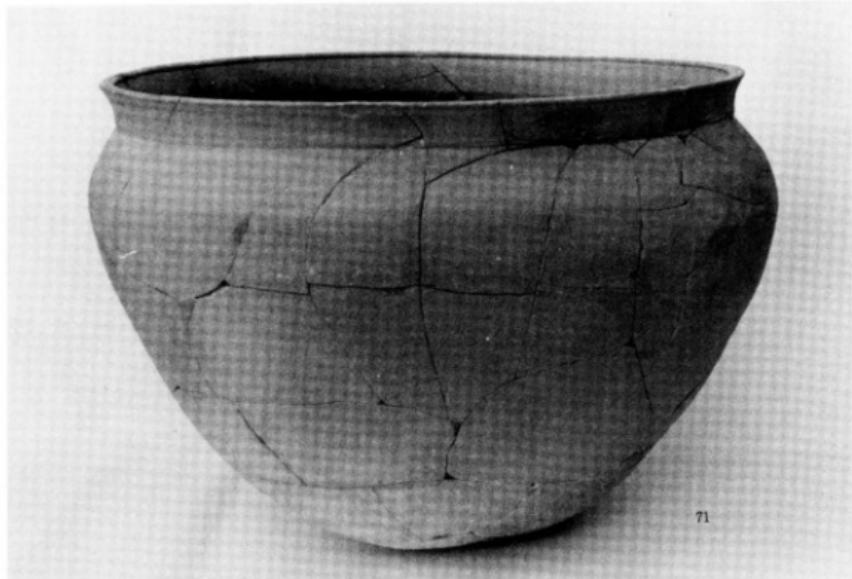


46



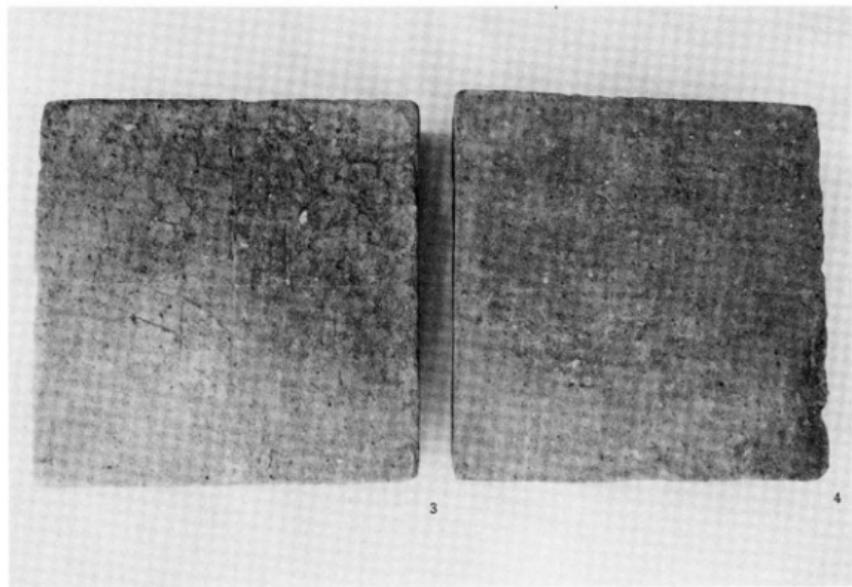
48





71

8号墓 墓群出土遺物



3

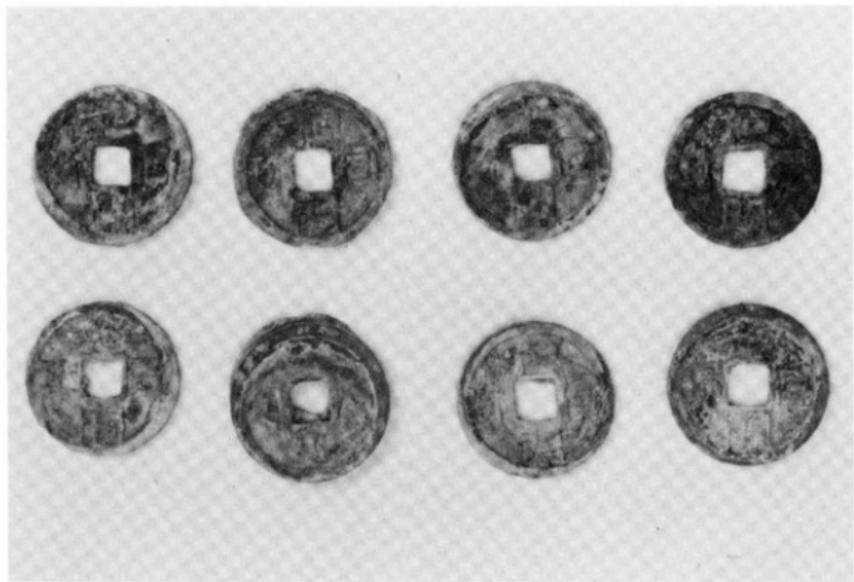
4

8号墓 墓群出土遺物



鉄釘（10号墳）

耳環（17号墳）



和銅開珍

田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 柏原市安堂町1番43号

TEL (0729)72-1501

発行年月日 昭和62年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

